

The upL^AT_EX 2_ε Sources

Ken Nakano & Japanese T_EX Development Community & TTK

2018/03/31 version u02

Contents

a	uplvers.dtx	1
1	upL^AT_EX 2_ε のバージョンの設定	1
1.1	L ^A T _E X 2.09 互換モードの抑制	2
1.2	起動時に表示するバナー	2
b	uplfonts.dtx	3
2	概要	3
2.1	DOCSTRIP プログラムのためのオプション	3
3	コード	4
4	デフォルト設定ファイル	4
4.1	テキストフォント	4
4.2	プリロードフォント	6
4.3	組版パラメータ	7
5	フォント定義ファイル	8
c	ukinsoku.dtx	10
6	禁則	10
6.1	半角文字に対する禁則	10
6.2	全角文字に対する禁則	11

7	文字間のスペース	14
7.1	ある英字と前後の漢字の間の制御	15
7.2	ある漢字と前後の英字の間の制御	18
d	ujclasses.dtx	20
8	オプションスイッチ	20
9	オプションの宣言	21
9.1	用紙オプション	22
9.2	サイズオプション	22
9.3	横置きオプション	23
9.4	トンボオプション	23
9.5	面付けオプション	23
9.6	組方向オプション	24
9.7	両面、片面オプション	24
9.8	二段組オプション	24
9.9	表題ページオプション	24
9.10	右左起こしオプション	24
9.11	数式のオプション	24
9.12	参考文献のオプション	25
9.13	日本語ファミリー宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字	25
9.14	ドラフトオプション	26
9.15	オプションの実行	26
10	フォント	26
11	レイアウト	30
11.1	用紙サイズの決定	30
11.2	段落の形	30
11.3	ページレイアウト	31
11.3.1	縦方向のスペース	31
11.3.2	本文領域	32
11.3.3	マージン	37
11.4	脚注	41
11.5	フロート	41
11.5.1	フロートパラメータ	42

11.5.2 フロートオブジェクトの上限値	43
12 改ページ（日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ）	44
13 ページスタイル	46
13.1 マークについて	46
13.2 plain ページスタイル	47
13.3 jpl@in ページスタイル	47
13.4 headnombre ページスタイル	48
13.5 footnombre ページスタイル	48
13.6 headings スタイル	48
13.7 bothstyle スタイル	49
13.8 myheading スタイル	51
14 文書コマンド	51
14.1 表題	51
14.2 概要	56
14.3 章見出し	57
14.3.1 マークコマンド	57
14.3.2 カウンタの定義	57
14.3.3 前付け、本文、後付け	59
14.3.4 ボックスの組み立て	60
14.3.5 part レベル	61
14.3.6 chapter レベル	63
14.3.7 下位レベルの見出し	65
14.3.8 付録	66
14.4 リスト環境	66
14.4.1 enumerate 環境	69
14.4.2 itemize 環境	70
14.4.3 description 環境	71
14.4.4 verse 環境	71
14.4.5 quotation 環境	71
14.4.6 quote 環境	72
14.5 フロート	72
14.5.1 figure 環境	72
14.5.2 table 環境	73
14.6 キャプション	74

14.7 コマンドパラメータの設定	75
14.7.1 array と tabular 環境	75
14.7.2 tabbing 環境	75
14.7.3 minipage 環境	75
14.7.4 framebox 環境	75
14.7.5 equation と eqnarray 環境	75
15 フォントコマンド	76
16 相互参照	77
16.1 目次	77
16.1.1 本文目次	79
16.1.2 図目次と表目次	82
16.2 参考文献	82
16.3 索引	83
16.4 脚注	84
17 今日の日付	84
18 初期設定	85
変更履歴	87
索引	92

File a uplvers.dtx

1 upL^AT_EX 2_ε のバージョンの設定

まず、このディストリビューションでの upL^AT_EX 2_ε の日付とバージョン番号を定義します。このバージョンの upL^AT_EX 2_ε のフォーマット作成では、pL^AT_EX 2_ε が提供する plcore.ltx の後から uplcore.ltx が読まなければならない。

まず、次のバージョンの pL^AT_EX が利用可能なことを確認します。

```
1 <*plcore>
2 \ifx\pfmtversion\@undefined
3   \errhelp{Please update your TeX installation; if not available,
4     obtain it^^Jmanually from CTAN
5       (https://ctan.org/pkg/uplatex) or from^^JGitHub
6       (https://github.com/texjporg/uplatex).}%
7   \errmessage{This should not happen!^^JThere should be some
8     inconsistency in your installation;^^Jtry
9       removing old 'uplatex.ltx' and install the
10      latest one}\@@end
11 \else
12   \ifnum\expandafter\@parse@version\pfmtversion//00\@nil<20180309
13     \errhelp{Please update your TeX installation; if not available,
14       obtain it^^Jmanually from CTAN
15         (https://ctan.org/pkg/platex) or from^^JGitHub
16         (https://github.com/texjporg/platex).}%
17     \errmessage{This version of upLaTeX2e requires pLaTeX2e 2018/03/09
18       or newer!^^JObtain a newer version of 'platex',
19       otherwise upLaTeX2e setup will^^Jnever succeed}\@@end
20   \fi
21 \fi
22 </plcore>
```

\pfmtname upL^AT_EX 2_ε のフォーマットファイル名とバージョンです。フォーマット名は
\pfmtversion pL^AT_EX 2_ε のもの (pL^AT_EX 2_ε) をそのまま引き継ぎ、バージョンは pL^AT_EX 2_ε の
\ppatch@level ものの末尾に “u02” のようにサフィックスを付けます。

```
23 <*plcore>
24 %\def\pfmtname{pLaTeX2e}
25 \def\uppatch@level{u02}
26 \edef\pfmtversion{\pfmtversion\uppatch@level}
27 </plcore>
```

1.1 L^AT_EX 2.09 互換モードの抑制

`\documentstyle` pL^AT_EX は、`\documentclass` の代わりに `\documentstyle` が使われると L^AT_EX 2.09 互換モードに入ります。しかし、upL^AT_EX は新しいマクロパッケージですので、L^AT_EX 2.09 互換モードをサポートしません。このため、`plcore.dtx` の定義を上書きして明確なエラーを出します。

```
28 <*plfinal>
29 \def\documentstyle{%
30   \@latex@error{upLaTeX does NOT support LaTeX 2.09 compatibility
31     mode.\MessageBreak Use \noexpand\documentclass instead}{%
32     \noexpand\documentstyle is an old convention of LaTeX 2.09,
33     which has been\MessageBreak obsolete since 1995. upLaTeX is
34     first released in 2007, so we do\MessageBreak not provide any
35     emulation of the LaTeX 2.09 author environment.\MessageBreak
36     New documents should use Standard LaTeX conventions, and
37     start\MessageBreak with the \noexpand\documentclass command.}%
38   \documentclass}
39 </plfinal>
```

1.2 起動時に表示するバナー

`\everyjob` upL^AT_EX 2_ε が起動されたときに表示される文字列は、pL^AT_EX 2_ε の中ですでに設定されています。

File b

uplfonts.dtx

2 概要

ここでは、和文書体を NFSS2 のインターフェイスで選択するためのコマンドやマクロについて説明をしています。また、フォント定義ファイルや初期設定ファイルなどの説明もしています。新しいフォント選択コマンドの使い方については、`fntguide.tex` や `usrguide.tex` を参照してください。

第 2 節 この節です。このファイルの概要と DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示しています。

第 3 節 実際のコードの部分です。

第 4 節 プリロードフォントやエラーフォントなどの初期設定について説明をしています。

第 5 節 フォント定義ファイルについて説明をしています。

2.1 DOCSTRIP プログラムのためのオプション

DOCSTRIP プログラムのためのオプションを次に示します。

オプション	意味
plcore	uplcore.ltx の断片を生成するオプションでしたが、削除。
trace	uptrace.sty を生成します。
JY2mc	横組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JY2gt	横組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
JT2mc	縦組用、明朝体のフォント定義ファイルを生成します。
JT2gt	縦組用、ゴシック体のフォント定義ファイルを生成します。
pldefs	upldefs.ltx を生成します。次の 4 つのオプションを付加することで、プリロードするフォントを選択することができます。デフォルトは 10pt です。
xpt	10pt プリロード
xipt	11pt プリロード
xiipt	12pt プリロード
ori	plfonts.tex に似たプリロード

3 コード

NFSS2 の拡張は、pL^AT_EX において plfonts.dtx から生成される plcore.ltx をそのまま利用するので、upL^AT_EX では定義しません。後方互換性のため、uptrace.sty を提供しますが、これも単に ptrace.sty を読み込むだけとします。

```
1 <*trace>
2 \NeedsTeXFormat{pLaTeX2e}
3 \ProvidesPackage{uptrace}
4     [2017/12/10 v1.6k-u02 Standard upLaTeX package (font tracing)]
5 \RequirePackageWithOptions{ptrace}
6 </trace>
```

デフォルト設定ファイル upldefs.ltx は、もともと uplcore.ltx の途中で読み込んでいましたが、2018 年以降の新しいコミュニティ版 upL^AT_EX では uplatex.ltx から読み込むことにしました。実際の中身については、第 4 節を参照してください。

4 デフォルト設定ファイル

ここでは、フォーマットファイルに読み込まれるデフォルト値を設定しています。この節での内容は upldefs.ltx に出力されます。このファイルの内容を uplcore.ltx に含めてもよいのですが、デフォルトの設定を参照しやすいように、別ファイルにしています。

プリロードサイズは、DOCSTRIP プログラムのオプションで変更することができます。これ以外の設定を変更したい場合は、upldefs.ltx を直接、修正するのではなく、このファイルを upldefs.cfg という名前でコピーをして、そのファイルに対して修正を加えるようにしてください。

```
7 <*pldefs>
8 \ProvidesFile{upldefs.ltx}
9     [2018/02/04 v1.6l-u02 upLaTeX Kernel (Default settings)]
10 </pldefs>
```

4.1 テキストフォント

テキストフォントのための属性やエラー書体などの宣言です。pL^AT_EX のデフォルトの横組エンコードは JY1、縦組エンコードは JT1 ですが、upL^AT_EX では横組エンコードは JY2、縦組エンコードは JT2 とします。縦横エンコード共通：

```
11 <*pldefs>
12 \DeclareKanjiEncodingDefaults{}{}
13 \DeclareErrorKanjiFont{JY2}{mc}{m}{n}{10}
```


横組エンコード :

```
14 \DeclareYokoKanjiEncoding{JY2}{-}{-}
15 \DeclareKanjiSubstitution{JY2}{mc}{m}{n}
```

縦組エンコード :

```
16 \DeclareTateKanjiEncoding{JT2}{-}{-}
17 \DeclareKanjiSubstitution{JT2}{mc}{m}{n}
```

縦横のエンコーディングのセット化 :

```
18 \KanjiEncodingPair{JY2}{JT2}
```

フォント属性のデフォルト値 :

```
19 \newcommand\mcdefault{mc}
20 \newcommand\gtdefault{gt}
21 \newcommand\kanjiencodingdefault{JY2}
22 \newcommand\kanjifamilydefault{\mcdefault}
23 \newcommand\kanjiseriessdefault{\mddefault}
24 \newcommand\kanjishapedefault{\updefault}
```

和文エンコードの指定 :

```
25 \kanjiencoding{JY2}
```

フォント定義 : これらの具体的な内容は第 5 節を参照してください。

```
26 \input{jy2mc.fd}
27 \input{jy2gt.fd}
28 \input{jt2mc.fd}
29 \input{jt2gt.fd}
```

フォントを有効にします。

```
30 \fontencoding{JT2}\selectfont
31 \fontencoding{JY2}\selectfont
```

`\textmc` テキストファミリを切り替えるためのコマンドです。 `lftntcmd.dtx` で定義されて
`\textgt` いる `\textrm` などに対応します。

```
32 \DeclareTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
33 \DeclareTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
```

`\em` 従来は `\em`, `\emph` で和文フォントの切り替えは行っていませんでしたが、和文フォ
`\emph` ントも `\gtfamily` に切り替えるようにしました。 \LaTeX <2015/01/01>で追加され
`\eminnershape` た `\eminnershape` も取り入れ、強調コマンドを入れ子にする場合の書体を自由に
再定義できるようになりました。

```
34 </pldefs>
35 <latexrelease>\plIncludeInRelease{2016/04/17}{\eminnershape}{\eminnershape}%
36 <*pldefs | latexrelease>
37 \DeclareRobustCommand\em
38     {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
39         \eminnershape \else \gtfamily \itshape \fi}%
40 \def\eminnershape{\mcfamily \upshape}%
```

```

41 </pldefs | platexrelease>
42 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
43 <platexrelease>\plIncludeInRelease{2015/01/01}{\eminnershape}{\eminnershape}%
44 <platexrelease>\DeclareRobustCommand\em
45 <platexrelease>          {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
46 <platexrelease>          \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
47 <platexrelease>\def\eminnershape{\upshape}% defined by LaTeX, but not used by pLaTeX
48 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
49 <platexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\eminnershape}{\eminnershape}%
50 <platexrelease>\DeclareRobustCommand\em
51 <platexrelease>          {\@nomath\em \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
52 <platexrelease>          \mcfamily \upshape \else \gtfamily \itshape \fi}
53 <platexrelease>\let\eminnershape\undefined
54 <platexrelease>\plEndIncludeInRelease
55 <*pldefs>

```

4.2 プリロードフォント

あらかじめフォーマットファイルにロードされるフォントの宣言です。DOCSTRIP プログラムのオプションでロードされるフォントのサイズを変更することができます。uplfmt.ins では xpt を指定しています。

```

56 <*xpt>
57 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
58 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
59 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}{5,7,10,12}
60 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}{5,7,10,12}
61 </xpt>
62 <*xipt>
63 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}
64 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
65 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}{5,7,10.95,12}
66 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}{5,7,10.95,12}
67 </xipt>
68 <*xipt>
69 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
70 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
71 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}{7,9,12,14.4}
72 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}{7,9,12,14.4}
73 </xipt>
74 <*ori>
75 \DeclarePreloadSizes{JY2}{mc}{m}{n}
76      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
77 \DeclarePreloadSizes{JY2}{gt}{m}{n}
78      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
79 \DeclarePreloadSizes{JT2}{mc}{m}{n}
80      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}
81 \DeclarePreloadSizes{JT2}{gt}{m}{n}
82      {5,6,7,8,9,10,10.95,12,14.4,17.28,20.74,24.88}

```

83 `\ori`

4.3 組版パラメータ

禁則パラメータや文字間へ挿入するスペースの設定などです。実際の各文字への禁則パラメータおよびスペースの挿入の許可設定などは、`ukinsoku.tex` で行なっています。具体的な設定については、`ukinsoku.dtx` を参照してください。

```
84 \InputIfFileExists{ukinsoku.tex}%
85   {\message{Loading kinsoku patterns for japanese.}}
86   {\errhelp{The configuration for kinsoku is incorrectly installed.^^J%
87             If you don't understand this error message you need
88             to seek^^Jexpert advice.}%
89   \errmessage{OOPS! I can't find any kinsoku patterns for japanese^^J%
90             \space Think of getting some or the
91             uplatex2e setup will never succeed}\@@end}
```

組版パラメータの設定をします。`\kanjiskip` は、漢字と漢字の間に挿入されるグルーです。`\noautospaceing` で、挿入を中止することができます。デフォルトは `\autospaceing` です。

```
92 \kanjiskip=0pt plus .4pt minus .5pt
93 \autospaceing
```

`\xkanjiskip` は、和欧文間に自動的に挿入されるグルーです。`\noautoxspaceing` で、挿入を中止することができます。デフォルトは `\autoxspaceing` です。

```
94 \xkanjiskip=.25zw plus1pt minus1pt
95 \autoxspaceing
```

`\jcharwidowpenalty` は、パラグラフに対する禁則です。パラグラフの最後の行が 1 文字だけにならないように調整するために使われます。

```
96 \jcharwidowpenalty=500
```

\< 最後に、`\inhibitglue` の簡略形を定義します。このコマンドは、和文フォントのメトリック情報から、自動的に挿入されるグルーの挿入を禁止します。

2014 年の p_TE_X の `\inhibitglue` のバグ修正に伴い、`\inhibitglue` が垂直モードでは効かなくなりました。L^AT_EX では垂直モードと水平モードの区別が隠されていますので、pL^AT_EX の追加命令である `\<` は段落頭でも効くように修正します。

`\DeclareRobustCommand` を使うと `\protect` の影響で前方の文字に対する `\inhibitglue` が効かなくなるので、e-_TE_X の `\protected` が必要です。

```
97 \pldefs
98 \pltexrelease\plIncludeInRelease{2017/10/28}{\<}
99 \pltexrelease          {\inhibitglue in vertical mode}%
100 \*pldefs|platexrelease
101 \ifx\protected\@undefined
102 \def\<{\inhibitglue}
103 \else
```

```

104 \protected\def\<\ifvmode\leavevmode\fi\inhibitglue}
105 \fi
106 \</pldefs | latexrelease>
107 \<latexrelease>\plEndIncludeInRelease
108 \<latexrelease>\plIncludeInRelease{0000/00/00}{\<}
109 \<latexrelease>{\inhibitglue in vertical mode}%
110 \<latexrelease>\def\<\inhibitglue}
111 \<latexrelease>\plEndIncludeInRelease
112 \<*pldefs>

```

ここまでが、pldefs.ltx の内容です。

```
113 \</pldefs>
```

5 フォント定義ファイル

ここでは、フォント定義ファイルの設定をしています。フォント定義ファイルは、 \LaTeX のフォント属性を \TeX フォントに置き換えるためのファイルです。記述方法についての詳細は、fntguide.tex を参照してください。

欧文書体の設定については、cmfonts.fdd や slides.fdd など参照してください。skfonts.fdd には、写研代用書体を使うためのパッケージとフォント定義が記述されています。

```

114 \<JY2mc>\ProvidesFile{jy2mc.fd}
115 \<JY2gt>\ProvidesFile{jy2gt.fd}
116 \<JT2mc>\ProvidesFile{j2t2mc.fd}
117 \<JT2gt>\ProvidesFile{j2t2gt.fd}
118 \<JY2mc,JY2gt,JT2mc,JT2gt> [2018/07/03 v1.6q-u02 KANJI font defines]

```

横組用、縦組用ともに、明朝体のシリーズ **bx** がゴシック体となるように宣言しています。また、シリーズ **b** は同じ書体の **bx** と等価になるように宣言します。

\pLaTeX では従属書体に OT1 エンコーディングを指定していましたが、 \upLaTeX では T1 エンコーディングを用いるように変更しました。また、要求サイズ（指定されたフォントサイズ）が 10pt のとき、全角幅の実寸が 9.62216pt となるようにしますので、和文スケール値（ $1\text{zw} \div \text{要求サイズ}$ ）は $9.62216\text{pt}/10\text{pt} = 0.962216$ です。 \upjis 系のメトリックは全角幅が 10pt でデザインされているので、これを 0.962216 倍で読込みます。

```

119 \<*JY2mc>
120 \DeclareKanjiFamily{JY2}{mc}{}
121 \DeclareRelationFont{JY2}{mc}{m}{\<T1>\<cmr>{m}{\<}
122 \DeclareRelationFont{JY2}{mc}{bx}{\<T1>\<cmr>\<bx>{\<}
123 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{\<->s*[0.962216]\upjisr-h}{\<}
124 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{bx}{n}{\<->ssub*gt/m/n}{\<}
125 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{b}{n}{\<->ssub*mc/bx/n}{\<}
126 \</JY2mc>
127 \<*JT2mc>

```

```

128 \DeclareKanjiFamily{JT2}{mc}{}
129 \DeclareRelationFont{JT2}{mc}{m}{}{T1}{cmr}{m}{}
130 \DeclareRelationFont{JT2}{mc}{bx}{}{T1}{cmr}{bx}{}
131 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisr-v}{}
132 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
133 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
134 </JT2mc>
135 <*JY2gt>
136 \DeclareKanjiFamily{JY2}{gt}{}
137 \DeclareRelationFont{JY2}{gt}{m}{}{T1}{cmr}{bx}{}
138 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisg-h}{}
139 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
140 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
141 </JY2gt>
142 <*JT2gt>
143 \DeclareKanjiFamily{JT2}{gt}{}
144 \DeclareRelationFont{JT2}{gt}{m}{}{T1}{cmr}{bx}{}
145 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[0.962216]upjisg-v}{}
146 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
147 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
148 </JT2gt>

```

File c

ukinsoku.dtx

このファイルは、禁則と文字間スペースの設定について説明をしています。日本語 T_EX の機能についての詳細は、『日本語 T_EX テクニカルブック I』を参照してください。

なお、このファイルのコード部分は、pT_EX や pL^AT_EX で配布されている kinsoku.tex に、JIS X 0213 の定義文字などの設定を追加したものです。

```
1 <*plcore>
```

6 禁則

ある文字を行頭禁則の対象にするには、`\prebreakpenalty` に正の値を指定します。ある文字を行末禁則の対象にするには、`\postbreakpenalty` に正の値を指定します。数値が大きいほど、行頭、あるいは行末で改行されにくくなります。

6.1 半角文字に対する禁則

ここでは、半角文字に対する禁則の設定を行なっています。

```
2 %%
3 %% 行頭、行末禁則パラメータ
4 %%
5 %% 1byte characters
6 \prebreakpenalty'!=10000
7 \prebreakpenalty'"=10000
8 \postbreakpenalty'\#=500
9 \postbreakpenalty'\$=500
10 \prebreakpenalty'\%=500
11 \prebreakpenalty'\&=500
12 \postbreakpenalty'\ '=10000
13 \prebreakpenalty'\ '=10000
14 \prebreakpenalty')=10000
15 \postbreakpenalty' (=10000
16 \prebreakpenalty'*=500
17 \prebreakpenalty'+=500
18 \prebreakpenalty'-=10000
19 \prebreakpenalty'.=10000
20 \prebreakpenalty',=10000
21 \prebreakpenalty'/=500
22 \prebreakpenalty';=10000
23 \prebreakpenalty'?=10000
24 \prebreakpenalty':=10000
25 \prebreakpenalty']=10000
```

26 \postbreakpenalty' [=10000

6.2 全角文字に対する禁則

ここでは、全角文字に対する禁則の設定を行なっています。

upTeX/upLaTeX の場合、JIS X 0213 (日本)・KS C 5601 (韓国)・GB2312 (中国)・Big5 (台湾) などの文字集合に含まれる、いわゆる全角文字の一部が、8-bit Latin と同じコードポイントを共有します。すなわち、同じコードポイントが、CJK トークンとしても non-CJK トークンとしても有効に扱われることがあります。以下に例を示します¹。

- 0xA1: i (CJK) vs. a (non-CJK)
- 0xAB: « (CJK) vs. n (non-CJK)
- 0xB7: · (CJK) vs. u (non-CJK)
- 0xB9: ¹ (CJK) vs. z (non-CJK)
- ...

ukinsoku.tex では CJK トークンを優先した禁則設定を行っています。この設定により、同じコードポイントを non-CJK トークンとして扱う場合に予期せず Latin-1 の文字が禁則対象になってしまいます。問題が起きた場合は禁則の設定を調整してください。

なお、以下で複数回登場する "AA と "BA はそれぞれ^aと^oですが、LaTeX 2_ε 2018-04-01 で UTF-8 入力になった影響で、これらの文字は macrocode 環境内のコードに (たとえ % に続くコメントであっても) 書けなくなってしまったようです。これらの文字で docstrip 処理中にエラー

```
! Argument of \@font@info has an extra }.
```

が出ないように、コメントからも削除しました。

```
27 %全角文字
28 \prebreakpenalty' =10000
29 \prebreakpenalty'。 =10000
30 \prebreakpenalty', =10000
31 \prebreakpenalty'. =10000
32 \prebreakpenalty'· =10000
33 \prebreakpenalty': =10000
34 \prebreakpenalty'; =10000
35 \prebreakpenalty'? =10000
```

¹ここで表示している non-CJK トークンとして扱われた結果は、upLaTeX のデフォルト従属欧文エンコーディングである T1 の場合のものです。

```

36 \prebreakpenalty' !=10000
37 \prebreakpenalty'^ =10000%\jis"212B
38 \prebreakpenalty'^ =10000%\jis"212C
39 \prebreakpenalty'^ =10000%\jis"212D
40 \postbreakpenalty'^ =10000%\jis"212E
41 \prebreakpenalty'^ =10000%\jis"2139
42 \prebreakpenalty'^...=250%\jis"2144
43 \prebreakpenalty'^..=250%\jis"2145
44 \postbreakpenalty'^ ' =10000%\jis"2146
45 \prebreakpenalty'^ ' =10000%\jis"2147
46 \postbreakpenalty'^ " =10000%\jis"2148
47 \prebreakpenalty'^ " =10000%\jis"2149
48 \prebreakpenalty'^ ) =10000
49 \postbreakpenalty'^ ( =10000
50 \prebreakpenalty'^ } =10000
51 \postbreakpenalty'^ { =10000
52 \prebreakpenalty'^ ] =10000
53 \postbreakpenalty'^ [ =10000
54 %%\postbreakpenalty'^ ' =10000
55 %%\prebreakpenalty'^ ' =10000
56 \postbreakpenalty'^ [ =10000%\jis"214C
57 \prebreakpenalty'^ ] =10000%\jis"214D
58 \postbreakpenalty'^ < =10000%\jis"2152
59 \prebreakpenalty'^ > =10000%\jis"2153
60 \postbreakpenalty'^ 《 =10000%\jis"2154
61 \prebreakpenalty'^ 》 =10000%\jis"2155
62 \postbreakpenalty'^ 「 =10000%\jis"2156
63 \prebreakpenalty'^ 」 =10000%\jis"2157
64 \postbreakpenalty'^ 『 =10000%\jis"2158
65 \prebreakpenalty'^ 』 =10000%\jis"2159
66 \postbreakpenalty'^ [ =10000%\jis"215A
67 \prebreakpenalty'^ ] =10000%\jis"215B
68 \prebreakpenalty'^ − =10000
69 \prebreakpenalty'^ + =200
70 \prebreakpenalty'^ − =200% U+2212 MINUS SIGN
71 \prebreakpenalty'^ − =200% U+FF0D FULLWIDTH HYPHEN-MINUS
72 \prebreakpenalty'^ = =200
73 \postbreakpenalty'^ # =200
74 \postbreakpenalty'^ $ =200
75 \prebreakpenalty'^ % =200
76 \prebreakpenalty'^ & =200
77 \prebreakpenalty'^ あ =150
78 \prebreakpenalty'^ い =150
79 \prebreakpenalty'^ う =150
80 \prebreakpenalty'^ え =150
81 \prebreakpenalty'^ お =150
82 \prebreakpenalty'^ つ =150
83 \prebreakpenalty'^ や =150
84 \prebreakpenalty'^ っ =150
85 \prebreakpenalty'^ ぁ =150

```



```

86 \prebreakpenalty‘ わ=150%\jis"246E
87 \prebreakpenalty‘ ア=150
88 \prebreakpenalty‘ イ=150
89 \prebreakpenalty‘ ウ=150
90 \prebreakpenalty‘ エ=150
91 \prebreakpenalty‘ オ=150
92 \prebreakpenalty‘ ツ=150
93 \prebreakpenalty‘ ヤ=150
94 \prebreakpenalty‘ ュ=150
95 \prebreakpenalty‘ ヨ=150
96 \prebreakpenalty‘ ワ=150%\jis"256E
97 \prebreakpenalty‘ カ=150%\jis"2575
98 \prebreakpenalty‘ ケ=150%\jis"2576
99 %% kinsoku JIS X 0208 additional
100 \prebreakpenalty‘ \ =10000
101 \prebreakpenalty‘ ` =10000
102 \prebreakpenalty‘ > =10000
103 \prebreakpenalty‘ ^ =10000
104 %%
105 %% kinsoku JIS X 0213
106 %%
107 \prebreakpenalty‘ / =10000
108 \prebreakpenalty‘ /_ =10000
109 \prebreakpenalty‘ \ =10000
110 \prebreakpenalty‘ ^_ =10000
111 \postbreakpenalty‘ ☒ =10000
112 \prebreakpenalty‘ ☒ =10000
113 \postbreakpenalty‘ (=10000
114 \prebreakpenalty‘ ) =10000
115 \postbreakpenalty‘ (=10000
116 \prebreakpenalty‘ ) =10000
117 \postbreakpenalty‘ [=10000
118 \prebreakpenalty‘ ] =10000
119 \postbreakpenalty‘ « =10000
120 \prebreakpenalty‘ » =10000
121 \postbreakpenalty‘ ` =10000
122 \prebreakpenalty‘ ` =10000
123 \prebreakpenalty‘ !! =10000
124 \prebreakpenalty‘ ?? =10000
125 \prebreakpenalty‘ ?! =10000
126 \prebreakpenalty‘ !? =10000
127 \postbreakpenalty‘ i =10000
128 \postbreakpenalty‘ ˆ =10000
129 \prebreakpenalty‘ : =10000
130 \prebreakpenalty‘ . =10000
131 \prebreakpenalty"AA=10000
132 \prebreakpenalty"BA=10000
133 \prebreakpenalty‘ ^1 =10000
134 \prebreakpenalty‘ ^2 =10000
135 \prebreakpenalty‘ ^3 =10000

```

```

136 \postbreakpenalty‘€=10000
137 \prebreakpenalty‘か=150
138 \prebreakpenalty‘け=150
139 \prebreakpenalty‘く=150
140 \prebreakpenalty‘し=150
141 \prebreakpenalty‘す=150
142 \prebreakpenalty‘ト=150
143 \prebreakpenalty‘ヌ=150
144 \prebreakpenalty‘ハ=150
145 \prebreakpenalty‘ヒ=150
146 \prebreakpenalty‘フ=150
147 \prebreakpenalty‘へ=150
148 \prebreakpenalty‘ホ=150
149 %%\prebreakpenalty‘フ °=150
150 \prebreakpenalty‘ム=150
151 \prebreakpenalty‘ラ=150
152 \prebreakpenalty‘リ=150
153 \prebreakpenalty‘ル=150
154 \prebreakpenalty‘レ=150
155 \prebreakpenalty‘ロ=150
156 %%
157 %% kinsoku JIS X 0212
158 %%
159 %%\postbreakpenalty‘i =10000
160 %%\postbreakpenalty‘ゝ=10000
161 %%\prebreakpenalty"BA=10000
162 %%\prebreakpenalty"AA=10000
163 \prebreakpenalty‘☒=10000
164 %%
165 %% kinsoku 半角片仮名
166 %%
167 \prebreakpenalty‘。=10000
168 \prebreakpenalty‘、=10000
169 \prebreakpenalty‘’=10000
170 \prebreakpenalty‘°=10000
171 \prebreakpenalty‘J=10000
172 \postbreakpenalty‘J=10000

```

7 文字間のスペース

ある英字の前後と、その文字に隣合う漢字に挿入されるスペースを制御するには、`\xspcode` を用います。

ある漢字の前後と、その文字に隣合う英字に挿入されるスペースを制御するには、`\inhibitxspcode` を用います。

7.1 ある英字と前後の漢字の間の制御

ここでは、英字に対する設定を行なっています。

指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の漢字の間での処理を禁止する。
- 1 直前の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 2 直後の漢字との間にのみ、スペースの挿入を許可する。
- 3 前後の漢字との間でのスペースの挿入を許可する。

```
173 %%  
174 %% xspcode  
175 \xspcode' (=1  
176 \xspcode')=2  
177 \xspcode' [=1  
178 \xspcode'] =2  
179 \xspcode' '=1  
180 \xspcode' '=2  
181 \xspcode' ;=2  
182 \xspcode' ,=2  
183 \xspcode' .=2  
184 %% for 8bit Latin  
185 \xspcode"80=3  
186 \xspcode"81=3  
187 \xspcode"82=3  
188 \xspcode"83=3  
189 \xspcode"84=3  
190 \xspcode"85=3  
191 \xspcode"86=3  
192 \xspcode"87=3  
193 \xspcode"88=3  
194 \xspcode"89=3  
195 \xspcode"8A=3  
196 \xspcode"8B=3  
197 \xspcode"8C=3  
198 \xspcode"8D=3  
199 \xspcode"8E=3  
200 \xspcode"8F=3  
201 \xspcode"90=3  
202 \xspcode"91=3  
203 \xspcode"92=3  
204 \xspcode"93=3  
205 \xspcode"94=3  
206 \xspcode"95=3  
207 \xspcode"96=3  
208 \xspcode"97=3  
209 \xspcode"98=3  
210 \xspcode"99=3  
211 \xspcode"9A=3
```

212 \xspcode"9B=3
213 \xspcode"9C=3
214 \xspcode"9D=3
215 \xspcode"9E=3
216 \xspcode"9F=3
217 \xspcode"A0=3
218 \xspcode"A1=3
219 \xspcode"A2=3
220 \xspcode"A3=3
221 \xspcode"A4=3
222 \xspcode"A5=3
223 \xspcode"A6=3
224 \xspcode"A7=3
225 \xspcode"A8=3
226 \xspcode"A9=3
227 \xspcode"AA=3
228 \xspcode"AB=3
229 \xspcode"AC=3
230 \xspcode"AD=3
231 \xspcode"AE=3
232 \xspcode"AF=3
233 \xspcode"B0=3
234 \xspcode"B1=3
235 \xspcode"B2=3
236 \xspcode"B3=3
237 \xspcode"B4=3
238 \xspcode"B5=3
239 \xspcode"B6=3
240 \xspcode"B7=3
241 \xspcode"B8=3
242 \xspcode"B9=3
243 \xspcode"BA=3
244 \xspcode"BB=3
245 \xspcode"BC=3
246 \xspcode"BD=3
247 \xspcode"BE=3
248 \xspcode"BF=3
249 \xspcode"C0=3
250 \xspcode"C1=3
251 \xspcode"C2=3
252 \xspcode"C3=3
253 \xspcode"C4=3
254 \xspcode"C5=3
255 \xspcode"C6=3
256 \xspcode"C7=3
257 \xspcode"C8=3
258 \xspcode"C9=3
259 \xspcode"CA=3
260 \xspcode"CB=3
261 \xspcode"CC=3

262 \xspcode"CD=3
263 \xspcode"CE=3
264 \xspcode"CF=3
265 \xspcode"D0=3
266 \xspcode"D1=3
267 \xspcode"D2=3
268 \xspcode"D3=3
269 \xspcode"D4=3
270 \xspcode"D5=3
271 \xspcode"D6=3
272 \xspcode"D7=3
273 \xspcode"D8=3
274 \xspcode"D9=3
275 \xspcode"DA=3
276 \xspcode"DB=3
277 \xspcode"DC=3
278 \xspcode"DD=3
279 \xspcode"DE=3
280 \xspcode"DF=3
281 \xspcode"E0=3
282 \xspcode"E1=3
283 \xspcode"E2=3
284 \xspcode"E3=3
285 \xspcode"E4=3
286 \xspcode"E5=3
287 \xspcode"E6=3
288 \xspcode"E7=3
289 \xspcode"E8=3
290 \xspcode"E9=3
291 \xspcode"EA=3
292 \xspcode"EB=3
293 \xspcode"EC=3
294 \xspcode"ED=3
295 \xspcode"EE=3
296 \xspcode"EF=3
297 \xspcode"F0=3
298 \xspcode"F1=3
299 \xspcode"F2=3
300 \xspcode"F3=3
301 \xspcode"F4=3
302 \xspcode"F5=3
303 \xspcode"F6=3
304 \xspcode"F7=3
305 \xspcode"F8=3
306 \xspcode"F9=3
307 \xspcode"FA=3
308 \xspcode"FB=3
309 \xspcode"FC=3
310 \xspcode"FD=3
311 \xspcode"FE=3

```
312 \xspcode"FF=3
```

7.2 ある漢字と前後の英字の間の制御

ここでは、漢字に対する設定を行なっています。

指定する数値とその意味は次のとおりです。

- 0 前後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 1 直前の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 2 直後の英字との間にスペースを挿入することを禁止する。
- 3 前後の英字との間でのスペースの挿入を許可する。

```
313 %%
314 %% inhibitxspcode
315 \inhibitxspcode‘、=1
316 \inhibitxspcode‘。=1
317 \inhibitxspcode‘,=1
318 \inhibitxspcode‘.=1
319 \inhibitxspcode‘;=1
320 \inhibitxspcode‘?=1
321 \inhibitxspcode‘)=1
322 \inhibitxspcode‘(=2
323 \inhibitxspcode‘]=1
324 \inhibitxspcode‘[=2
325 \inhibitxspcode‘}=1
326 \inhibitxspcode‘{=2
327 \inhibitxspcode‘‘=2
328 \inhibitxspcode‘’=1
329 \inhibitxspcode‘“=2
330 \inhibitxspcode‘”=1
331 \inhibitxspcode‘‘=2
332 \inhibitxspcode‘’=1
333 \inhibitxspcode‘<=2
334 \inhibitxspcode‘>=1
335 \inhibitxspcode‘《=2
336 \inhibitxspcode‘》=1
337 \inhibitxspcode‘「=2
338 \inhibitxspcode‘」=1
339 \inhibitxspcode‘『=2
340 \inhibitxspcode‘』=1
341 \inhibitxspcode‘【=2
342 \inhibitxspcode‘】=1
343 \inhibitxspcode‘—=0% U+2014 EM DASH
344 \inhibitxspcode‘—=0% U+2015 HORIZONTAL BAR
345 \inhibitxspcode‘~=0% U+301C WAVE DASH
346 \inhibitxspcode‘~=0% U+FF5E FULLWIDTH TILDE
347 \inhibitxspcode‘…=0
348 \inhibitxspcode‘¥=0% U+00A5 YEN SIGN
```

```

349 \inhibitxspcode'¥=0% U+FFE5 FULLWIDTH YEN SIGN
350 \inhibitxspcode'° =1
351 \inhibitxspcode'´ =1
352 \inhibitxspcode'¨ =1
353 %%
354 %% inhibitxspcode JIS X 0213
355 %%
356 \inhibitxspcode'☒=2
357 \inhibitxspcode'☒=1
358 \inhibitxspcode'《=2
359 \inhibitxspcode'》=1
360 \inhibitxspcode'『=2
361 \inhibitxspcode'』=1
362 \inhibitxspcode'【=2
363 \inhibitxspcode'】=1
364 \inhibitxspcode'« =2
365 \inhibitxspcode'» =1
366 \inhibitxspcode'≈=2
367 \inhibitxspcode'≈ =1
368 \inhibitxspcode'!! =1
369 \inhibitxspcode'??=1
370 \inhibitxspcode'?! =1
371 \inhibitxspcode'!? =1
372 \inhibitxspcode'¡ =2
373 \inhibitxspcode'¿ =2
374 \inhibitxspcode"AA=1
375 \inhibitxspcode"BA=1
376 \inhibitxspcode'¹ =1
377 \inhibitxspcode'² =1
378 \inhibitxspcode'³ =1
379 \inhibitxspcode'€ =2
380 %%
381 %% inhibitxspcode JIS X 0212
382 %%
383 %%\inhibitxspcode'¡ =2
384 %%\inhibitxspcode'¿ =2
385 %%\inhibitxspcode"BA=1
386 %%\inhibitxspcode"AA=1
387 \inhibitxspcode'☒=1
388 %%
389 %% inhibitxspcode 半角片仮名
390 %%
391 \inhibitxspcode'。=1
392 \inhibitxspcode'、=1
393 \inhibitxspcode'「=2
394 \inhibitxspcode'」=1
395 </plcore>

```

File d ujclasses.dtx

このファイルは、 $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\varepsilon}$ の標準クラスファイルです。 $\text{pL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\varepsilon}$ の標準クラスファイルを $\text{upL}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\varepsilon}$ 用に修正したものです。DOCSTRIP プログラムによって、横組用のクラスファイルと縦組用のクラスファイルを作成することができます。

次に DOCSTRIP プログラムのためのオプションを示します。

オプション	意味
article	article クラスを生成
report	report クラスを生成
book	book クラスを生成
10pt	10pt サイズの設定を生成
11pt	11pt サイズの設定を生成
12pt	12pt サイズの設定を生成
bk	book クラス用のサイズの設定を生成
tate	縦組用の設定を生成
yoko	横組用の設定を生成

8 オプションスイッチ

ここでは、後ほど使用するいくつかのコマンドやスイッチを定義しています。

<code>\c@paper</code>	用紙サイズを示すために使います。A4, A5, B4, B5 用紙はそれぞれ、1, 2, 3, 4 として表されます。 1 <code>\newcounter{@paper}</code>
<code>\if@landscape</code>	用紙を横向きにするかどうかのスイッチです。デフォルトは、縦向きです。 3 <code>\newif\if@landscape \@landscapefalse</code>
<code>\@ptsize</code>	組版をするポイント数の一の位を保存するために使います。0, 1, 2 のいずれかです。 4 <code>\newcommand{\@ptsize}{{}}</code>
<code>\if@restonecol</code>	二段組時に用いるテンポラリスイッチです。 5 <code>\newif\if@restonecol</code>
<code>\if@titlepage</code>	タイトルページやアブストラクト（概要）を独立したページにするかどうかのスイッチです。report と book スタイルのデフォルトでは、独立したページになります。


```

6 \newif\if@titlepage
7 \<article>\@titlepagefalse
8 \<report|book>\@titlepagetrue

\if@openright chapter レベルを右ページからはじめるかどうかのスイッチです。横組では奇数ページ、縦組では偶数ページから始まることになります。report クラスのデフォルトは、“no” です。book クラスのデフォルトは、“yes” です。
9 \<article>\newif\if@openright

\if@openleft chapter レベルを左ページからはじめるかどうかのスイッチです。日本語 TeX 開発コミュニティ版で新たに追加されました。横組では偶数ページ、縦組では奇数ページから始まることになります。report クラスと book クラスの両方で、デフォルトは “no” です。
10 \<article>\newif\if@openleft

\if@mainmatter スイッチ \@mainmatter が真の場合、本文を処理しています。このスイッチが偽の場合は、\chapter コマンドは見出し番号を出力しません。
11 \<book>\newif\if@mainmatter \@mainmattertrue

\hour
\minute 12 \hour\time \divide\hour by 60\relax
13 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
14 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta

\if@stysize pLaTeX 2ε 2.09 互換モードで、スタイルオプションに a4j,a5p などが指定されたときの動作をエミュレートするためのフラグです。
15 \newif\if@stysize \@stysizefalse

\if@enablejfam 日本語ファミリを宣言するために用いるフラグです。
16 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

和欧文両対応の数式文字コマンドを有効にするときに用いるフラグです。マクロの展開順序が複雑になるのを避けるため、デフォルトでは false としてあります。
17 \newif\if@mathrmc \@mathrmcfalse

```

9 オプションの宣言

ここでは、クラスオプションの宣言を行なっています。

9.1 用紙オプション

用紙サイズを指定するオプションです。

```
18 \DeclareOption{a4paper}{\setcounter{@paper}{1}%
19 \setlength\paperheight {297mm}%
20 \setlength\paperwidth {210mm}}
21 \DeclareOption{a5paper}{\setcounter{@paper}{2}%
22 \setlength\paperheight {210mm}
23 \setlength\paperwidth {148mm}}
24 \DeclareOption{b4paper}{\setcounter{@paper}{3}%
25 \setlength\paperheight {364mm}
26 \setlength\paperwidth {257mm}}
27 \DeclareOption{b5paper}{\setcounter{@paper}{4}%
28 \setlength\paperheight {257mm}
29 \setlength\paperwidth {182mm}}
```

ドキュメントクラスに、以下のオプションを指定すると、通常よりもテキストを組み立てる領域の広いスタイルとすることができます。

```
30 %
31 \DeclareOption{a4j}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue
32 \setlength\paperheight {297mm}%
33 \setlength\paperwidth {210mm}}
34 \DeclareOption{a5j}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
35 \setlength\paperheight {210mm}
36 \setlength\paperwidth {148mm}}
37 \DeclareOption{b4j}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
38 \setlength\paperheight {364mm}
39 \setlength\paperwidth {257mm}}
40 \DeclareOption{b5j}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
41 \setlength\paperheight {257mm}
42 \setlength\paperwidth {182mm}}
43 %
44 \DeclareOption{a4p}{\setcounter{@paper}{1}\@stysizetrue
45 \setlength\paperheight {297mm}%
46 \setlength\paperwidth {210mm}}
47 \DeclareOption{a5p}{\setcounter{@paper}{2}\@stysizetrue
48 \setlength\paperheight {210mm}
49 \setlength\paperwidth {148mm}}
50 \DeclareOption{b4p}{\setcounter{@paper}{3}\@stysizetrue
51 \setlength\paperheight {364mm}
52 \setlength\paperwidth {257mm}}
53 \DeclareOption{b5p}{\setcounter{@paper}{4}\@stysizetrue
54 \setlength\paperheight {257mm}
55 \setlength\paperwidth {182mm}}
```

9.2 サイズオプション

基準となるフォントの大きさを指定するオプションです。

```
56 \if@compatibility
```

```

57 \renewcommand{\@ptsize}{0}
58 \else
59 \DeclareOption{10pt}{\renewcommand{\@ptsize}{0}}
60 \fi
61 \DeclareOption{11pt}{\renewcommand{\@ptsize}{1}}
62 \DeclareOption{12pt}{\renewcommand{\@ptsize}{2}}

```

9.3 横置きオプション

このオプションが指定されると、用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

```

63 \DeclareOption{landscape}{\@landscape true
64 \setlength\@tempdima{\paperheight}%
65 \setlength\paperheight{\paperwidth}%
66 \setlength\paperwidth{\@tempdima}}

```

9.4 トンボオプション

tombow オプションが指定されると、用紙サイズに合わせてトンボを出力します。このとき、トンボの脇に DVI を作成した日付が出力されます。作成日付の出力を抑制するには、tombow ではなく、tombo と指定をします。

ジョブ情報の書式は元々 filename : 2017/3/5(13:3) のような書式でしたが、jsclasses にあわせて桁数固定の filename (2017-03-05 13:03) に直しました。

```

67 \DeclareOption{tombow}{%
68 \tombow true \tombow date true
69 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
70 \@bannertoken{%
71 \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
72 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
73 \maketombowbox}
74 \DeclareOption{tombo}{%
75 \tombow true \tombow date false
76 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
77 \maketombowbox}

```

9.5 面付けオプション

このオプションが指定されると、トンボオプションを指定したときと同じ位置に文章を出力します。作成した DVI をフィルムに面付け出力する場合などに指定をします。

```

78 \DeclareOption{mentuke}{%
79 \tombow true \tombow date false
80 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
81 \maketombowbox}

```

9.6 組方向オプション

このオプションが指定されると、縦組で組版をします。

```
82 \DeclareOption{tate}{%
83   \AtBeginDocument{\tate\message{《縦組モード》}%
84                     \adjustbaseline}%
85 }
```

9.7 両面、片面オプション

twoside オプションが指定されると、両面印字出力に適した整形を行ないます。

```
86 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse}
87 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue}
```

9.8 二段組オプション

二段組にするかどうかのオプションです。

```
88 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
89 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
```

9.9 表題ページオプション

@titlepage が真の場合、表題を独立したページに出力します。

```
90 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
91 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
```

9.10 右左起こしオプション

chapter を右ページあるいは左ページからはじめるかどうかを指定するオプションです。openleft オプションは日本語 T_EX 開発コミュニティによって追加されました。

```
92 \ifcompatibility
93 \ifopenrighttrue
94 \else
95 \ifarticle\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse}
96 \ifarticle\DeclareOption{openleft}{\@openlefttrue\@openrightfalse}
97 \ifarticle\DeclareOption{openany}{\@openrightfalse\@openleftfalse}
98 \ifarticle\fi
```

9.11 数式のオプション

leqno を指定すると、数式番号を数式の左側に出力します。fleqn を指定するとディスプレイ数式を左揃えで出力します。

```
99 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
100 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}
```

9.12 参考文献のオプション

参考文献一覧を“オープンスタイル”の書式で出力します。これは各ブロックが改行で区切られ、`\bibindent` のインデントが付く書式です。

```
101 \DeclareOption{openbib}{%
```

参考文献環境内の最初のいくつかのフックを満たします。

```
102   \AtEndOfPackage{%
103     \renewcommand\@openbib@code{%
104       \advance\leftmargin\bibindent
105       \itemindent -\bibindent
106       \listparindent \itemindent
107       \parsep \z@
108     }%
```

そして、`\newblock` を再定義します。

```
109   \renewcommand\newblock{\par}}}
```

9.13 日本語ファミリ宣言の抑制、和欧文両対応の数式文字

p \LaTeX 2 ϵ は、このあと、数式モードで直接、日本語を記述できるように数式ファミリを宣言します。しかし、 \TeX で扱える数式ファミリの数が 16 個なので、その他のパッケージと組み合わせた場合、数式ファミリを宣言する領域を超えてしまう場合があるかもしれません。そのときには、残念ながら、そのパッケージか、数式内に直接、日本語を記述するのか、どちらかを断念しなければなりません。このクラスオプションは、数式内に日本語を記述するのをあきらめる場合に用います。

`disablejfam` オプションを指定しても `\textmc` や `\textgt` などを用いて、数式内に日本語を記述することは可能です。

日本語 \TeX 開発コミュニティによる補足：コミュニティ版 p \LaTeX の 2016/11/29 以降の版では、e-p \TeX の拡張機能（通称「旧 FAM256 パッチ」）が利用可能な場合に、 \LaTeX の機能で宣言できる数式ファミリ（数式アルファベット）の上限を 256 個に増やしています。したがって、新しい環境では `disablejfam` を指定しなくても上限を超えることが起きにくくなっています。

`mathrmmc` オプションは、`\mathrm` と `\mathbf` を和欧文両対応にするためのクラスオプションです。

```
110 \if@compatibility
111   \@mathrmctrue
112 \else
113   \DeclareOption{disablejfam}{\@enablejfamfalse}
114   \DeclareOption{mathrmmc}{\@mathrmctrue}
115 \fi
```

9.14 ドラフトオプション

`draft` オプションを指定すると、オーバフルボックスの起きた箇所に、5pt の罫線が引かれます。

```
116 \DeclareOption{draft}{\setlength\overfullrule{5pt}}
117 \DeclareOption{final}{\setlength\overfullrule{0pt}}
118 \</article | report | book>
```

9.15 オプションの実行

オプションの実行、およびサイズクラスのロードを行いません。

```
119 <*article | report | book>
120 <*article>
121 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,tate}
122 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final}
123 </article>
124 <*report>
125 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,openany,tate}
126 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,oneside,onecolumn,final,openany}
127 </report>
128 <*book>
129 <tate>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright,tate}
130 <yoko>\ExecuteOptions{a4paper,10pt,twoside,onecolumn,final,openright}
131 </book>
132 \ProcessOptions\relax
133 <book & tate>\input{utbk1\@ptsize.clo}
134 <!book & tate>\input{utsz1\@ptsize.clo}
135 <book & yoko>\input{ujbk1\@ptsize.clo}
136 <!book & yoko>\input{ujsz1\@ptsize.clo}
```

縦組用クラスファイルの場合は、ここで `plext.sty` も読み込みます。

```
137 <tate>\RequirePackage{plext}
138 </article | report | book>
```

10 フォント

ここでは、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のフォントサイズコマンドの定義をしています。フォントサイズコマンドの定義は、次のコマンドを用います。

```
\@setfontsize\size<font-size>\baselineskip
```

<font-size> これから使用する、フォントの実際の大きさです。

<baselineskip> 選択されるフォントサイズ用の通常の `\baselineskip` の値です (実際は、`\baselinestretch * <baselineskip>` の値です)。

数値コマンドは、次のように $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルで定義されています。

<code>\@vpt</code>	5	<code>\@vipt</code>	6	<code>\@viipt</code>	7
<code>\@viipt</code>	8	<code>\@ixpt</code>	9	<code>\@xpt</code>	10
<code>\@xipt</code>	10.95	<code>\@xiipt</code>	12	<code>\@xivpt</code>	14.4
...					

`\normalsize` 基本サイズとするユーザレベルのコマンドは `\normalsize` です。L^AT_EX の内部では `\@normalsize` `\normalsize` を使用します。

`\normalsize` マクロは、`\abovedisplayskip` と `\abovedisplayshortskip`、および `\belowdisplayshortskip` の値も設定をします。`\belowdisplayskip` は、つねに `\abovedisplayskip` と同値です。

また、リスト環境のトップレベルのパラメータは、つねに `\@listI` で与えられます。

```

139 <*10pt | 11pt | 12pt>
140 \renewcommand{\normalsize}{%
141 <10pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
142 <11pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xipt{15.5}%
143 <12pt & yoko> \setfontsize\normalsize\@xiipt{16.5}%
144 <10pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xpt{17}%
145 <11pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xipt{17}%
146 <12pt & tate> \setfontsize\normalsize\@xiipt{18}%
147 <*10pt>
148 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
149 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
150 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
151 </10pt>
152 <*11pt>
153 \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
154 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
155 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
156 </11pt>
157 <*12pt>
158 \abovedisplayskip 12\p@ \@plus3\p@ \@minus7\p@
159 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
160 \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
161 </12pt>
162 \belowdisplayskip \abovedisplayskip
163 \let\@listi\@listI}

```

ここで、ノーマルフォントを選択し、初期化をします。このとき、縦組モードならば、デフォルトのエンコードを変更します。

```

164 <tate>\def\kanjiencodingdefault{JT2}%
165 <tate>\kanjiencoding{\kanjiencodingdefault}%
166 \normalsize

```

`\Cht` 基準となる長さの設定をします。これらのパラメータは `uplfonts.dtx` で定義され

`\Cdp`

`\Cwd` File d: ujclasses.dtx

`\Cvs`

`\Chs`

ています。基準とする文字を「全角空白」（EUC コード 0xA1A1）から「漢」（JIS コード 0x3441）へ変更しました。

```
167 \setbox0\hbox{\char\jis"3441}%
168 \setlength\Cht{\ht0}
169 \setlength\Cdp{\dp0}
170 \setlength\Cwd{\wd0}
171 \setlength\Cvs{\baselineskip}
172 \setlength\Chs{\wd0}
173 \setbox0=\box\voidb@x
```

`\small` `\small` コマンドの定義は、`\normalsize` に似ています。

```
174 \newcommand{\small}{%
175   (*10pt)
176   \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
177   \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
178   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
179   \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
180   \def\@listif\leftmargin\leftmargini
181     \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
182     \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
183     \itemsep \parsep}%
184   (/10pt)
185   (*11pt)
186   \@setfontsize\small\@xpt\@xipt
187   \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
188   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
189   \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
190   \def\@listif\leftmargin\leftmargini
191     \topsep 6\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
192     \parsep 3\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
193     \itemsep \parsep}%
194   (/11pt)
195   (*12pt)
196   \@setfontsize\small\@xipt{13.6}%
197   \abovedisplayskip 11\p@ \@plus3\p@ \@minus6\p@
198   \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
199   \belowdisplayshortskip 6.5\p@ \@plus3.5\p@ \@minus3\p@
200   \def\@listif\leftmargin\leftmargini
201     \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
202     \parsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
203     \itemsep \parsep}%
204   (/12pt)
205   \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
```

`\footnotesize` `\footnotesize` コマンドの定義は、`\normalsize` に似ています。

```
206 \newcommand{\footnotesize}{%
207   (*10pt)
208   \@setfontsize\footnotesize\@viipt{9.5}%
```



```

209 \abovedisplayskip 6\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
210 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
211 \belowdisplayshortskip 3\p@ \@plus\p@ \@minus2\p@
212 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
213         \topsep 3\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
214         \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
215         \itemsep \parsep}%
216 </10pt>
217 <*11pt>
218 \@setfontsize\footnotesize\@ixpt{11}%
219 \abovedisplayskip 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
220 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus\p@
221 \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
222 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
223         \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
224         \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
225         \itemsep \parsep}%
226 </11pt>
227 <*12pt>
228 \@setfontsize\footnotesize\@xpt\@xiipt
229 \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
230 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
231 \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
232 \def\@listif\leftmargin\leftmargini
233         \topsep 6\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
234         \parsep 3\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
235         \itemsep \parsep}%
236 </12pt>
237 \belowdisplayskip \abovedisplayskip}

```

`\scriptsize` これらは先ほどのマクロよりも簡単です。これらはフォントサイズを変更するだけ

`\tiny` で、リスト環境とディスプレイ数式のパラメータは変更しません。

```

\large 238 <*10pt>
239 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
\Large 240 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
241 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
\LARGE 242 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
243 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
\huge 244 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
245 \newcommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
246 </10pt>
247 <*11pt>
248 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viiipt{9.5}}
249 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vipt\@viipt}
250 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
251 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
252 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
253 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
254 \newcommand{\Huge}{\@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}

```

```

255 </11pt>
256 <*12pt>
257 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt{9.5}}
258 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@viipt{8.5}}
259 \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xivpt{21}}
260 \newcommand{\Large}{\@setfontsize\Large\@xxvpt{25}}
261 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xxxpt{28}}
262 \newcommand{\huge}{\@setfontsize\huge\@xxvpt{33}}
263 \let\Huge=\huge
264 </12pt>
265 </10pt | 11pt | 12pt>

```

`\Cjascale` このクラスファイルが意図する和文スケール値（ $1\text{zw} \div \text{要求サイズ}$ ）を表す実数値マクロ `\Cjascale` を定義します。この $\text{upLaTeX } 2_{\epsilon}$ の標準クラスでは、フォーマット作成時に読み込まれたフォント定義ファイル（`jy2mc.fd` / `jy2gt.fd` / `jt2mc.fd` / `jt2gt.fd`）での和文スケール値がそのまま有効ですので、これは 0.962216 です。

```

266 <*article | report | book>
267 \def\Cjascale{0.962216}
268 </article | report | book>

```

11 レイアウト

11.1 用紙サイズの決定

`\columnsep` `\columnsep` は、二段組のときの、左右（あるいは上下）の段間の幅です。このスペースの中央に `\columnseprule` の幅の罫線が引かれます。

```

269 <*article | report | book>
270 \if@stysize
271 <tate> \setlength\columnsep{3\Cwd}
272 <yoko> \setlength\columnsep{2\Cwd}
273 \else
274 \setlength\columnsep{10\p@}
275 \fi
276 \setlength\columnseprule{0\p@}

```

11.2 段落の形

`\lineskip` これらの値は、行が近付き過ぎたときの $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ の動作を制御します。

`\normallineskip` `\setlength\lineskip{1\p@}`
`\setlength\normallineskip{1\p@}`

`\baselinestretch` これは、`\baselineskip` の倍率を示すために使います。デフォルトでは、何もありません。このコマンドが “empty” でない場合、`\baselineskip` の指定の `plus` や `minus` 部分は無視されることに注意してください。

```

279 \renewcommand{\baselinestretch}{1}

```

`\parskip` `\parskip` は段落間に挿入される、縦方向の追加スペースです。`\parindent` は段落の先頭の字下げ幅です。

```

280 \setlength\parskip{0\p@ \@plus \p@}
281 \setlength\parindent{1\Cwd}

```

`\smallskipamount` これら 3 つのパラメータの値は、`LATEX` カーネルの中で設定されています。これら
`\medskipamount` はおそらく、サイズオプションの指定によって変えるべきです。しかし、`LATEX 2.09`
`\bigskipamount` や `LATEX 2ε` の以前のリリースの両方との互換性を保つために、これらはまだ同じ値
 としています。

```

282 <*10pt | 11pt | 12pt>
283 \setlength\smallskipamount{3\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
284 \setlength\medskipamount{6\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
285 \setlength\bigskipamount{12\p@ \@plus 4\p@ \@minus 4\p@}
286 </10pt | 11pt | 12pt>

```

`\@lowpenalty` `\nopagebreak` と `\nolinebreak` コマンドは、これらのコマンドが置かれた場所に、
`\@medpenalty` ペナルティを起いて、分割を制御します。置かれるペナルティは、コマンドの引数に
`\@highpenalty` よって、`\@lowpenalty`, `\@medpenalty`, `\@highpenalty` のいずれかが使われます。

```

287 \@lowpenalty 51
288 \@medpenalty 151
289 \@highpenalty 301
290 </article | report | book>

```

11.3 ページレイアウト

11.3.1 縦方向のスペース

`\headheight` `\headheight` は、ヘッダが入るボックスの高さです。`\headsep` は、ヘッダの下端
`\headsep` と本文領域との間の距離です。`\topskip` は、本文領域の上端と 1 行目のテキスト
`\topskip` のベースラインとの距離です。

```

291 <*10pt | 11pt | 12pt>
292 \setlength\headheight{12\p@}
293 <*tate>
294 \if@stysize
295   \ifnum\c@paper=2 % A5
296     \setlength\headsep{6mm}
297   \else % A4, B4, B5 and other
298     \setlength\headsep{8mm}
299   \fi
300 \else
301   \setlength\headsep{8mm}
302 \fi
303 </tate>
304 <*yoko>
305 <!\bk>\setlength\headsep{25\p@}

```

```

306 <10pt & bk>\setlength\headsep{.25in}
307 <11pt & bk>\setlength\headsep{.275in}
308 <12pt & bk>\setlength\headsep{.275in}
309 </yoko>
310 \setlength\topskip{1\Cht}

```

`\footskip` `\footskip` は、本文領域の下端とフッタの下端との距離です。フッタのボックスの高さを示す、`\footheight` は削除されました。

```

311 <tate>\setlength\footskip{14mm}
312 <*yoko>
313 <!bk>\setlength\footskip{30\p@}
314 <10pt & bk>\setlength\footskip{.35in}
315 <11pt & bk>\setlength\footskip{.38in}
316 <12pt & bk>\setlength\footskip{30\p@}
317 </yoko>

```

`\maxdepth` $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ のプリミティブレジスタ `\maxdepth` は、`\topskip` と同じような働きをします。`\@maxdepth` レジスタは、つねに `\maxdepth` のコピーでなくてはなりません。これは `\begin{document}` の内部で設定されます。 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ と $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 2.09 では、`\maxdepth` は 4pt に固定です。 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 2_ε では、`\maxdepth`+`\topskip` を基本サイズの 1.5 倍にしたいので、`\maxdepth` を `\topskip` の半分の値で設定します。

```

318 \if@compatibility
319   \setlength\maxdepth{4\p@}
320 \else
321   \setlength\maxdepth{.5\topskip}
322 \fi

```

11.3.2 本文領域

`\textheight` と `\textwidth` は、本文領域の通常の高さと幅を示します。縦組でも横組でも、“高さ” は行数を、“幅” は字詰めに意味します。後ほど、これらの長さに `\topskip` の値が加えられます。

`\textwidth` 基本組の字詰めです。

互換モードの場合：

```
323 \if@compatibility
```

互換モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：

```

324 \if@stysize
325   \ifnum\c@paper=2 % A5
326     \if@landscape
327 <10pt & yoko>      \setlength\textwidth{47\Cwd}
328 <11pt & yoko>      \setlength\textwidth{42\Cwd}
329 <12pt & yoko>      \setlength\textwidth{40\Cwd}
330 <10pt & tate>      \setlength\textwidth{27\Cwd}

```

```

331 <11pt & tate>          \setlength\textwidth{25\Cwd}
332 <12pt & tate>          \setlength\textwidth{23\Cwd}
333     \else
334 <10pt & yoko>           \setlength\textwidth{28\Cwd}
335 <11pt & yoko>           \setlength\textwidth{25\Cwd}
336 <12pt & yoko>           \setlength\textwidth{24\Cwd}
337 <10pt & tate>           \setlength\textwidth{46\Cwd}
338 <11pt & tate>           \setlength\textwidth{42\Cwd}
339 <12pt & tate>           \setlength\textwidth{38\Cwd}
340     \fi
341     \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
342         \if@landscape
343 <10pt & yoko>           \setlength\textwidth{75\Cwd}
344 <11pt & yoko>           \setlength\textwidth{69\Cwd}
345 <12pt & yoko>           \setlength\textwidth{63\Cwd}
346 <10pt & tate>           \setlength\textwidth{53\Cwd}
347 <11pt & tate>           \setlength\textwidth{49\Cwd}
348 <12pt & tate>           \setlength\textwidth{44\Cwd}
349         \else
350 <10pt & yoko>           \setlength\textwidth{60\Cwd}
351 <11pt & yoko>           \setlength\textwidth{55\Cwd}
352 <12pt & yoko>           \setlength\textwidth{50\Cwd}
353 <10pt & tate>           \setlength\textwidth{85\Cwd}
354 <11pt & tate>           \setlength\textwidth{76\Cwd}
355 <12pt & tate>           \setlength\textwidth{69\Cwd}
356         \fi
357     \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
358         \if@landscape
359 <10pt & yoko>           \setlength\textwidth{60\Cwd}
360 <11pt & yoko>           \setlength\textwidth{55\Cwd}
361 <12pt & yoko>           \setlength\textwidth{50\Cwd}
362 <10pt & tate>           \setlength\textwidth{34\Cwd}
363 <11pt & tate>           \setlength\textwidth{31\Cwd}
364 <12pt & tate>           \setlength\textwidth{28\Cwd}
365         \else
366 <10pt & yoko>           \setlength\textwidth{37\Cwd}
367 <11pt & yoko>           \setlength\textwidth{34\Cwd}
368 <12pt & yoko>           \setlength\textwidth{31\Cwd}
369 <10pt & tate>           \setlength\textwidth{55\Cwd}
370 <11pt & tate>           \setlength\textwidth{51\Cwd}
371 <12pt & tate>           \setlength\textwidth{47\Cwd}
372         \fi
373     \else % A4 ant other
374         \if@landscape
375 <10pt & yoko>           \setlength\textwidth{73\Cwd}
376 <11pt & yoko>           \setlength\textwidth{68\Cwd}
377 <12pt & yoko>           \setlength\textwidth{61\Cwd}
378 <10pt & tate>           \setlength\textwidth{41\Cwd}
379 <11pt & tate>           \setlength\textwidth{38\Cwd}
380 <12pt & tate>           \setlength\textwidth{35\Cwd}

```

```

381      \else
382 <10pt & yoko>      \setlength\textwidth{47\Cwd}
383 <11pt & yoko>      \setlength\textwidth{43\Cwd}
384 <12pt & yoko>      \setlength\textwidth{40\Cwd}
385 <10pt & tate>      \setlength\textwidth{67\Cwd}
386 <11pt & tate>      \setlength\textwidth{61\Cwd}
387 <12pt & tate>      \setlength\textwidth{57\Cwd}
388      \fi
389      \fi\fi\fi
390      \else

```

互換モード：デフォルト設定

```

391      \if@twocolumn
392      \setlength\textwidth{52\Cwd}
393      \else
394 <10pt&!bk & yoko>      \setlength\textwidth{327\p@}
395 <11pt&!bk & yoko>      \setlength\textwidth{342\p@}
396 <12pt&!bk & yoko>      \setlength\textwidth{372\p@}
397 <10pt & bk & yoko>      \setlength\textwidth{4.3in}
398 <11pt & bk & yoko>      \setlength\textwidth{4.8in}
399 <12pt & bk & yoko>      \setlength\textwidth{4.8in}
400 <10pt & tate>      \setlength\textwidth{67\Cwd}
401 <11pt & tate>      \setlength\textwidth{61\Cwd}
402 <12pt & tate>      \setlength\textwidth{57\Cwd}
403      \fi
404      \fi

```

2e モードの場合：

```
405 \else
```

2e モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：二段組では用紙サイズの 8 割、一段組では用紙サイズの 7 割を版面の幅として設定します。

```

406      \if@stysize
407      \if@twocolumn
408 <yoko>      \setlength\textwidth{.8\paperwidth}
409 <tate>      \setlength\textwidth{.8\paperheight}
410      \else
411 <yoko>      \setlength\textwidth{.7\paperwidth}
412 <tate>      \setlength\textwidth{.7\paperheight}
413      \fi
414      \else

```

2e モード：デフォルト設定

```

415 <tate>      \setlength\@tempdima{\paperheight}
416 <yoko>      \setlength\@tempdima{\paperwidth}
417      \addtolength\@tempdima{-2in}
418 <tate>      \addtolength\@tempdima{-1.3in}
419 <yoko & 10pt>      \setlength\@tempdimb{327\p@}
420 <yoko & 11pt>      \setlength\@tempdimb{342\p@}
421 <yoko & 12pt>      \setlength\@tempdimb{372\p@}

```

```

422 <tate & 10pt>      \setlength\@tempdimb{67\Cwd}
423 <tate & 11pt>      \setlength\@tempdimb{61\Cwd}
424 <tate & 12pt>      \setlength\@tempdimb{57\Cwd}
425 \if@twocolumn
426   \ifdim\@tempdima>2\@tempdimb\relax
427     \setlength\textwidth{2\@tempdimb}
428   \else
429     \setlength\textwidth{\@tempdima}
430   \fi
431 \else
432   \ifdim\@tempdima>\@tempdimb\relax
433     \setlength\textwidth{\@tempdimb}
434   \else
435     \setlength\textwidth{\@tempdima}
436   \fi
437 \fi
438 \fi
439 \fi
440 \@settopoint\textwidth

```

`\textheight` 基本組の行数です。

互換モードの場合：

```
441 \if@compatibility
```

互換モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：

```

442 \if@stysize
443   \ifnum\c@@paper=2 % A5
444     \if@landscape
445 <10pt & yoko>      \setlength\textheight{17\Cvs}
446 <11pt & yoko>      \setlength\textheight{17\Cvs}
447 <12pt & yoko>      \setlength\textheight{16\Cvs}
448 <10pt & tate>      \setlength\textheight{26\Cvs}
449 <11pt & tate>      \setlength\textheight{26\Cvs}
450 <12pt & tate>      \setlength\textheight{25\Cvs}
451   \else
452 <10pt & yoko>      \setlength\textheight{28\Cvs}
453 <11pt & yoko>      \setlength\textheight{25\Cvs}
454 <12pt & yoko>      \setlength\textheight{24\Cvs}
455 <10pt & tate>      \setlength\textheight{16\Cvs}
456 <11pt & tate>      \setlength\textheight{16\Cvs}
457 <12pt & tate>      \setlength\textheight{15\Cvs}
458   \fi
459   \else\ifnum\c@@paper=3 % B4
460     \if@landscape
461 <10pt & yoko>      \setlength\textheight{38\Cvs}
462 <11pt & yoko>      \setlength\textheight{36\Cvs}
463 <12pt & yoko>      \setlength\textheight{34\Cvs}
464 <10pt & tate>      \setlength\textheight{48\Cvs}
465 <11pt & tate>      \setlength\textheight{48\Cvs}

```

```

466 <12pt & tate>          \setlength\textheight{45\Cvs}
467       \else
468 <10pt & yoko>           \setlength\textheight{57\Cvs}
469 <11pt & yoko>           \setlength\textheight{55\Cvs}
470 <12pt & yoko>           \setlength\textheight{52\Cvs}
471 <10pt & tate>           \setlength\textheight{33\Cvs}
472 <11pt & tate>           \setlength\textheight{33\Cvs}
473 <12pt & tate>           \setlength\textheight{31\Cvs}
474       \fi
475       \else\ifnum\c@@paper=4 % B5
476       \if@landscape
477 <10pt & yoko>           \setlength\textheight{22\Cvs}
478 <11pt & yoko>           \setlength\textheight{21\Cvs}
479 <12pt & yoko>           \setlength\textheight{20\Cvs}
480 <10pt & tate>           \setlength\textheight{34\Cvs}
481 <11pt & tate>           \setlength\textheight{34\Cvs}
482 <12pt & tate>           \setlength\textheight{32\Cvs}
483       \else
484 <10pt & yoko>           \setlength\textheight{35\Cvs}
485 <11pt & yoko>           \setlength\textheight{34\Cvs}
486 <12pt & yoko>           \setlength\textheight{32\Cvs}
487 <10pt & tate>           \setlength\textheight{21\Cvs}
488 <11pt & tate>           \setlength\textheight{21\Cvs}
489 <12pt & tate>           \setlength\textheight{20\Cvs}
490       \fi
491       \else % A4 and other
492       \if@landscape
493 <10pt & yoko>           \setlength\textheight{27\Cvs}
494 <11pt & yoko>           \setlength\textheight{26\Cvs}
495 <12pt & yoko>           \setlength\textheight{25\Cvs}
496 <10pt & tate>           \setlength\textheight{41\Cvs}
497 <11pt & tate>           \setlength\textheight{41\Cvs}
498 <12pt & tate>           \setlength\textheight{38\Cvs}
499       \else
500 <10pt & yoko>           \setlength\textheight{43\Cvs}
501 <11pt & yoko>           \setlength\textheight{42\Cvs}
502 <12pt & yoko>           \setlength\textheight{39\Cvs}
503 <10pt & tate>           \setlength\textheight{26\Cvs}
504 <11pt & tate>           \setlength\textheight{26\Cvs}
505 <12pt & tate>           \setlength\textheight{22\Cvs}
506       \fi
507       \fi\fi\fi
508 <yoko>          \addtolength\textheight{\topskip}
509 <bk & yoko>      \addtolength\textheight{\baselineskip}
510 <tate>          \addtolength\textheight{\Cht}
511 <tate>          \addtolength\textheight{\Cdp}

互換モード：デフォルト設定
512       \else
513 <10pt&!bk & yoko> \setlength\textheight{578\p@}

```



```

514 <10pt & bk & yoko> \setlength\textheight{554\p@}
515 <11pt & yoko> \setlength\textheight{580.4\p@}
516 <12pt & yoko> \setlength\textheight{586.5\p@}
517 <10pt & tate> \setlength\textheight{26\Cvs}
518 <11pt & tate> \setlength\textheight{25\Cvs}
519 <12pt & tate> \setlength\textheight{24\Cvs}
520 \fi

```

2e モードの場合：

```
521 \else
```

2e モード：a4j や b5j のクラスオプションが指定された場合の設定：縦組では用紙サイズの70%(book) か 78%(article,report)、横組では70%(book) か 75%(article,report)を版面の高さに設定します。

```

522 \if@stysize
523 <tate & bk> \setlength\textheight{.75\paperwidth}
524 <tate & !bk> \setlength\textheight{.78\paperwidth}
525 <yoko & bk> \setlength\textheight{.70\paperheight}
526 <yoko & !bk> \setlength\textheight{.75\paperheight}

```

2e モード：デフォルト値

```

527 \else
528 <tate> \setlength\@tempdima{\paperwidth}
529 <yoko> \setlength\@tempdima{\paperheight}
530 \addtolength\@tempdima{-2in}
531 <yoko> \addtolength\@tempdima{-1.5in}
532 \divide\@tempdima\baselineskip
533 \@tempcnta\@tempdima
534 \setlength\textheight{\@tempcnta\baselineskip}
535 \fi
536 \fi

```

最後に、\textheight に \topskip の値を加えます。

```

537 \addtolength\textheight{\topskip}
538 \@settopoint\textheight

```

11.3.3 マージン

\topmargin \topmargin は、“印字可能領域”―用紙の上端から1インチ内側―の上端からヘッダ部分の上端までの距離です。

2.09 互換モードの場合：

```

539 \if@compatibility
540 <*yoko>
541 \if@stysize
542 \setlength\topmargin{-.3in}
543 \else
544 <!bk> \setlength\topmargin{27\p@}
545 <10pt & bk> \setlength\topmargin{.75in}

```

```

546 <11pt & bk> \setlength\topmargin{.73in}
547 <12pt & bk> \setlength\topmargin{.73in}
548 \fi
549 </yoko>
550 <*tate>
551 \if@stysize
552 \ifnum\c@paper=2 % A5
553 \setlength\topmargin{.8in}
554 \else % A4, B4, B5 and other
555 \setlength\topmargin{32mm}
556 \fi
557 \else
558 \setlength\topmargin{32mm}
559 \fi
560 \addtolength\topmargin{-1in}
561 \addtolength\topmargin{-\headheight}
562 \addtolength\topmargin{-\headsep}
563 </tate>

2e モードの場合 :

564 \else
565 \setlength\topmargin{\paperheight}
566 \addtolength\topmargin{-\headheight}
567 \addtolength\topmargin{-\headsep}
568 <tate> \addtolength\topmargin{-\textwidth}
569 <yoko> \addtolength\topmargin{-\textheight}
570 \addtolength\topmargin{-\footskip}

571 \if@stysize
572 \ifnum\c@paper=2 % A5
573 \addtolength\topmargin{-1.3in}
574 \else
575 \addtolength\topmargin{-2.0in}
576 \fi
577 \else
578 <yoko> \addtolength\topmargin{-2.0in}
579 <tate> \addtolength\topmargin{-2.8in}
580 \fi

581 \addtolength\topmargin{-.5\topmargin}
582 \fi
583 \@settopoint\topmargin

```

`\marginparsep` `\marginparsep` は、本文と傍注の間にあけるスペースの幅です。横組では本文の左（右）端と傍注、縦組では本文の下（上）端と傍注の間になります。`\marginparpush` は、傍注と傍注との間のスペースの幅です。

```

584 \if@twocolumn
585 \setlength\marginparsep{10\p@}
586 \else

```

```

587 <tate> \setlength\marginparsep{15\p@}
588 <yoko> \setlength\marginparsep{10\p@}
589 \fi
590 <tate>\setlength\marginparpush{7\p@}
591 <*yoko>
592 <10pt>\setlength\marginparpush{5\p@}
593 <11pt>\setlength\marginparpush{5\p@}
594 <12pt>\setlength\marginparpush{7\p@}
595 </yoko>

\oddsidemargin まず、互換モードでの長さを示します。
\evensidemargin 互換モード、縦組の場合：
\marginparwidth 596 \if@compatibility
597 <tate> \setlength\oddsidemargin{0\p@}
598 <tate> \setlength\evensidemargin{0\p@}

互換モード、横組、book クラスの場合：
599 <*yoko>
600 <*bk>
601 <10pt> \setlength\oddsidemargin {.5in}
602 <11pt> \setlength\oddsidemargin {.25in}
603 <12pt> \setlength\oddsidemargin {.25in}
604 <10pt> \setlength\evensidemargin {1.5in}
605 <11pt> \setlength\evensidemargin {1.25in}
606 <12pt> \setlength\evensidemargin {1.25in}
607 <10pt> \setlength\marginparwidth {.75in}
608 <11pt> \setlength\marginparwidth {1in}
609 <12pt> \setlength\marginparwidth {1in}
610 </bk>

互換モード、横組、report と article クラスの場合：
611 <!*bk>
612 \if@twoside
613 <10pt> \setlength\oddsidemargin {44\p@}
614 <11pt> \setlength\oddsidemargin {36\p@}
615 <12pt> \setlength\oddsidemargin {21\p@}
616 <10pt> \setlength\evensidemargin {82\p@}
617 <11pt> \setlength\evensidemargin {74\p@}
618 <12pt> \setlength\evensidemargin {59\p@}
619 <10pt> \setlength\marginparwidth {107\p@}
620 <11pt> \setlength\marginparwidth {100\p@}
621 <12pt> \setlength\marginparwidth {85\p@}
622 \else
623 <10pt> \setlength\oddsidemargin {60\p@}
624 <11pt> \setlength\oddsidemargin {54\p@}
625 <12pt> \setlength\oddsidemargin {39.5\p@}
626 <10pt> \setlength\evensidemargin {60\p@}
627 <11pt> \setlength\evensidemargin {54\p@}
628 <12pt> \setlength\evensidemargin {39.5\p@}

```

```

629 <10pt>      \setlength\marginparwidth {90\p@}
630 <11pt>      \setlength\marginparwidth {83\p@}
631 <12pt>      \setlength\marginparwidth {68\p@}
632 \fi
633 </!bk>

```

互換モード、横組、二段組の場合：

```

634 \if@twocolumn
635     \setlength\oddsidemargin {30\p@}
636     \setlength\evensidemargin {30\p@}
637     \setlength\marginparwidth {48\p@}
638 \fi
639 </yoko>

```

縦組、横組にかかわらず、スタイルオプション設定ではゼロです。

```

640 \if@stysize
641     \if@twocolumn\else
642         \setlength\oddsidemargin{0\p@}
643         \setlength\evensidemargin{0\p@}
644     \fi
645 \fi

```

互換モードでない場合：

```

646 \else
647     \setlength\@tempdima{\paperwidth}
648 <tate> \addtolength\@tempdima{-\textheight}
649 <yoko> \addtolength\@tempdima{-\textwidth}

```

\oddsidemargin を計算します。

```

650 \if@twoside
651 <tate> \setlength\oddsidemargin{.6\@tempdima}
652 <yoko> \setlength\oddsidemargin{.4\@tempdima}
653 \else
654     \setlength\oddsidemargin{.5\@tempdima}
655 \fi
656 \addtolength\oddsidemargin{-1in}

```

\evensidemargin を計算します。

```

657 \setlength\evensidemargin{\paperwidth}
658 \addtolength\evensidemargin{-2in}
659 <tate> \addtolength\evensidemargin{-\textheight}
660 <yoko> \addtolength\evensidemargin{-\textwidth}
661 \addtolength\evensidemargin{-\oddsidemargin}
662 \@settopoint\oddsidemargin % 1999.1.6
663 \@settopoint\evensidemargin

```

\marginparwidth を計算します。ここで、\@tempdima の値は、
\paperwidth - \textwidth です。

```

664 <*yoko>
665 \if@twoside

```

```

666 \setlength\marginparwidth{.6\@tempdima}
667 \addtolength\marginparwidth{-.4in}
668 \else
669 \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
670 \addtolength\marginparwidth{-.4in}
671 \fi
672 \ifdim \marginparwidth >2in
673 \setlength\marginparwidth{2in}
674 \fi
675 \</yoko>

```

縦組の場合は、少し複雑です。

```

676 \<*tate>
677 \setlength\@tempdima{\paperheight}
678 \addtolength\@tempdima{-\textwidth}
679 \addtolength\@tempdima{-\topmargin}
680 \addtolength\@tempdima{-\headheight}
681 \addtolength\@tempdima{-\headsep}
682 \addtolength\@tempdima{-\footskip}
683 \setlength\marginparwidth{.5\@tempdima}
684 \</tate>
685 \@settopoint\marginparwidth
686 \fi

```

11.4 脚注

`\footnotesep` `\footnotesep` は、それぞれの脚注の先頭に置かれる“支柱”の高さです。このクラスでは、通常の `\footnotesize` の支柱と同じ長さですので、脚注間に余計な空白は入りません。

```

687 \<10pt>\setlength\footnotesep{6.65\p@}
688 \<11pt>\setlength\footnotesep{7.7\p@}
689 \<12pt>\setlength\footnotesep{8.4\p@}

```

`\footins` `\skip\footins` は、本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。

```

690 \<10pt>\setlength{\skip\footins}{9\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
691 \<11pt>\setlength{\skip\footins}{10\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}
692 \<12pt>\setlength{\skip\footins}{10.8\p@ \@plus 4\p@ \@minus 2\p@}

```

11.5 フロート

すべてのフロートパラメータは、 \LaTeX のカーネルでデフォルトが定義されています。そのため、カウンタ以外のパラメータは `\renewcommand` で設定する必要があります。

11.5.1 フロートパラメータ

`\floatsep` フロートオブジェクトが本文のあるページに置かれるとき、フロートとそのページ
`\textfloatsep` にある別のオブジェクトの距離は、これらのパラメータで制御されます。これらの
`\intextsep` パラメータは、一段組モードと二段組モードの段抜きでないフロートの両方で使わ
れます。

`\floatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

`\textfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。

`\intextsep` は、本文の途中に出力されるフロートと本文との距離です。

```
693 (*10pt)
694 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
695 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
696 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
697 </10pt>
698 (*11pt)
699 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
700 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
701 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
702 </11pt>
703 (*12pt)
704 \setlength\floatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
705 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
706 \setlength\intextsep {14\p@ \@plus 4\p@ \@minus 4\p@}
707 </12pt>
```

`\dblfloatsep` 二段組モードで、`\textwidth` の幅を持つ、段抜きのフロートオブジェクトが本
`\dbltextfloatsep` 文と同じページに置かれるとき、本文とフロートとの距離は、`\dblfloatsep` と
`\dbltextfloatsep` によって制御されます。

`\dblfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロートと本文との距離です。

`\dbltextfloatsep` は、ページ上部あるいは下部のフロート間の距離です。

```
708 (*10pt)
709 \setlength\dblfloatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
710 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
711 </10pt>
712 (*11pt)
713 \setlength\dblfloatsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}
714 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
715 </11pt>
716 (*12pt)
717 \setlength\dblfloatsep {14\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
718 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}
719 </12pt>
```

`\@fptop` フロートオブジェクトが、独立したページに置かれるとき、このページのレイアウト
`\@fpsep` トは、次のパラメータで制御されます。これらのパラメータは、一段組モードか、
`\@fpbot`

二段組モードでの一段出力のフロートオブジェクトに対して使われます。

ページ上部では、`\@fptop` の伸縮長が挿入されます。ページ下部では、`\@fpbot` の伸縮長が挿入されます。フロート間には `\@fpsep` が挿入されます。

なお、そのページを空白で満たすために、`\@fptop` と `\@fpbot` の少なくともどちらか一方に、`plus ...fil` を含めてください。

```
720 <*10pt>
721 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
722 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
723 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
724 </10pt>
725 <*11pt>
726 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
727 \setlength\@fpsep{8\p@ \@plus 2fil}
728 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
729 </11pt>
730 <*12pt>
731 \setlength\@fptop{0\p@ \@plus 1fil}
732 \setlength\@fpsep{10\p@ \@plus 2fil}
733 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}
734 </12pt>
```

`\@dblftop` 二段組モードでの二段抜きのフロートに対しては、これらのパラメータが使われ
`\@dblfpsep` ます。

```
\@dblfpbot 735 <*10pt>
736 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
737 \setlength\@dblfpsep{8\p@ \@plus 2fil}
738 \setlength\@dblfpbot{0\p@ \@plus 1fil}
739 </10pt>
740 <*11pt>
741 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
742 \setlength\@dblfpsep{8\p@ \@plus 2fil}
743 \setlength\@dblfpbot{0\p@ \@plus 1fil}
744 </11pt>
745 <*12pt>
746 \setlength\@dblftop{0\p@ \@plus 1fil}
747 \setlength\@dblfpsep{10\p@ \@plus 2fil}
748 \setlength\@dblfpbot{0\p@ \@plus 1fil}
749 </12pt>
750 </10pt | 11pt | 12pt>
```

11.5.2 フロートオブジェクトの上限値

`\c@topnumber` *topnumber* は、本文ページの上部に出力できるフロートの最大数です。

```
751 <*article | report | book>
752 \setcounter{topnumber}{2}
```

<code>\c@bottomnumber</code>	<i>bottomnumber</i> は、本文ページの下部に出力できるフロートの最大数です。 753 <code>\setcounter{bottomnumber}{1}</code>
<code>\c@totalnumber</code>	<i>totalnumber</i> は、本文ページに出力できるフロートの最大数です。 754 <code>\setcounter{totalnumber}{3}</code>
<code>\c@dbltopnumber</code>	<i>dbltopnumber</i> は、二段組時における、本文ページの上部に出力できる段抜きのフロートの最大数です。 755 <code>\setcounter{dbltopnumber}{2}</code>
<code>\topfraction</code>	これは、本文ページの上部に出力されるフロートが占有できる最大の割合です。 756 <code>\renewcommand{\topfraction}{.7}</code>
<code>\bottomfraction</code>	これは、本文ページの下部に出力されるフロートが占有できる最大の割合です。 757 <code>\renewcommand{\bottomfraction}{.3}</code>
<code>\textfraction</code>	これは、本文ページに最低限、入らなくてはならない本文の割合です。 758 <code>\renewcommand{\textfraction}{.2}</code>
<code>\floatpagefraction</code>	これは、フロートだけのページで最低限、入らなくてはならないフロートの割合です。 759 <code>\renewcommand{\floatpagefraction}{.5}</code>
<code>\dbltopfraction</code>	これは、2 段組時における本文ページに、2 段抜きのフロートが占めることができる最大の割合です。 760 <code>\renewcommand{\dbltopfraction}{.7}</code>
<code>\dblfloatpagefraction</code>	これは、2 段組時におけるフロートだけのページに最低限、入らなくてはならない 2 段抜きのフロートの割合です。 761 <code>\renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.5}</code>

12 改ページ（日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版のみ）

<code>\pltx@cleartorightpage</code>	<code>\cleardoublepage</code> 命令は、 $\mathrm{L}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルでは「奇数ページになるまでページを繰る命令」として定義されています。しかし $\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルでは、アスキーの方針により「横組では奇数ページになるまで、縦組では偶数ページになるまでページを繰る命令」に再定義されています。すなわち、 $\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ では縦組でも横組でも右ページになるまでページを繰ることになります。
<code>\pltx@cleartoleftpage</code>	
<code>\pltx@cleartooddpage</code>	
<code>\pltx@cleartoevenpage</code>	

$\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 標準クラスの `book` は、横組も縦組も `openright` がデフォルトになっていて、これは従来 $\mathrm{pL}^{\mathrm{A}}\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ カーネルで定義された `\cleardoublepage` を利用していました。しかし、縦組で奇数ページ始まりの文書を作りたい場合もあるでしょうから、コミュニティ版クラスでは以下の（非ユーザ向け）命令を追加します。

1. `\pltx@cleartorightpage` : 右ページになるまでページを繰る命令
2. `\pltx@cleartoleftpage` : 左ページになるまでページを繰る命令
3. `\pltx@cleartooddpage` : 奇数ページになるまでページを繰る命令
4. `\pltx@cleartoevenpage` : 偶数ページになるまでページを繰る命令

```

762 \def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
763   \ifodd\c@page
764     \iftkdir
765       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
766       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
767     \fi
768   \else
769     \ifydir
770       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
771       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
772     \fi
773   \fi\fi}
774 \def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
775   \ifodd\c@page
776     \ifydir
777       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
778       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
779     \fi
780   \else
781     \iftkdir
782       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
783       \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
784     \fi
785   \fi\fi}

```

`\pltx@cleartooddpage` は \LaTeX の `\cleardoublepage` に似ていますが、上の 2 つに合わせるため `\thispagestyle{empty}` を追加してあります。

```

786 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
787   \ifodd\c@page\else
788     \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
789     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
790   \fi\fi}
791 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
792   \ifodd\c@page
793     \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
794     \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
795   \fi\fi}

```

`\cleardoublepage` そして report と book クラスの場合は、ユーザ向け命令である `\cleardoublepage` を、openright オプションが指定されている場合は `\pltx@cleartorightpage` に、

openleft オプションが指定されている場合は `\pltx@cleartoleftpage` に、それぞれ `\let` します。openany の場合は p_{La}T_EX カーネルの定義のままです。

```

796 <!*article>
797 \if@openleft
798   \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
799 \else\if@openright
800   \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
801 \fi\fi
802 <!/article>

```

13 ページスタイル

p_{La}T_EX 2_ε では、つぎの6種類のページスタイルを使用できます。empty は ltpage.dtx で定義されています。

empty	ヘッダにもフッタにも出力しない
plain	フッタにページ番号のみを出力する
headnombre	ヘッダにページ番号のみを出力する
footnombre	フッタにページ番号のみを出力する
headings	ヘッダに見出しとページ番号を出力する
bothstyle	ヘッダに見出し、フッタにページ番号を出力する

ページスタイル *foo* は、`\ps@foo` コマンドとして定義されます。

<code>\@evenhead</code>	これらは <code>\ps@...</code> から呼び出され、ヘッダとフッタを出力するマクロです。
<code>\@oddhead</code>	<code>\@oddhead</code> 奇数ページのヘッダを出力
<code>\@evenfoot</code>	<code>\@oddfoot</code> 奇数ページのフッタを出力
<code>\@oddfoot</code>	<code>\@evenhead</code> 偶数ページのヘッダを出力
	<code>\@evenfoot</code> 偶数ページのフッタを出力

これらの内容は、横組の場合は `\textwidth` の幅を持つ `\hbox` に入れられ、縦組の場合は `\textheight` の幅を持つ `\hbox` に入れられます。

13.1 マークについて

ヘッダに入る章番号や章見出しは、見出しコマンドで実行されるマークコマンドで決定されます。ここでは、実行されるマークコマンドの定義を行なっています。これらのマークコマンドは、T_EX の `\mark` 機能を用いて、‘left’ と ‘right’ の2種類のマークを生成するように定義しています。

`\markboth{LEFT}{RIGHT}`: 両方のマークに追加します。
`\markright{RIGHT}`: ‘右’ マークに追加します。

`\leftmark`: `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` マクロで使われ、現在の“左”マークを出力します。`\leftmark` は $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の `\botmark` コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてははいけません。

`\rightmark`: `\@oddhead`, `\@oddfoot`, `\@evenhead`, `\@evenfoot` マクロで使われ、現在の“右”マークを出力します。`\rightmark` は $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ の `\firstmark` コマンドのような働きをします。初期値は空でなくてははいけません。

マークコマンドの動作は、左マークの‘範囲内の’右マークのために合理的になっています。たとえば、左マークは `\chapter` コマンドによって変更されます。そして右マークは `\section` コマンドによって変更されます。しかし、同一ページに複数の `\markboth` コマンドが現れたとき、おかしい結果となることがあります。

`\tableofcontents` のようなコマンドは、`\mkboth` コマンドを用いて、あるページスタイルの中でマークを設定しなくてはなりません。`\mkboth` は、`\ps@...` コマンドによって、`\markboth` (ヘッダを設定する) か、`\gobbletwo` (何もしない) に `\let` されます。

13.2 plain ページスタイル

`\ps@plain` `jpl@in` に `\let` するために、ここで定義をします。

```
803 \def\ps@plain{\let\mkboth\gobbletwo
804   \let\ps@jpl@in\ps@plain
805   \let\@oddhead\@empty
806   \def\@oddfoot{\reset@font\hfil\thepage\hfil}%
807   \let\@evenhead\@empty
808   \let\@evenfoot\@oddfoot}
```

13.3 jpl@in ページスタイル

`\ps@jpl@in` `jpl@in` スタイルは、クラスファイル内部で使用するものです。 $\mathrm{IAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ では、book クラスを *headings* としています。しかし、`\tableofcontents` コマンドの内部では *plain* として設定されるため、一つの文書でのページ番号の位置が上下に出力されることになります。

そこで、 $\mathrm{pIAT}_{\mathrm{E}}\mathrm{X} 2_{\epsilon}$ では、`\tableofcontents` や `\theindex` のページスタイルを `jpl@in` にし、実際に出力される形式は、ほかのページスタイルで `\let` をしています。したがって、*headings* のとき、目次ページのページ番号はヘッダ位置に出力され、*plain* のときには、フッタ位置に出力されます。

ここで、定義をしているのは、その初期値です。

```
809 \let\ps@jpl@in\ps@plain
```

13.4 headnombre ページスタイル

`\ps@headnombre` *headnombre* スタイルは、ヘッダにページ番号のみを出力します。

```
810 \def\ps@headnombre{\let\mkboth\gobbletwo
811     \let\ps@jpl@in\ps@headnombre
812 \yoko \def\@evenhead{\thepage\hfil}%
813 \yoko \def\@oddhead{\hfil\thepage}%
814 \tate \def\@evenhead{\hfil\thepage}%
815 \tate \def\@oddhead{\thepage\hfil}%
816 \let\@oddfoot\empty\let\@evenfoot\empty}
```

13.5 footnombre ページスタイル

`\ps@footnombre` *footnombre* スタイルは、フッタにページ番号のみを出力します。

```
817 \def\ps@footnombre{\let\mkboth\gobbletwo
818     \let\ps@jpl@in\ps@footnombre
819 \yoko \def\@evenfoot{\thepage\hfil}%
820 \yoko \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
821 \tate \def\@evenfoot{\hfil\thepage}%
822 \tate \def\@oddfoot{\thepage\hfil}%
823 \let\@oddhead\empty\let\@evenhead\empty}
```

13.6 headings スタイル

headings スタイルは、ヘッダに見出しとページ番号を出力します。

`\ps@headings` このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

```
824 \if@twoside
```

横組の場合は、奇数ページが右に、偶数ページが左にきます。縦組の場合は、奇数ページが左に、偶数ページが右にきます。

```
825 \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
826     \let\@oddfoot\empty\let\@evenfoot\empty
827 \yoko \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%
828 \yoko \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
829 \tate \def\@evenhead{\leftmark\hfil\thepage}%
830 \tate \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
831     \let\mkboth\markboth
832 \if*article
833     \def\sectionmark##1{\markboth{%
834         \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
835         ##1}}}%
836     \def\subsectionmark##1{\markright{%
837         \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
838         ##1}}}%
839 \if*report|book
841     \def\chaptermark##1{\markboth{%
```

```

842 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
843 <book> \if@mainmatter
844 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
845 <book> \fi
846 \fi
847 ##1}{}}%
848 \def\sectionmark##1{\markright{%
849 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
850 ##1}}%
851 </report | book>
852 }

```

片面印刷の場合：

```

853 \else % if not twoside
854 \def\ps@headings{\let\ps@jpl@in\ps@headnombre
855 \let\@oddfoot\@empty
856 <yoko> \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
857 <tate> \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
858 \let\@mkboth\markboth
859 <*article>
860 \def\sectionmark##1{\markright{%
861 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
862 ##1}}%
863 </article>
864 <*report | book>
865 \def\chaptermark##1{\markright{%
866 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
867 <book> \if@mainmatter
868 \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw
869 <book> \fi
870 \fi
871 ##1}}%
872 </report | book>
873 }
874 \fi

```

13.7 bothstyle スタイル

`\ps@bothstyle` *bothstyle* スタイルは、ヘッダに見出しを、フッタにページ番号を出力します。

このスタイルは、両面印刷と片面印刷とで形式が異なります。

```

875 \if@twoside
876 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
877 <*yoko>
878 \def\@evenhead{\leftmark\hfil}% right page
879 \def\@evenfoot{\thepage\hfil}% right page
880 \def\@oddhead{\hfil\rightmark}% left page
881 \def\@oddfoot{\hfil\thepage}% left page
882 </yoko>
883 <*tate>

```

```

884 \def\@evenhead{\hfil\leftmark}% right page
885 \def\@evenfoot{\hfil\thepage}% right page
886 \def\@oddhead{\rightmark\hfil}% left page
887 \def\@oddfoot{\thepage\hfil}% left page
888 \tate
889 \let\@mkboth\markboth
890 \begin{article}
891 \def\sectionmark##1{\markboth{%
892 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
893 ##1}{}}%
894 \def\subsectionmark##1{\markright{%
895 \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection.\hskip1zw\fi
896 ##1}}%
897 \end{article}
898 \begin{report} \book
899 \def\chaptermark##1{\markboth{%
900 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
901 \book \if@mainmatter
902 \chapapp\thechapter\chappos\hskip1zw
903 \book \fi
904 \fi
905 ##1}{}}%
906 \def\sectionmark##1{\markright{%
907 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection.\hskip1zw\fi
908 ##1}}%
909 \end{report} \book
910 }

911 \else % if one column
912 \def\ps@bothstyle{\let\ps@jpl@in\ps@footnombre
913 \yoko \def\@oddhead{\hfil\rightmark}%
914 \yoko \def\@oddfoot{\hfil\thepage}%
915 \tate \def\@oddhead{\rightmark\hfil}%
916 \tate \def\@oddfoot{\thepage\hfil}%
917 \let\@mkboth\markboth
918 \begin{article}
919 \def\sectionmark##1{\markright{%
920 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne \thesection.\hskip1zw\fi
921 ##1}}%
922 \end{article}
923 \begin{report} \book
924 \def\chaptermark##1{\markright{%
925 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
926 \book \if@mainmatter
927 \chapapp\thechapter\chappos\hskip1zw
928 \book \fi
929 \fi
930 ##1}}%
931 \end{report} \book
932 }

```

933 \fi

13.8 myheading スタイル

`\ps@myheadings` *myheadings* ページスタイルは簡潔に定義されています。ユーザがページスタイルを設計するときのヒナ型として使用することができます。

```
934 \def\ps@myheadings{\let\ps@jpl@in\ps@plain%
935   \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
936 <yoko> \def\@evenhead{\thepage\hfil\leftmark}%
937 <yoko> \def\@oddhead{\rightmark\hfil\thepage}%
938 <tate> \def\@evenhead{\leftmark\hfil\thepage}%
939 <tate> \def\@oddhead{\thepage\hfil\rightmark}%
940   \let\@mkboth\@gobbletwo
941 <|article> \let\chaptermark\@gobble
942   \let\sectionmark\@gobble
943 <|article> \let\subsectionmark\@gobble
944 }
```

14 文書コマンド

14.1 表題

`\title` 文書のタイトル、著者、日付の情報のための、これらの3つのコマンドは `ltsect.dtx` で提供されています。これらのコマンドは次のように定義されています。

```
\date 945 %\newcommand*{\title}[1]{\gdef\@title{#1}}
946 %\newcommand*{\author}[1]{\gdef\@author{#1}}
947 %\newcommand*{\date}[1]{\gdef\@date{#1}}
```

`\date` マクロのデフォルトは、今日の日付です。

```
948 %\date{\today}
```

`titlepage` 通常環境では、ページの最初と最後を除き、タイトルページ環境は何もしません。また、ページ番号の出力を抑制します。レポートスタイルでは、ページ番号を1にリセットし、そして最後に1に戻します。互換モードでは、ページ番号はゼロに設定されますが、右起しページ用のページパラメータでは誤った結果になります。二段組スタイルでも一段組のページが作られます。

日本語 *T_EX* 開発コミュニティによる変更：上にあるのはアスキー版の説明です。改めてアスキー版の挙動を整理すると、以下のようになります。

1. アスキー版では、タイトルページの番号を必ず1にリセットしていましたが、これは正しくありません。これは、タイトルページが奇数ページ目か偶数ページ目かにかかわらず、レイアウトだけ奇数ページ用が適用されてしまうからです。さらに、タイトルの次のページも偶数のページ番号を持つてしまうた

め、両面印刷で奇数ページと偶数ページが交互に出なくなるという問題もあります。

2. アスキー版 book クラスは、タイトルページを必ず `\cleardoublepage` で始めていました。pL^AT_EX カーネルでの `\cleardoublepage` の定義から、縦組の既定ではタイトルが偶数ページ目に出ることになります。これ自体が正しくないと断定することはできませんが、タイトルのページ番号を 1 にリセットすることと合わさって、偶数ページに送ったタイトルに奇数ページ用レイアウトが適用されてしまうという結果は正しくありません。

そこで、コミュニティ版ではタイトルのレイアウトが必ず奇数ページ用になるという挙動を支持し、book クラスではタイトルページを奇数ページ目に送ることにしました。これでタイトルページが表紙らしく見えるようになります。また、report クラスのようなタイトルが成り行きに従って出る場合には

- 奇数ページ目に出る場合、ページ番号を 1（奇数）にリセット
- 偶数ページ目に出る場合、ページ番号を 0（偶数）にリセット

としました。

一つめの例を考えます。

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}
```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

- 1 ページ目：空白（ページ番号 1 は非表示）
- 2 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 3 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

ですが、仮に最初の空白ページさえなければ

- 1 ページ目：タイトルすなわち表紙（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 2 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

とみなせるため、コミュニティ版では空白ページを発生させないようにしました。

二つめの例を考えます。

```
\documentclass{tbook}
\title{タイトル}\author{著者}
\begin{document}
テスト文章
```



```

\maketitle
\chapter{チャプター}
\end{document}

```

アスキー版 tbook クラスでの結果は

- 1 ページ目：テスト文章（奇数レイアウト、ページ番号 1）
- 2 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 3 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

ですが、これでは奇数と偶数のページ番号が交互になっていないので正しくありません。そこで、コミュニティ版では

- 1 ページ目：テスト文章（奇数レイアウト、ページ番号 1）
- 2 ページ目：空白ページ（ページ番号 2 は非表示）
- 3 ページ目：タイトル（奇数レイアウト、ページ番号 1 は非表示）
- 4 ページ目：チャプター（偶数レイアウト、ページ番号 2）

と直しました。

なお、p_{TEX} 2.09 互換モードはアスキー版のまま、すなわち「ページ番号をゼロに設定」としてあります。これは、横組の右起こしの挙動としては誤りですが、縦組の右起こしの挙動としては一応正しくなっているといえます。

最初に互換モードの定義を作ります。

```

949 \if@compatibility
950 \newenvironment{titlepage}
951   {%
952 <book>      \cleardoublepage
953   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
954   \else\@restonecolfalse\newpage\fi
955   \thispagestyle{empty}%
956   \setcounter{page}\z@
957   }%
958   {\if@restonecol\twocolumn\else\newpage\fi
959   }

```

そして、L_{ATEX} ネイティブのための定義です。

```

960 \else
961 \newenvironment{titlepage}
962   {%
963 <book>      \pltx@cleartooddpage %% 2017/02/15
964   \if@twocolumn
965   \@restonecoltrue\onecolumn
966   \else
967   \@restonecolfalse\newpage
968   \fi
969   \thispagestyle{empty}%
970   \ifodd\c@page\setcounter{page}\@one\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017/02/15
971   }%
972   {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi

```

両面モードでなければ、タイトルページの直後のページのページ番号も 1 にします。

```

973     \if@twoside\else
974         \setcounter{page}\@ne
975     \fi
976 }
977 \fi

```

\maketitle このコマンドは、表題を作成し、出力します。表題ページを独立させるかどうかによって定義が異なります。report と book クラスのデフォルトは独立した表題です。article クラスはオプションで独立させることができます。

\p@thanks 縦組のときは、\thanks コマンドを \p@thanks に \let します。このコマンドは \footnotetext を使わず、直接、文字を \@thanks に格納していきます。

著者名の脇に表示される合印は直立した数字、注釈側は横に寝た数字となっていました。不自然なので \hbox{\yoko ...}を追加し、両方とも直立するようにしました。

```

978 \def\p@thanks#1{\footnotemark
979   \protected@xdef\@thanks{\@thanks
980     \protect{\noindent\hbox{\yoko$\m@th^{\thefootnote$}\#1\protect\par}}}}

981 \if@titlepage
982   \newcommand{\maketitle}{\begin{titlepage}%
983     \let\footnotesize\small
984     \let\footnoterule\relax
985     \tate \let\thanks\p@thanks
986     \let\footnote\thanks

987     \tate \vbox to\textheight\bgroup\tate\hsize\textwidth
988     \null\vfil
989     \vskip 60\p@
990     \begin{center}%
991       {\LARGE \@title \par}%
992       \vskip 3em%
993       {\Large
994         \lineskip .75em%
995         \begin{tabular}[t]{c}%
996           \@author
997         \end{tabular}\par}%
998       \vskip 1.5em%
999       {\large \@date \par}%           % Set date in \large size.
1000     \end{center}\par
1001     \tate \vfil{\centering\@thanks}\vfil\null
1002     \tate \egroup
1003     \yoko \@thanks\vfil\null
1004     \end{titlepage}%

```

footnote カウンタをリセットし、\thanks と \maketitle コマンドを無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```

1005 \setcounter{footnote}{0}%
1006 \global\let\thanks\relax
1007 \global\let\maketitle\relax
1008 \global\let\p@thanks\relax
1009 \global\let\@thanks\@empty
1010 \global\let\@author\@empty
1011 \global\let\@date\@empty
1012 \global\let\@title\@empty

```

タイトルが組版されたら、\title コマンドなどの宣言を無効にできます。 \and の定義は、 \author の引数でのみ使用しますので、破棄します。

```

1013 \global\let\title\relax
1014 \global\let\author\relax
1015 \global\let\date\relax
1016 \global\let\and\relax
1017 }%
1018 \else
1019 \newcommand{\maketitle}{\par
1020 \begingroup
1021 \renewcommand{\thefootnote}{\fnsymbol{footnote}}%
1022 \def\@makefnmark{\hbox{\ifdir $\m@th^{\@thefnmark}$
1023 \else\hbox{\yoko$\m@th^{\@thefnmark}$}\fi}}%
1024 \tate
1025 \long\def\@makefntext##1{\parindent 1zw\noindent
1026 \hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}##1}%
1027 \tate
1028 \yoko
1029 \long\def\@makefntext##1{\parindent 1em\noindent
1030 \hb@xt@1.8em{\hss$\m@th^{\@thefnmark}$}##1}%
1031 \yoko
1032 \if@twocolumn
1033 \ifnum \col@number=\@ne \@maketitle
1034 \else \twocolumn[\@maketitle]%
1035 \fi
1036 \else
1037 \newpage
1038 \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
1039 \@maketitle
1040 \fi
1041 \thispagestyle{jpl@in}\@thanks

```

ここでグループを閉じ、 footnote カウンタをリセットし、 \thanks、 \maketitle、 \@maketitle を無効にし、いくつかの内部マクロを空にして格納領域を節約します。

```

1042 \endgroup
1043 \setcounter{footnote}{0}%
1044 \global\let\thanks\relax
1045 \global\let\maketitle\relax
1046 \global\let\@maketitle\relax

```

```

1047 \global\let\p@thanks\relax
1048 \global\let\@thanks\empty
1049 \global\let\@author\empty
1050 \global\let\@date\empty
1051 \global\let\@title\empty
1052 \global\let\title\relax
1053 \global\let\author\relax
1054 \global\let\date\relax
1055 \global\let\and\relax
1056 }

```

`\@maketitle` 独立した表題ページを作らない場合の、表題の出力形式です。

```

1057 \def\@maketitle{%
1058 \newpage\null
1059 \vskip 2em%
1060 \begin{center}%
1061 \yoko \let\footnote\thanks
1062 \tate \let\footnote\p@thanks
1063 {\LARGE \@title \par}%
1064 \vskip 1.5em%
1065 {\large
1066 \lineskip .5em%
1067 \begin{tabular}[t]{c}%
1068 \@author
1069 \end{tabular}\par}%
1070 \vskip 1em%
1071 {\large \@date}%
1072 \end{center}%
1073 \par\vskip 1.5em}
1074 \fi

```

14.2 概要

`abstract` 要約文のための環境です。book クラスでは使えません。report スタイルと、`titlepage` オプションを指定した article スタイルでは、独立したページに出力されます。

```

1075 (*article|report)
1076 \if@titlepage
1077 \newenvironment{abstract}{%
1078 \titlepage
1079 \null\vfil
1080 \@beginparpenalty\@lowpenalty
1081 \begin{center}%
1082 {\bfseries\abstractname}%
1083 \@endparpenalty\@M
1084 \end{center}}%
1085 {\par\vfil\null\endtitlepage}
1086 \else
1087 \newenvironment{abstract}{%

```

```

1088 \if@twocolumn
1089 \section*{\abstractname}%
1090 \else
1091 \small
1092 \begin{center}%
1093 {\bfseries\abstractname\vspace{-.5em}\vspace{\z@}}%
1094 \end{center}%
1095 \quotation
1096 \fi}{\if@twocolumn\else\endquotation\fi}
1097 \fi
1098 </article | report>

```

14.3 章見出し

14.3.1 マークコマンド

`\chaptermark` `\...mark` コマンドを初期化します。これらのコマンドはページスタイルの定義で使われます（第 13 節参照）。これらのたいていのコマンドは `ltsect.dtx` ですでに定義されています。

```

\subsubsectionmark 1099 <!article>\newcommand*{\chaptermark}[1]{%
\paragraphmark    1100 %\newcommand*{\sectionmark}[1]{%
\subparagraphmark 1101 %\newcommand*{\subsectionmark}[1]{%
1102 %\newcommand*{\subsubsectionmark}[1]{%
1103 %\newcommand*{\paragraphmark}[1]{%
1104 %\newcommand*{\subparagraphmark}[1]{%

```

14.3.2 カウンタの定義

`\c@secnumdepth` `secnumdepth` には、番号を付ける、見出しコマンドのレベルを設定します。

```

1105 <article>\setcounter{secnumdepth}{3}
1106 <!article>\setcounter{secnumdepth}{2}

```

`\c@chapter` これらのカウンタは見出し番号に使われます。最初の引数は、二番目の引数が増加するたびにリセットされます。二番目のカウンタはすでに定義されているものでなくてはなりません。

```

\c@subsection 1107 \newcounter{part}
\c@paragraph 1108 <*book | report>
1109 \newcounter{chapter}
\c@subparagraph 1110 \newcounter{section}[chapter]
1111 </book | report>
1112 <article>\newcounter{section}
1113 \newcounter{subsection}[section]
1114 \newcounter{subsubsection}[subsection]
1115 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
1116 \newcounter{subparagraph}[paragraph]

```

`\thepart` `\theCTR` が実際に出力される形式の定義です。
`\thechapter` `\arabic{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を算用数字で出力します。
`\thesection` `\roman{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を小文字のローマ数字で出力します。
`\thesubsection` `\Roman{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を大文字のローマ数字で出力します。
`\thesubsubsection` `\alph{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を $1 = a, 2 = b$ のようにして出力します。
`\theparagraph` `\Alph{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を $1 = A, 2 = B$ のようにして出力します。
`\thesubparagraph` `\Kanji{COUNTER}` は、`COUNTER` の値を漢数字で出力します。
`\rensuji{<obj>}` は、`<obj>` を横に並べて出力します。したがって、横組のときには、何も影響しません。

```

1117 <*tate>
1118 \renewcommand{\thepart}{\rensuji{\@Roman\c@part}}
1119 <article>\renewcommand{\thesection}{\rensuji{\@arabic\c@section}}
1120 <*report | book>
1121 \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@arabic\c@chapter}}
1122 \renewcommand{\thesection}{\thechapter\@arabic\c@section}
1123 </report | book>
1124 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection\@arabic\c@subsection}
1125 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
1126   \thesubsection\@arabic\c@subsubsection}
1127 \renewcommand{\theparagraph}{%
1128   \thesubsubsection\@arabic\c@paragraph}
1129 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
1130   \theparagraph\@arabic\c@subparagraph}
1131 </tate>
1132 <*yoko>
1133 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
1134 <article>\renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
1135 <*report | book>
1136 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
1137 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
1138 </report | book>
1139 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\@arabic\c@subsection}
1140 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
1141   \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
1142 \renewcommand{\theparagraph}{%
1143   \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
1144 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
1145   \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
1146 </yoko>

```

`\@chapapp` `\@chapapp` の初期値は `'\prechaptername'` です。
`\@chappos` `\@chappos` の初期値は `'\postchaptername'` です。
`\appendix` コマンドは `\@chapapp` を `'\appendixname'` に、`\@chappos` を空に再定義します。

```

1147 <*report | book>

```

```

1148 \newcommand{\@chapapp}{\prechaptername}
1149 \newcommand{\@chappos}{\postchaptername}
1150 \</report | book>

```

14.3.3 前付け、本文、後付け

`\frontmatter` 一冊の本は論理的に3つに分割されます。表題や目次や「はじめに」あるいは権利
`\mainmatter` などの前付け、そして本文、それから用語集や索引や奥付けなどの後付けです。
`\backmatter` 日本語 *TEX* 開発コミュニティによる補足：*L^AT_EX* の `classes.dtx` は、1996/05/26

(v1.3r) と 1998/05/05 (v1.3y) の計2回、`\frontmatter` と `\mainmatter` の定義を修正しています。一回目はこれらの命令を `openany` オプションに応じて切り替え、二回目はそれを元に戻しています。アスキーによる `jclasses.dtx` は、1997/01/15 に一回目の修正に追随しましたが、二回目の修正には追随していません。コミュニティ版では、一旦はアスキーによる仕様を維持しようと考えました (2016/11/22) が、以下の理由により二回目の修正にも追随することにしました (2017/03/05)。

アスキー版での `\frontmatter` と `\mainmatter` の改ページ挙動は

`openright` なら `\cleardoublepage`、`openany` なら `\clearpage` を実行

というものでした。しかし、`\frontmatter` 及び `\mainmatter` はノンブルを1にリセットしますから、改ページの結果が偶数ページ目になる場合²にノンブルが偶奇逆転してしまいました。このままでは `openany` の場合に両面印刷がうまくいかないため、新しいコミュニティ版では

必ず `\pltx@cleartooddpage` を実行

としました。これは両面印刷 (`twoside`) の場合は奇数ページに送り、片面印刷 (`oneside`) の場合は単に改ページとなります。(参考: `latex/2754`)

```

1151 \<*book>
1152 \newcommand{\frontmatter}{%
1153   \pltx@cleartooddpage
1154   \@mainmatterfalse\pagenumbering{roman}}
1155 \newcommand{\mainmatter}{%
1156   \pltx@cleartooddpage
1157   \@mainmattertrue\pagenumbering{arabic}}
1158 \newcommand{\backmatter}{%
1159   \if@openleft \cleardoublepage \else
1160   \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1161   \@mainmatterfalse}
1162 \</book>

```

²縦 `tbook` のデフォルト (`openright`) が該当するほか、横 `jbook` と縦 `tbook` の `openany` のときには成り行き次第で該当する可能性があります。

14.3.4 ボックスの組み立て

クラスファイル定義の、この部分では、`\@startsection` と `\secdef` の二つの内部マクロを使います。これらの構文を次に示します。

`\@startsection` マクロは 6 つの引数と 1 つのオプション引数 `*` を取ります。
`\@startsection<name><level><indent><beforeskip><afterskip><style> optional *
[<altheading>]<heading>`
それぞれの引数の意味は、次のとおりです。

`<name>` レベルコマンドの名前です (例:section)。

`<level>` 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。 “`<level> <= カ
ウンタ secnumdepth の値`” のとき、見出し番号が出力されます。

`<indent>` 見出しに対する、左マージンからのインデント量です。

`<beforeskip>` 見出しの上に置かれる空白の絶対値です。負の場合は、見出しに続
くテキストのインデントを抑制します。

`<afterskip>` 正のとき、見出しの後の垂直方向のスペースとなります。負の場合は、
見出しの後の水平方向のスペースとなります。

`<style>` 見出しのスタイルを設定するコマンドです。

`<*>` 見出し番号を付けないとき、対応するカウンタは増加します。

`<heading>` 新しい見出しの文字列です。

見出しコマンドは通常、`\@startsection` と 6 つの引数で定義されています。

`\secdef` マクロは、見出しコマンドを `\@startsection` を用いなくて定義すると
きに使います。このマクロは、2 つの引数を持ちます。

`\secdef<unstarcmds><starcmds>`

`<unstarcmds>` 見出しコマンドの普通の形式で使われます。

`<starcmds>` `*` 形式の見出しコマンドで使われます。

`\secdef` は次のようにして使うことができます。

```
\def\chapter {... \secdef \CMDA \CMDB }  
\def\CMDA    [#1]#2{...} % \chapter[...]{...} の定義  
\def\CMDB    #1{...}    % \chapter*{...} の定義
```


14.3.5 part レベル

`\part` このコマンドは、新しいパート（部）をはじめます。

article クラスの場合は、簡単です。

新しい段落を開始し、小さな空白を入れ、段落後のインデントを行い、`\secdef`で作成します。（アスキーによる元のドキュメントには「段落後のインデントをしないようにし」と書かれていましたが、実際のコードでは段落後のインデントを行っていました。そこで日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティは、ドキュメントをコードに合わせて「段落後のインデントを行い」へと修正しました。）

```
1163 <*article>
1164 \newcommand{\part}{%
1165   \if@noskipsec \leavevmode \fi
1166   \par\addvspace{4ex}%
1167   \@afterindenttrue
1168   \secdef\@part\@spart}
1169 </article>
```

report と book スタイルの場合は、少し複雑です。

まず、右ページからはじまるように改ページをします。そして、部扉のページスタイルを *empty* にします。2 段組の場合でも、1 段組で作成しますが、後ほど 2 段組に戻すために、`\@restonecol` スイッチを使います。

```
1170 <*report | book>
1171 \newcommand{\part}{%
1172   \if@openleft \cleardoublepage \else
1173   \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1174   \thispagestyle{empty}%
1175   \if@twocolumn\onecolumn\@tempwatrue\else\@tempwafalse\fi
1176   \null\vfil
1177   \secdef\@part\@spart}
1178 </report | book>
```

`\@part` このマクロが実際に部レベルの見出しを作成します。このマクロも文書クラスによって定義が異なります。

article クラスの場合は、`secnumdepth` が -1 よりも大きいとき、見出し番号を付けます。このカウンタが -1 以下の場合には付けません。

```
1179 <*article>
1180 \def\@part[#1]#2{%
1181   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1182     \refstepcounter{part}%
1183     \addcontentsline{toc}{part}{%
1184       \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1zw}#1}%
1185   \else
1186     \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1187   \fi
1188   \markboth{}{}}%
```

```

1189 {\parindent\z@\raggedright
1190 \interlinepenalty\@M\normalfont
1191 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1192 \Large\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
1193 \par\nobreak
1194 \fi
1195 \huge\bfseries#2\par}%
1196 \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
1197 </article>

```

report と book クラスの場合は、secnumdepth が -2 よりも大きいときに、見出し番号を付けます。-2 以下では付けません。

```

1198 <*report | book>
1199 \def\@part[#1]#2{%
1200 \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1201 \refstepcounter{part}%
1202 \addcontentsline{toc}{part}{%
1203 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1em}#1}%
1204 \else
1205 \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
1206 \fi
1207 \markboth{}{}%
1208 {\centering
1209 \interlinepenalty\@M\normalfont
1210 \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
1211 \huge\bfseries\prepartname\thepart\postpartname
1212 \par\vskip20\p@
1213 \fi
1214 \Huge\bfseries#2\par}%
1215 \@endpart}
1216 </report | book>

```

\@spart このマクロは、番号を付けないときの体裁です。

```

1217 <*article>
1218 \def\@spart#1{%
1219 \parindent\z@\raggedright
1220 \interlinepenalty\@M\normalfont
1221 \huge\bfseries#1\par}%
1222 \nobreak\vskip3ex\@afterheading}
1223 </article>

1224 <*report | book>
1225 \def\@spart#1{%
1226 \centering
1227 \interlinepenalty\@M\normalfont
1228 \Huge\bfseries#1\par}%
1229 \@endpart}
1230 </report | book>

```

`\@endpart` `\@part` と `\@spart` の最後で実行されるマクロです。両面印刷モードのときは、白ページを追加します。二段組モードのときには、これ以降のページを二段組に戻します。2016 年 12 月から、`openany` のときに白ページを追加するのをやめました。このバグは L^AT_EX では `classes.dtx` v1.4b (2000/05/19) で修正されていました。(参考: latex/3155、texjporg/jsclasses#48)

```

1231 <*report | book>
1232 \def\@endpart{\vfil\newpage
1233   \if@twoside
1234     \if@openleft %% \if@openleft added (2017/02/15)
1235     \null\thispagestyle{empty}\newpage
1236   \else\if@openright %% \if@openright added (2016/12/18)
1237     \null\thispagestyle{empty}\newpage
1238   \fi\fi %% added (2016/12/18, 2017/02/15)
1239   \fi

```

二段組文書のとき、スイッチを二段組モードに戻す必要があります。

```

1240   \if@tempswa\twocolumn\fi}
1241 </report | book>

```

14.3.6 chapter レベル

`chapter` 章レベルは、必ずページの先頭から開始します。`openright` オプションが指定されている場合は、右ページからはじまるように `\cleardoublepage` を呼び出します。そうでなければ、`\clearpage` を呼び出します。なお、縦組の場合でも右ページからはじまるように、フォーマットファイルで `\clerdoublepage` が定義されています。

日本語 *T_EX* 開発コミュニティによる補足: コミュニティ版の実装では、`openright` と `openleft` の場合に `\cleardoublepage` をクラスファイルの中で再々定義しています。12 を参照してください。

章見出しが出力されるページのスタイルは、`jpl@in` になります。`jpl@in` は、`headnomble` か `footnomble` のいずれかです。詳細は、第 13 節を参照してください。

また、`\@topnum` をゼロにして、章見出しの上にトップフロートが置かれないうにしています。

```

1242 <*report | book>
1243 \newcommand{\chapter}{%
1244   \if@openleft \cleardoublepage \else
1245   \if@openright \cleardoublepage \else \clearpage \fi \fi
1246   \thispagestyle{jpl@in}%
1247   \global\@topnum\z@
1248   \@afterindenttrue
1249   \secdef\@chapter\@schapter}

```

`\@chapter` このマクロは、章見出しに番号を付けるときに呼び出されます。`secnumdepth` が `-1` よりも大きく、`\@mainmatter` が真 (book クラスの場合) のときに、番号を出力し

ます。

日本語 $T_E X$ 開発コミュニティによる補足：本家 $L^A T_E X$ の `classes` では、二段組のときチャプタータイトルは一段組に戻されますが、アスキーによる `jclasses` では二段組のままにされています。したがって、チャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るという挙動になっていますが、コミュニティ版でもアスキー版の挙動を維持しています。

```
1250 \def\@chapter[#1]#2{%
1251   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1252 \<book>   \if@mainmatter
1253     \refstepcounter{chapter}%
1254     \typeout{\@chapapp\space\thechapter\space\@chappos}%
1255     \addcontentsline{toc}{chapter}%
1256       {\protect\numberline{\@chapapp\thechapter\@chappos}#1}%
1257 \<book>   \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
1258   \else
1259     \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
1260   \fi
1261   \chaptermark{#1}%
1262   \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\p@}}%
1263   \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\p@}}%
1264   \@makechapterhead{#2}\@afterheading}
```

`\@makechapterhead` このマクロが実際に章見出しを組み立てます。

```
1265 \def\@makechapterhead#1{\hbox{%
1266   \vskip2\Cvs
1267   {\parindent\z@
1268     \raggedright
1269     \normalfont\huge\bfseries
1270     \leavevmode
1271     \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1272       \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1273 \<book>   \if@mainmatter
1274         \setbox\z@\hbox{\@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1zw}%
1275         \addtolength\@tempdima{-\wd\z@}%
1276         \unhbox\z@\nobreak
1277 \<book>   \fi
1278         \vtop{\hsize\@tempdima#1}%
1279       \else
1280         #1\relax
1281       \fi}\nobreak\vskip3\Cvs}
```

`\@schapter` このマクロは、章見出しに番号を付けないときに呼び出されます。

日本語 $T_E X$ 開発コミュニティによる補足：やはり二段組でチャプタータイトルより高い位置に右カラムの始点が来るという挙動を維持してあります。

```
1282 \def\@schapter#1{%
1283   \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
1284 }
```

`\makeschapterhead` 番号を付けない場合の形式です。

```
1285 \def\makeschapterhead#1{\hbox{}}%
1286 \vskip2\Cvs
1287 {\parindent\z@
1288 \raggedright
1289 \normalfont\huge\bfseries
1290 \leavevmode
1291 \setlength\@tempdima{\linewidth}%
1292 \vtop{\hsize\@tempdima#1}\vskip3\Cvs}
1293 </report | book>
```

14.3.7 下位レベルの見出し

`\section` 見出しの前後に空白を付け、`\Large\bfseries` で出力をします。

```
1294 \newcommand{\section}{\@startsection{section}{1}{\z@}%
1295 {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%
1296 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%
1297 {\normalfont\Large\bfseries}}
```

`\subsection` 見出しの前後に空白を付け、`\large\bfseries` で出力をします。

```
1298 \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
1299 {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%
1300 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%
1301 {\normalfont\large\bfseries}}
```

`\subsubsection` 見出しの前後に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。

```
1302 \newcommand{\subsubsection}{\@startsection{subsubsection}{3}{\z@}%
1303 {1.5\Cvs \@plus.5\Cvs \@minus.2\Cvs}%
1304 {.5\Cvs \@plus.3\Cvs}%
1305 {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

`\paragraph` 見出しの前に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。見出しの後ろで改行されません。

```
1306 \newcommand{\paragraph}{\@startsection{paragraph}{4}{\z@}%
1307 {3.25ex \@plus 1ex \@minus .2ex}%
1308 {-1em}%
1309 {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

`\subparagraph` 見出しの前に空白を付け、`\normalsize\bfseries` で出力をします。見出しの後ろで改行されません。

```
1310 \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
1311 {3.25ex \@plus 1ex \@minus .2ex}%
1312 {-1em}%
1313 {\normalfont\normalsize\bfseries}}
```

14.3.8 付録

`\appendix` article クラスの場合、`\appendix` コマンドは次のことを行ないます。

- `section` と `subsection` カウンタをリセットする。
- `\thesection` を英小文字で出力するように再定義する。

```
1314 <*article>
1315 \newcommand{\appendix}{\par
1316   \setcounter{section}{0}%
1317   \setcounter{subsection}{0}%
1318   <tate> \renewcommand{\thesection}{\rensuji{\@Alph{c}{section}}}
1319   <yoko> \renewcommand{\thesection}{\@Alph{c}{section}}
1320 </article>
```

`report` と `book` クラスの場合、`\appendix` コマンドは次のことを行ないます。

- `chapter` と `section` カウンタをリセットする。
- `\@chapapp` を `\appendixname` に設定する。
- `\@chappos` を空にする。
- `\thechapter` を英小文字で出力するように再定義する。

```
1321 <*report | book>
1322 \newcommand{\appendix}{\par
1323   \setcounter{chapter}{0}%
1324   \setcounter{section}{0}%
1325   \renewcommand{\@chapapp}{\appendixname}%
1326   \renewcommand{\@chappos}{\space}%
1327   <tate> \renewcommand{\thechapter}{\rensuji{\@Alph{c}{chapter}}}
1328   <yoko> \renewcommand{\thechapter}{\@Alph{c}{chapter}}
1329 </report | book>
```

14.4 リスト環境

ここではリスト環境について説明をしています。

リスト環境のデフォルトは次のように設定されます。

まず、`\rightmargin`, `\listparindent`, `\itemindent` をゼロにします。そして、`K` 番目のレベルのリストは `\@listK` で示されるマクロが呼び出されます。ここで '`K`' は小文字のローマ数字で示されます。たとえば、3 番目のレベルのリストとして `\@listiii` が呼び出されます。`\@listK` は `\leftmargin` を `\leftmarginK` に設定します。

`\leftmargin` 二段組モードのマージンは少しだけ小さく設定してあります。

```

\leftmargin 1330 \if@twocolumn
\leftmarginii 1331 \setlength\leftmarginii {2em}
\leftmarginiii 1332 \else
\leftmarginiv 1333 \setlength\leftmarginiv {2.5em}
\leftmarginv 1334 \fi

\leftmarginvi 次の3つの値は、\labelsep とデフォルトラベル（‘(m)’, ‘vii.’, ‘M.’）の幅の合計より
\leftmarginvii も大きくしてあります。
1335 \setlength\leftmarginvii {2.2em}
1336 \setlength\leftmarginviii {1.87em}
1337 \setlength\leftmarginix {1.7em}
1338 \if@twocolumn
1339 \setlength\leftmarginx {1.5em}
1340 \setlength\leftmarginxi {1.5em}
1341 \else
1342 \setlength\leftmarginx {1em}
1343 \setlength\leftmarginxi {1em}
1344 \fi

\labelsep \labelsep はラベルとテキストの項目の間の距離です。 \labelwidth はラベルの幅
\labelwidth です。
1345 \setlength \labelsep {.5em}
1346 \setlength \labelwidth{\leftmarginii}
1347 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}

\@beginparpenalty これらのペナルティは、リストや段落環境の前後に挿入されます。
\@endparpenalty
\@itempenalty このペナルティは、リスト項目の間に挿入されます。
1348 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
1349 \@endparpenalty -\@lowpenalty
1350 \@itempenalty -\@lowpenalty
1351 </article | report | book>

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合、\parskip と \topsep に \partopsep が加えられた値の縦方向の空白が取られます。
1352 <10pt>\setlength\partopsep{2\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
1353 <11pt>\setlength\partopsep{3\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}
1354 <12pt>\setlength\partopsep{3\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

\@listi \@listi は、\leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義をします。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます（たとえば、\small の中では“小さい”リストパラメータになります）。
\@listI このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せるように、\@listI は \@listi のコピーを保存するように定義されています。

```

```

1355 <*10pt | 11pt | 12pt>
1356 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
1357 <*10pt>
1358 \parsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1359 \topsep 8\p@ \@plus2\p@ \@minus4\p@
1360 \itemsep4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
1361 </10pt>
1362 <*11pt>
1363 \parsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1364 \topsep 9\p@ \@plus3\p@ \@minus5\p@
1365 \itemsep4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@}
1366 </11pt>
1367 <*12pt>
1368 \parsep 5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@
1369 \topsep 10\p@ \@plus4\p@ \@minus6\p@
1370 \itemsep5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@}
1371 </12pt>
1372 \let\@listI\@listi

```

ここで、パラメータを初期化しますが、厳密には必要ありません。

```

1373 \@listi

```

\@listii 下位レベルのリスト環境のパラメータの設定です。これらは保存用のバージョンを
\@listiii 持たないことと、フォントサイズコマンドによって変更されないことに注意をして
\@listiv ください。言い換えれば、このクラスは、本文サイズが\ normalsize で現れるリス
\@listv トの入れ子についてだけ考えています。

```

\@listvi 1374 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
1375 \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
1376 <*10pt>
1377 \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1378 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1379 </10pt>
1380 <*11pt>
1381 \topsep 4.5\p@ \@plus2\p@ \@minus\p@
1382 \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1383 </11pt>
1384 <*12pt>
1385 \topsep 5\p@ \@plus2.5\p@ \@minus\p@
1386 \parsep 2.5\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1387 </12pt>
1388 \itemsep\parsep}
1389 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
1390 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
1391 <10pt> \topsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1392 <11pt> \topsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1393 <12pt> \topsep 2.5\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
1394 \parsep\z@
1395 \partopsep \p@ \@plus\z@ \@minus\p@

```



```

1396 \itemsep\topsep}
1397 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
1398 \labelwidth\leftmarginiv
1399 \advance\labelwidth-\labelsep}
1400 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
1401 \labelwidth\leftmarginv
1402 \advance\labelwidth-\labelsep}
1403 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
1404 \labelwidth\leftmarginvi
1405 \advance\labelwidth-\labelsep}
1406 </10pt | 11pt | 12pt>

```

14.4.1 enumerate 環境

enumerate 環境は、カウンタ *enumi*, *enumii*, *enumiii*, *enumiv* を使います。enum*N* は *N* 番目のレベルの番号を制御します。

`\theenumi` 出力する番号の書式を設定します。これらは、すでに `ltlists.dtx` で定義されています。
`\theenumii` ます。

```

\theenumiii 1407 <*article | report | book>
1408 <*tate>
\theenumiv 1409 \renewcommand{\theenumi}{\rensuji{\@arabic\c@enumi}}
1410 \renewcommand{\theenumii}{\rensuji{(\@alph\c@enumii)}}
1411 \renewcommand{\theenumiii}{\rensuji{\@roman\c@enumiii}}
1412 \renewcommand{\theenumiv}{\rensuji{\@Alph\c@enumiv}}
1413 </tate>
1414 <*yoko>
1415 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}
1416 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}
1417 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}
1418 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}
1419 </yoko>

```

`\labelenumi` enumerate 環境のそれぞれの項目のラベルは、`\labelenumi ... \labelenumiv` で
`\labelenumii` 生成されます。

```

\labelenumiii 1420 <*tate>
\labelenumiv 1421 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi}
1422 \newcommand{\labelenumii}{\theenumii}
1423 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii}
1424 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv}
1425 </tate>
1426 <*yoko>
1427 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
1428 \newcommand{\labelenumii}{(\theenumii)}
1429 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
1430 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
1431 </yoko>

```

`\p@enumii` `\ref` コマンドによって、`enumerate` 環境の N 番目のリスト項目が参照されるとき
`\p@enumiii` の書式です。

```
\p@enumiv 1432 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}
           1433 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi(\theenumii)}
           1434 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

`enumerate` トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、
 変更します。この環境は、`ltlists.dtx` で定義されています。

```
1435 \renewenvironment{enumerate}
1436   {\ifnum \@enumdepth >\thr@@\@toodeep\else
1437     \advance\@enumdepth\@ne
1438     \edef\@enumctr{enum\romannumeral\the\@enumdepth}%
1439     \expandafter \list \csname label\@enumctr\endcsname{%
1440       \iftdir
1441         \ifnum \@listdepth=\@ne \topsep.5\normalbaselineskip
1442         \else\topsep\z@\fi
1443         \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1444         \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1445         \ifnum \@enumdepth=\@ne \leftmargin1zw\relax
1446         \else\leftmargin\leftskip\fi
1447         \advance\leftmargin 1zw
1448       \fi
1449       \usecounter{\@enumctr}%
1450       \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%
1451     \fi}{\endlist}
```

14.4.2 itemize 環境

`\labelitemi` `itemize` 環境のそれぞれの項目のラベルは、`\labelenumi ... \labelenumiv` で生成
`\labelitemii` されます。

```
\labelitemiii 1452 \newcommand{\labelitemi}{\textbullet}
               1453 \newcommand{\labelitemii}{%
\labelitemiv 1454   \iftdir
               1455     {\textcircled{~}}
               1456   \else
               1457     {\normalfont\bfseries\textendash}
               1458   \fi
               1459 }
               1460 \newcommand{\labelitemiii}{\textasteriskcentered}
               1461 \newcommand{\labelitemiv}{\textperiodcentered}
```

`itemize` トップレベルで使われたときに、最初と最後に半行分のスペースを開けるように、
 変更します。この環境は、`ltlists.dtx` で定義されています。

```
1462 \renewenvironment{itemize}
1463   {\ifnum \@itemdepth >\thr@@\@toodeep\else
1464     \advance\@itemdepth\@ne
```

```

1465 \edef\@itemitem{labelitem\romannumeral\the\@itemdepth}%
1466 \expandafter \list \csname \@itemitem\endcsname{%
1467   \iftdir
1468     \ifnum \@listdepth=\@one \topsep.5\normalbaselineskip
1469     \else\topsep\z@\fi
1470     \parskip\z@ \itemsep\z@ \parsep\z@
1471     \labelwidth1zw \labelsep.3zw
1472     \ifnum \@itemdepth =\@one \leftmargin1zw\relax
1473     \else\leftmargin\leftskip\fi
1474     \advance\leftmargin 1zw
1475   \fi
1476   \def\makelabel##1{\hss\llap{##1}}}%
1477 \fi}{\endlist}

```

14.4.3 description 環境

description description 環境を定義します。縦組時には、インデントが3字分だけ深くなります。

```

1478 \newenvironment{description}
1479 {\list{}{\labelwidth\z@ \itemindent-\leftmargin
1480   \iftdir
1481     \leftmargin\leftskip \advance\leftmargin3\Cwd
1482     \rightmargin\rightskip
1483     \labelsep=1zw \itemsep\z@
1484     \listparindent\z@ \topskip\z@ \parskip\z@ \partopsep\z@
1485   \fi
1486     \let\makelabel\descriptionlabel}}{\endlist}

```

\descriptionlabel ラベルの形式を変更する必要がある場合は、**\descriptionlabel** を再定義してください。

```

1487 \newcommand{\descriptionlabel}[1]{%
1488   \hspace\labelsep\normalfont\bfseries #1}

```

14.4.4 verse 環境

verse verse 環境は、リスト環境のパラメータを使って定義されています。改行をするには **** を用います。**** は **\@centercr** に **\let** されています。

```

1489 \newenvironment{verse}
1490 {\let\\ \@centercr
1491   \list{}{\itemsep\z@ \itemindent -1.5em%
1492     \listparindent\itemindent
1493     \rightmargin\leftmargin \advance\leftmargin 1.5em}%
1494   \item\relax}{\endlist}

```

14.4.5 quotation 環境

quotation quotation 環境もまた、list 環境のパラメータを使用して定義されています。この環境の各行は、**\textwidth** よりも小さく設定されています。この環境における、段

落の最初の行はインデントされます。

```
1495 \newenvironment{quotation}
1496   {\list{}{\listparindent 1.5em%
1497             \itemindent\listparindent
1498             \rightmargin\leftmargin
1499             \parsep\z@ \@plus\p@}%
1500   \item\relax}{\endlist}
```

14.4.6 quote 環境

`quote` `quote` 環境は、段落がインデントされないことを除き、`quotation` 環境と同じです。

```
1501 \newenvironment{quote}
1502   {\list{}{\rightmargin\leftmargin}%
1503   \item\relax}{\endlist}
```

14.5 フロート

`ltfloat.dtx` では、フロートオブジェクトを操作するためのツールしか定義していません。タイプが `TYPE` のフロートオブジェクトを扱うマクロを定義するには、次の変数が必要です。

`\fps@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートを置くデフォルトの位置です。

`\ftype@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートの番号です。各 `TYPE` には、一意な、2 の倍数の `TYPE` 番号を割り当てます。たとえば、図が番号 1 ならば、表は 2 です。次のタイプは 4 となります。

`\ext@TYPE` タイプ `TYPE` のフロートの目次を出力するファイルの拡張子です。たとえば、`\ext@figure` は `'lot'` です。

`\fnum@TYPE` キャプション用の図番号を生成するマクロです。たとえば、`\fnum@figure` は `'図 \thefigure'` を作ります。

14.5.1 figure 環境

ここでは、`figure` 環境を実装しています。

`\c@figure` 図番号です。

```
\thefigure 1504 <article>\newcounter{figure}
1505 <report | book>\newcounter{figure}[chapter]
1506 <*tate>
1507 <article>\renewcommand{\thefigure}{\rensuji{\@arabic\c@figure}}
```

```

1508 <*report | book>
1509 \renewcommand{\thefigure}{%
1510   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{}\fi\rensuji{\@arabic\c@figure}}
1511 </report | book>
1512 </tate>
1513 <*yoko>
1514 <article>\renewcommand{\thefigure}{\@arabic\c@figure}
1515 <*report | book>
1516 \renewcommand{\thefigure}{%
1517   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi\@arabic\c@figure}
1518 </report | book>
1519 </yoko>

```

`\fps@figure` フロートオブジェクトタイプ “figure” のためのパラメータです。

```

\ftype@figure 1520 \def\fps@figure{tbp}
\ext@figure    1521 \def\ftype@figure{1}
               1522 \def\ext@figure{lof}
\fnm@figure    1523 <tate>\def\fnm@figure{figurename\thefigure}
               1524 <yoko>\def\fnm@figure{figurename~\thefigure}

```

`figure` *形式は2段抜きのフロートとなります。

```

figure* 1525 \newenvironment{figure}
          1526             {\@float{figure}}
          1527             {\end@float}
          1528 \newenvironment{figure*}
          1529             {\@dblfloat{figure}}
          1530             {\end@dblfloat}

```

14.5.2 table 環境

ここでは、table 環境を実装しています。

`\c@table` 表番号です。

```

\thetable 1531 <article>\newcounter{table}
          1532 <report | book>\newcounter{table}[chapter]
          1533 <*tate>
          1534 <article>\renewcommand{\thetable}{\rensuji{\@arabic\c@table}}
          1535 <*report | book>
          1536 \renewcommand{\thetable}{%
          1537   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter{}\fi\rensuji{\@arabic\c@table}}
          1538 </report | book>
          1539 </tate>
          1540 <*yoko>
          1541 <article>\renewcommand{\thetable}{\@arabic\c@table}
          1542 <*report | book>
          1543 \renewcommand{\thetable}{%
          1544   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi\@arabic\c@table}
          1545 </report | book>

```

1546 $\langle /yoko \rangle$

`\fps@table` フロートオブジェクトタイプ “table” のためのパラメータです。

```
\ftype@table 1547 \def\fps@table{tbp}
\ext@table    1548 \def\ftype@table{2}
              1549 \def\ext@table{lot}
\fnun@table   1550 \def\fnun@table{\tablename\thetable}
              1551 \def\fnun@table{\tablename~\thetable}
```

`table` *形式は2段抜きのフロートとなります。

```
table* 1552 \newenvironment{table}
        1553             {\@float{table}}
        1554             {\end@float}
        1555 \newenvironment{table*}
        1556             {\@dblfloat{table}}
        1557             {\end@dblfloat}
```

14.6 キャプション

`\@makecaption` `\caption` コマンドは、キャプションを組み立てるために `\@mkcaption` を呼出します。このコマンドは二つの引数を取ります。一つは、 $\langle number \rangle$ で、フロートオブジェクトの番号です。もう一つは、 $\langle text \rangle$ でキャプション文字列です。 $\langle number \rangle$ には通常、‘図 3.2’ のような文字列が入っています。このマクロは、`\parbox` の中で呼び出されます。書体は `\normalsize` です。

`\abovecaptionskip` これらの長さはキャプションの前後に挿入されるスペースです。

```
\belowcaptionskip 1558 \newlength\abovecaptionskip
                  1559 \newlength\belowcaptionskip
                  1560 \setlength\abovecaptionskip{10\p@}
                  1561 \setlength\belowcaptionskip{0\p@}
```

キャプション内で複数の段落を作成することができるように、このマクロは `\long` で定義をします。

```
1562 \long\def\@makecaption#1#2{%
1563   \vskip\abovecaptionskip
1564   \iftdir\sbbox\@tempboxa{#1\hskip1zw#2}%
1565     \else\sbbox\@tempboxa{#1: #2}%
1566   \fi
1567   \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
1568     \iftdir #1\hskip1zw#2\relax\par
1569     \else #1: #2\relax\par\fi
1570   \else
1571     \global \@minipagefalse
1572     \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1573   \fi
1574   \vskip\belowcaptionskip}
```

14.7 コマンドパラメータの設定

14.7.1 array と tabular 環境

`\arraycolsep` array 環境のカラムは `2\arraycolsep` で分離されます。

```
1575 \setlength\arraycolsep{5\p@}
```

`\tabcolsep` tabular 環境のカラムは `2\tabcolsep` で分離されます。

```
1576 \setlength\tabcolsep{6\p@}
```

`\arrayrulewidth` array と tabular 環境内の罫線の幅です。

```
1577 \setlength\arrayrulewidth{.4\p@}
```

`\doublerulesep` array と tabular 環境内の罫線間を調整する空白です。

```
1578 \setlength\doublerulesep{2\p@}
```

14.7.2 tabbing 環境

`\tabbingsep` ‘\’ コマンドで置かれるスペースを制御します。

```
1579 \setlength\tabbingsep{\labelsep}
```

14.7.3 minipage 環境

`\@mpfootins` minipage にも脚注を付けることができます。 `\skip\@mpfootins` は、通常の `\skip\footins` と同じような動作をします。

```
1580 \skip\@mpfootins = \skip\footins
```

14.7.4 framebox 環境

`\fboxsep` `\fboxsep` は、`\fbox` と `\framebox` での、テキストとボックスの間に入る空白です。

`\fboxrule` `\fboxrule` は `\fbox` と `\framebox` で作成される罫線の幅です。

```
1581 \setlength\fboxsep{3\p@}
```

```
1582 \setlength\fboxrule{.4\p@}
```

14.7.5 equation と eqnarray 環境

`\theequation` equation カウンタは、新しい章の開始でリセットされます。また、equation 番号には、章番号が付きます。

このコードは `\chapter` 定義の後、より正確には chapter カウンタの定義の後、でなくてはなりません。

```
1583 <article>\renewcommand{\theequation}{\@arabic{c@equation}}
```

```
1584 <*report | book>
```

```
1585 \@addtoreset{equation}{chapter}
```

```

1586 \renewcommand{\theequation}{%
1587   \ifnum\c@chapter>\z@\thechapter.\fi \@arabic\c@equation}
1588 </report|book>

```

15 フォントコマンド

`disablejfam` オプションが指定されていない場合には、以下の設定がなされます。まず、数式内に日本語を直接、記述するために数式記号用文字に“`JY2/mc/m/n`”を登録します。数式バージョンが `bold` の場合は、“`JY2/gt/m/n`”を用います。これらは、`\mathmc`, `\mathgt` として登録されます。また、日本語数式ファミリとして `\symmincho` がこの段階で設定されます。`mathrmmc` オプションが指定されていた場合には、これに引き続き `\mathrm` と `\mathbf` を和欧文両対応にするための作業がなされます。この際、他のマクロとの衝突を避けるため `\AtBeginDocument` を用いて展開順序を遅らせる必要があります。

`disablejfam` オプションが指定されていた場合には、`\mathmc` と `\mathgt` に対してエラーを出すだけのダミーの定義を与える設定のみが行われます。

変更

pL^AT_EX 2.09 compatibility mode では和文数式フォント `fam` が2重定義されていたので、その部分を変更しました。

```

1589 \if@enablejfam
1590   \if@compatibility\else
1591     \DeclareSymbolFont{mincho}{JY2}{mc}{m}{n}
1592     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
1593     \SetSymbolFont{mincho}{bold}{JY2}{gt}{m}{n}
1594     \jfam\symmincho
1595     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{JY2}{gt}{m}{n}
1596   \fi
1597   \if@mathrmmc
1598     \AtBeginDocument{%
1599       \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}
1600       \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathgt}
1601     }%
1602   \fi
1603 \else
1604   \DeclareRobustCommand{\mathmc}{%
1605     \@latex@error{Command \noexpand\mathmc invalid with\space
1606       'disablejfam' class option.}\@eha
1607   }
1608   \DeclareRobustCommand{\mathgt}{%
1609     \@latex@error{Command \noexpand\mathgt invalid with\space
1610       'disablejfam' class option.}\@eha
1611   }
1612 \fi

```


ここでは L^AT_EX 2.09 で一般的に使われていたコマンドを定義しています。これらのコマンドはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のために提供をしますが、できるだけ `\text...` と `\math...` を使うようにしてください。

`\mc` これらのコマンドはフォントファミリーを変更します。互換モードの同名コマンドと
`\gt` 異なり、すべてのコマンドがデフォルトフォントにリセットしてから、対応する属
`\rm` 性を変更することに注意してください。

```
\sf 1613 \DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
\gt 1614 \DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathgt}
\rm 1615 \DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
1616 \DeclareOldFontCommand{\sf}{\normalfont\sffamily}{\mathsf}
1617 \DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mathtt}
```

`\bf` このコマンドはボールド書体にします。ノーマル書体に変更するには、`\mdseries` と指定をします。

```
1618 \DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mathbf}
```

`\it` これらのコマンドはフォントシェイプを切替えます。スラント体とスモールキャッ
`\sl` プの数式アルファベットはありませんので、数式モードでは何もしませんが、警告
`\sc` メッセージを出力します。`\upshape` コマンドで通常のシェイプにすることができます。

```
1619 \DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mathit}
1620 \DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\@nomath\sl}
1621 \DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}
```

`\cal` これらのコマンドは数式モードでだけ使うことができます。数式モード以外では何
`\mit` もしません。現在の NFSS は、これらのコマンドが警告を生成するように定義して
 いますので、‘手ずから’定義する必要があります。

```
1622 \DeclareRobustCommand*\cal{\@fontswitch\relax\mathcal}
1623 \DeclareRobustCommand*\mit{\@fontswitch\relax\mathnormal}
```

16 相互参照

16.1 目次

`\section` コマンドは、`.toc` ファイルに、次のような行を出力します。

```
\contentsline{section}{\langle title \rangle}{\langle page \rangle}
```

`\langle title \rangle` には項目が、`\langle page \rangle` にはページ番号が入ります。`\section` に見出し番号が付く場合は、`\langle title \rangle` は、`\numberline{\langle num \rangle}{\langle heading \rangle}` となります。`\langle num \rangle` は `\thesection` コマンドで生成された見出し番号です。`\langle heading \rangle` は見出し文字列です。この他の見出しコマンドも同様です。

figure 環境での `\caption` コマンドは、`.lof` ファイルに、次のような行を出力します。

```
\contentsline{figure}{\numberline{<num>}{ <caption>}}{<page>}
```

`<num>` は、`\thefigure` コマンドで生成された図番号です。`<caption>` は、キャプション文字列です。table 環境も同様です。

`\contentsline{<name>}` コマンドは、`\l@<name>` に展開されます。したがって、目次の体裁を記述するには、`\l@chapter`, `\l@section`などを定義します。図目次のためには `\l@figure` です。これらの多くのコマンドは `\@dottedtocline` コマンドで定義されています。このコマンドは次のような書式となっています。

```
\@dottedtocline{<level>}{<indent>}{<numwidth>}{<title>}{<page>}
```

`<level>` “`<level> <= tocdepth`” のときにだけ、生成されます。`\chapter` はレベル 0、`\section` はレベル 1、... です。

`<indent>` 一番外側からの左マージンです。

`<numwidth>` 見出し番号 (`\numberline` コマンドの `<num>`) が入るボックスの幅です。

`\c@tocdepth` `tocdepth` は、目次ページに出力をする見出しレベルです。

```
1624 <article>\setcounter{tocdepth}{3}
```

```
1625 <!article>\setcounter{tocdepth}{2}
```

また、目次を生成するために次のパラメータも使います。

`\@pnumwidth` ページ番号の入るボックスの幅です。

```
1626 \newcommand{\@pnumwidth}{1.55em}
```

`\@tocmarg` 複数行にわたる場合の右マージンです。

```
1627 \newcommand{\@tocmarg}{2.55em}
```

`\@dotsep` ドットの間隔 (mu 単位) です。2 や 1.7 のように指定をします。

```
1628 \newcommand{\@dotsep}{4.5}
```

`\toclineskip` この長さ変数は、目次項目の間に入るスペースの長さです。デフォルトはゼロとなっています。縦組のとき、スペースを少し広げます。

```
1629 \newdimen\toclineskip
```

```
1630 <yoko>\setlength\toclineskip{\z@}
```

```
1631 <tate>\setlength\toclineskip{2\p@}
```

`\numberline` `\numberline` マクロの定義を示します。オリジナルの定義では、ボックスの幅を `\@lnumwidth` `\@tempdima` にしていますが、この変数はいろいろな箇所で使われますので、期待した値が入らない場合があります。

フォント選択コマンドの後、あるいは `\numberline` マクロの中でフォントを切替えてもよいのですが、一時変数を意識したくないので、見出し番号の入るボックスを `\@lnumwidth` 変数を用いて組み立てるように `\numberline` マクロを再定義します。

```
1632 \newdimen\@lnumwidth
1633 \def\numberline#1{\hb@xt@\@lnumwidth{#1\hfil}}
```

`\@dottedtocline` 目次の各行間に `\toclineskip` を入れるように変更します。このマクロは `ltsect.dtx` で定義されています。

```
1634 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{%
1635   \ifnum #1>\c@tocdepth \else
1636     \vskip\toclineskip \@plus.2\p@
1637     {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
1638     \parindent #2\relax\@afterindenttrue
1639     \interlinepenalty\@M
1640     \leavevmode
1641     \@lnumwidth #3\relax
1642     \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
1643     {#4}\nobreak
1644     \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu.\mkern \@dotsep mu$}%
1645     \hfill\nobreak
1646     \hb@xt@\@pnumwidth{\hss\normalfont \normalcolor #5}%
1647     \par}%
1648   \fi}
```

`\addcontentsline` 縦組の場合にページ番号を `\rensuji` で囲むように変更します。

このマクロは `ltsect.dtx` で定義されています。

```
1649 \def\addcontentsline#1#2#3{%
1650   \protected@write\@auxout
1651     {\let\label\@gobble \let\index\@gobble \let\glossary\@gobble
1652   \tate)\@temptokena{\rensuji{\thepage}}}%
1653   \yoko)\@temptokena{\thepage}}}%
1654   {\string\@writefile{#1}%
1655     {\protect\contentsline{#2}{#3}{\the\@temptokena}}}%
1656 }
```

16.1.1 本文目次

`\tableofcontents` 目次を生成します。

```
1657 \newcommand{\tableofcontents}{%
1658 \report | book)
1659   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
```

```

1660 \else\@restonecolfalse\fi
1661 \</report | book>
1662 \<article> \section*{\contentsname
1663 \<!article> \chapter*{\contentsname

```

\tableofcontents では、\@mkboth は heading の中に入れてあります。ほかの命令 (\listoffigures など) については、\@mkboth は heading の外に出してあります。これは L^AT_EX の classes.dtx に合わせています。

```

1664 \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
1665 }\@starttoc{toc}%
1666 \<report | book> \if@restonecol\twocolumn\fi
1667 }

```

\l@part part レベルの目次です。

```

1668 \newcommand*{\l@part}[2]{%
1669 \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
1670 \<article> \addpenalty{\@secpenalty}%
1671 \<!article> \addpenalty{-\@highpenalty}%
1672 \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
1673 \begingroup
1674 \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth
1675 \parfillskip-\@pnumwidth
1676 {\leavevmode\large\bfseries
1677 \setlength{\@lnumwidth}{4zw}%
1678 #1\hfil\nobreak
1679 \hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}}\par
1680 \nobreak
1681 \<article> \if@compatibility
1682 \global\@nobreaktrue
1683 \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
1684 \<article> \fi
1685 \endgroup
1686 \fi}

```

\l@chapter chapter レベルの目次です。

```

1687 \<*report | book>
1688 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
1689 \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
1690 \addpenalty{-\@highpenalty}%
1691 \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
1692 \begingroup
1693 \parindent\z@\rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
1694 \leavevmode\bfseries
1695 \setlength{\@lnumwidth}{4zw}%
1696 \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
1697 #1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}\par
1698 \penalty\@highpenalty
1699 \endgroup

```

```

1700 \fi}
1701 </report | book>

\l@section section レベルの目次です。
1702 <*article>
1703 \newcommand*{\l@section}[2]{%
1704 \ifnum \c@tocdepth >\z@
1705 \addpenalty{\@secpenalty}%
1706 \addvspace{1.0em \@plus\p}%
1707 \begingroup
1708 \parindent\z@ \rightskip\@pnumwidth \parfillskip-\rightskip
1709 \leavevmode\bfseries
1710 \setlength{\l@numwidth}{1.5em}%
1711 \advance\leftskip\l@numwidth \hskip-\leftskip
1712 #1\nobreak\hfil\nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{\hss#2}\par
1713 \endgroup
1714 \fi}
1715 </article>

1716 <*report | book>
1717 <tate>\newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
1718 <yoko>\newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}
1719 </report | book>

\l@subsection 下位レベルの目次項目の体裁です。
\l@subsubsection 1720 <*tate>
\l@paragraph 1721 <*article>
\l@subparagraph 1722 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{1zw}{4zw}}
1723 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2zw}{6zw}}
1724 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{3zw}{8zw}}
1725 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4zw}{9zw}}
1726 </article>
1727 <*report | book>
1728 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{2zw}{6zw}}
1729 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3zw}{8zw}}
1730 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{4zw}{9zw}}
1731 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{5zw}{10zw}}
1732 </report | book>
1733 </tate>
1734 <*yoko>
1735 <*article>
1736 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
1737 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
1738 \newcommand*{\l@paragraph} {\@dottedtocline{4}{7.0em}{4.1em}}
1739 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
1740 </article>
1741 <*report | book>
1742 \newcommand*{\l@subsection} {\@dottedtocline{2}{3.8em}{3.2em}}
1743 \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}

```

```

1744 \newcommand*{\l@paragraph}    {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
1745 \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
1746 \</report | book>
1747 \</yoko>

```

16.1.2 図目次と表目次

`\listoffigures` 図の一覧を作成します。

```

1748 \newcommand{\listoffigures}{%
1749 \<*report | book>
1750   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1751   \else\@restonecolfalse\fi
1752   \chapter*{\listfigurename}%
1753 \</report | book>
1754 \<article>   \section*{\listfigurename}%
1755   \mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
1756   \starttoc{lof}%
1757 \<report | book>   \if@restonecol\twocolumn\fi
1758 }

```

`\l@figure` 図目次の体裁です。

```

1759 \<tate> \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1zw}{4zw}}
1760 \<yoko> \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1.5em}{2.3em}}

```

`\listoftables` 表の一覧を作成します。

```

1761 \newcommand{\listoftables}{%
1762 \<*report | book>
1763   \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
1764   \else\@restonecolfalse\fi
1765   \chapter*{\listtablename}%
1766 \</report | book>
1767 \<article>   \section*{\listtablename}%
1768   \mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
1769   \starttoc{lot}%
1770 \<report | book>   \if@restonecol\twocolumn\fi
1771 }

```

`\l@table` 表目次の体裁は、図目次と同じにします。

```

1772 \let\l@table\l@figure

```

16.2 参考文献

`\bibindent` オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。

```

1773 \newdimen\bibindent
1774 \setlength\bibindent{1.5em}

```

`\newblock` `\newblock` のデフォルト定義は、小さなスペースを生成します。
 1775 `\newcommand{\newblock}{\hspace{.11em}\@plus.33em\@minus.07em}`

`thebibliography` 参考文献や関連図書のリストを作成します。
 1776 `\newenvironment{thebibliography}[1]`
 1777 `{\section*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}%`
 1778 `{\report|book}{\chapter*{\bibname}\@mkboth{\bibname}{\bibname}%`
 1779 `\list{\@biblabel{\@arabic{c@enumiv}}%`
 1780 `{\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%`
 1781 `\leftmargin\labelwidth`
 1782 `\advance\leftmargin\labelsep`
 1783 `\@openbib@code`
 1784 `\usecounter{enumiv}%`
 1785 `\let\p@enumiv\@empty`
 1786 `\renewcommand\theenumiv{\@arabic{c@enumiv}}%`
 1787 `\sloppy`
 1788 `\clubpenalty4000`
 1789 `\@clubpenalty\clubpenalty`
 1790 `\widowpenalty4000%`
 1791 `\sfcode'\.\@m}`
 1792 `{\def\@noitemerr`
 1793 `{\@latex@warning{Empty 'thebibliography' environment}}%`
 1794 `\endlist}`

`\@openbib@code` `\@openbib@code` のデフォルト定義は何もしません。この定義は、`openbib` オプションによって変更されます。
 1795 `\let\@openbib@code\@empty`

`\@biblabel` The label for a `\bibitem[...]` command is produced by this macro. The default from `latex.dtx` is used.
 1796 `% \renewcommand*{\@biblabel}[1]{#1\hfill}`

`\@cite` The output of the `\cite` command is produced by this macro. The default from `ltbibl.dtx` is used.
 1797 `% \renewcommand*{\@cite}[1]{[#1]}`

16.3 索引

`theindex` 2 段組の索引を作成します。索引の先頭のページのスタイルは `jpl@in` とします。したがって、`headings` と `bothstyle` に適した位置に出力されます。

1798 `\newenvironment{theindex}`
 1799 `{\if@twocolumn\@restonecolfalse\else\@restonecoltrue\fi`
 1800 `{\article} \twocolumn[\section*{\indexname}}%`
 1801 `{\report|book} \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}}%`
 1802 `\@mkboth{\indexname}{\indexname}%`
 1803 `\thispagestyle{jpl@in}\parindent\z@`

パラメータ `\columnseprule` と `\columnsep` の変更は、`\twocolumn` が実行された後でなければなりません。そうしないと、索引の前のページにも影響してしまうためです。

```
1804 \parskip\z@ \@plus .3\p@\relax
1805 \columnseprule\z@ \columnsep 35\p@
1806 \let\item\@idxitem}
1807 {\if@restonecol\onecolumn\else\clearpage\fi}
```

`\@idxitem` 索引項目の字下げ幅です。`\@idxitem` は `\item` の項目の字下げ幅です。

```
\subitem 1808 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 40\p@
1809 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{20\p@}}
\subsubitem 1810 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{30\p@}}
```

`\indexspace` 索引の“文字”見出しの前に入るスペースです。

```
1811 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p@ \@plus5\p@ \@minus3\p@\relax}
```

16.4 脚注

`\footnoterule` 本文と脚注の間に引かれる罫線です。

```
1812 \renewcommand{\footnoterule}{%
1813 \kern-3\p@
1814 \hrule\@width.4\columnwidth
1815 \kern2.6\p@}
```

`\c@footnote` report と book クラスでは、chapter レベルでリセットされます。

```
1816 \!article\@addtoreset{footnote}{chapter}
```

`\@makefnctext` このマクロにしたがって脚注が組まれます。

`\@makefnmark` は脚注記号を組み立てるマクロです。

```
1817 \!tate)
1818 \newcommand{\@makefnctext[1]{\parindent 1zw
1819 \noindent\hb@xt@ 2zw{\hss\@makefnmark}#1}
1820 \!tate)
1821 \!yoko)
1822 \newcommand{\@makefnctext[1]{\parindent 1em
1823 \noindent\hb@xt@ 1.8em{\hss\@makefnmark}#1}
1824 \!yoko)
```

17 今日の日付

組版時における現在の日付を出力します。

`\if 西暦` `\today` コマンドの‘年’を、西暦か和暦のどちらで出力するかを指定するコマンド
`\ 西暦` です。2018 年 7 月以降の日本語 $\mathrm{T}_{\mathrm{E}}\mathrm{X}$ 開発コミュニティ版 (v1.8) では、デフォルト
`\ 和暦` を和暦ではなく西暦に設定しています。

```
1825 \newif\if 西暦 \ 西暦 true
1826 \def\ 西暦{\ 西暦 true}
1827 \def\ 和暦{\ 西暦 false}
```

`\heisei` `\today` コマンドを `\rightmark` で指定したとき、`\rightmark` を出力する部分で
和暦のための計算ができないので、クラスファイルを読み込む時点で計算しておき
ます。

```
1828 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
```

`\today` 縦組の場合は、漢数字で出力します。

```
1829 \def\today{%
1830   \iftdir
1831     \if 西暦
1832       \kansuji\number\year 年
1833       \kansuji\number\month 月
1834       \kansuji\number\day 日
1835     \else
1836       平成 \ifnum\heisei=1 元年 \else\kansuji\number\heisei 年 \fi
1837       \kansuji\number\month 月
1838       \kansuji\number\day 日
1839     \fi
1840   \else
1841     \if 西暦
1842       \number\year~年
1843       \number\month~月
1844       \number\day~日
1845     \else
1846       平成 \ifnum\heisei=1 元年 \else\number\heisei~年 \fi
1847       \number\month~月
1848       \number\day~日
1849     \fi
1850   \fi}}
```

18 初期設定

```
\prepartname
\postpartname 1851 \newcommand{\prepartname}{第}
\prechaptername 1852 \newcommand{\postpartname}{部}
1853 \report | book \newcommand{\prechaptername}{第}
\postchaptername 1854 \report | book \newcommand{\postchaptername}{章}
```

```
\contentsname
\listfigurename
\listtablename
```

File d: ujclasses.dtx

```

1855 \newcommand{\contentsname}{目 次}
1856 \newcommand{\listfigurename}{図 目 次}
1857 \newcommand{\listtablename}{表 目 次}

\refname

\bibname 1858 <article>\newcommand{\refname}{参考文献}
\indexname 1859 <report | book>\newcommand{\bibname}{関連図書}
1860 \newcommand{\indexname}{索 引}

\figurename

\tablename 1861 \newcommand{\figurename}{図}
1862 \newcommand{\tablename}{表}

\appendixname

\abstractname 1863 \newcommand{\appendixname}{付 録}
1864 <article | report>\newcommand{\abstractname}{概 要}

1865 <book>\pagestyle{headings}
1866 <!book>\pagestyle{plain}
1867 \pagenumbering{arabic}
1868 \raggedbottom
1869 \if@twocolumn
1870   \twocolumn
1871   \sloppy
1872 \else
1873   \onecolumn
1874 \fi

```

\@mparswitch は傍注を左右（縦組では上下）どちらのマージンに出力するかの指定です。偽の場合、傍注は一方の側にしか出力されません。このスイッチを真とすると、とくに縦組の場合、奇数ページでは本文の上に、偶数ページでは本文の下に傍注が出力されますので、おかしいことになります。

また、縦組のときには、傍注を本文の下に出すようにしています。reversemarginpar とすると本文の上側に出力されます。ただし、二段組の場合は、つねに隣接するテキスト側のマージンに出力されます。

```

1875 <*tate>
1876 \normalmarginpar
1877 \@mparswitchfalse
1878 </tate>
1879 <*yoko>
1880 \if@twoside
1881   \@mparswitchtrue
1882 \else
1883   \@mparswitchfalse
1884 \fi
1885 </yoko>
1886 </article | report | book>

```

変更履歴

1992/02/04 ujclasses.dtx v1.1d	1996/03/14 ujclasses.dtx v1.0e
General: disablejfam の判断を間違えてたのを修正 25	description: \topskip や \parkip などの値を縦組時のみに設定するようにした 71
1995/08/23 ujclasses.dtx v1.0d	itemize: 縦組時のみに設定するようにした 70
\ps@bothstyle: 横組の evenfoot が中央揃えになっていたのを修正 49	1996/03/21 ujclasses.dtx v1.0e
\ps@myheadings: 横組モードの左右が逆であったのを修正 51	General: \usepackage to \RequirePackage 26
1995/08/30 ujclasses.dtx v1.0a	1996/07/10 ujclasses.dtx v1.0f
General: 柱の書体がノンブルに影響するバグの修正 47	General: 面付けオプションを追加 23
1995/09/12 uplfonts.dtx v1.1c	1996/09/03 ujclasses.dtx v1.0g
General: \xkanjiskip のデフォルト値 7	General: Add to \@bannertoken. 23
1995/09/26 ujclasses.dtx v1.0a	1996/12/17 ujclasses.dtx v1.0h
General: Change b4paper width/height 352x250 to 364x257 22	\ 和暦: Typo:和歴 to 和暦 84
Change b5paper width/height 250x176 to 257x182 22	1997/01/15 ujclasses.dtx v1.1
1995/11/24 ujclasses.dtx v1.1d	\backmatter: \frontmatter, \mainmatter, \backmatter を L ^A T _E X の定義に修正 59
\marginparwidth: typo: \marginmarwidth to \marginparwidth 40	\part: \part を L ^A T _E X の定義に修正 61
1995/11/24 uplfonts.dtx v1.2	1997/01/23 ujclasses.dtx v1.1a
General: it, sl, sc の宣言を外した . . 8	General: 日付出力オプション 23
1995/12/25 ujclasses.dtx v1.0c	thebibliography: L ^A T _E X <1996/12/01>に合わせて修正 83
General: Macro \if@openbib removed 21	1997/01/24 uplfonts.dtx v1.3
openbib オプションを再実装 . . . 25	General: Rename font definition filename. 5
1995/12/25 ujclasses.dtx v1.1c	Rename provided font definition filename. 8
\maxdepth: \@maxdepth の設定を外した 32	1997/01/25 ujclasses.dtx v1.0g
1995/12/28 ujclasses.dtx v1.0c	General: Insert \hbox, to switch tate-mode. 24
\listoftables: fix the \listoftable typo. 82	\columnseprule: \columnsep: 10pt to 3\Cwd or 2\Cwd. 30
1996/02/29 ujclasses.dtx v1.0d	\marginparwidth: \oddsidemargin, \evensidemargin: 0pt if specified papersize at \documentstyle option. 40
General: article と report のデフォルトを plain に修正 86	1997/01/25 ujclasses.dtx v1.1a
\ps@jpl@in: jpl@in の初期値を定義 47	\if@stysize: Add \if@stysize. 21
1996/03/05 ujclasses.dtx v1.0d	\textheight: Add paper option with compatibility mode. 35
\ps@bothstyle: 横組で偶数ページと奇数ページの設定が逆なのを修正 49	

\textwidth: Add paper option with compatibility mode.	32	1997/09/03 ujclasses.dtx v1.1f \textheight: landscape での指定を 追加	35
1997/01/28 ujclasses.dtx v1.1a \labelitemiv: Bug fix: \labelitemii.	70	1997/09/03 ujclasses.dtx v1.1h General: landscape オプションを互 換モードでも有効に	23
1997/01/28 ujclasses.dtx v1.1b \if@enablejfam: Add \if@enablejfam	21	オプションの処理時に縦横の値を 交換	23
1997/01/28 uplfonts.dtx v1.3b \textgt: \textmc, \textgt の動作 修正	5	\textwidth: landscape での指定を 追加	32
1997/01/29 uplfonts.dtx v1.3b General: フォント定義ファイルのサ イズ指定の調整	8	1997/12/12 ujclasses.dtx v1.1i \ps@bothstyle: report, book クラ スで片面印刷時に、bothstyle ス タイルにすると、コンパイルエ ラーになるのを修正	50
1997/01/30 uplfonts.dtx v1.3b General: 数式用フォントの宣言をク ラスファイルに移動した	6	1998/02/03 ujclasses.dtx v1.1j \topmargin: 互換モード時の a5p の トップマージンを 0.7in 増加 . .	38
1997/02/05 ujclasses.dtx v1.1d General: 開始ページがおかしくなる のを修正	24	1998/03/23 ujclasses.dtx v1.1k \@spart: report と book クラスで番 号を付けない見出しのペナルティ が \M@だったのを \QM に修正 .	62
\topmargin: \tompargin を半分に するのはアキ領域の計算後 . . .	38	1998/04/07 ujclasses.dtx v1.1m \heisei: \today の計算手順を変更	85
1997/02/12 ujclasses.dtx v1.1d \maketitle: 縦組クラスの表紙を縦 書きにするようにした	54	1998/10/13 ujclasses.dtx v1.1n General: 動作していなかったのを修 正。ありがとう、刀祢さん . . .	23
1997/02/14 ujclasses.dtx v1.1d \thefigure: \ifnum 文の構文エ ラーを訂正。	73	\thetable: report, book クラスで chapter カウンタを考慮していな かったのを修正。ありがとう、 平川@慶應大さん。	73
1997/03/11 uplfonts.dtx v1.3b General: すべてのサイズをロード可 能にした	8	1998/12/24 ujclasses.dtx v1.1o \@makechapterhead: secnumdepth カウンタを -1 以下にすると、見 出し文字列も消えてしまうのを 修正	64
1997/04/08 ujclasses.dtx v1.1e \topmargin: 横組クラスでの調整量 を-2.4 インチから-2.0 インチに した。	38	1999/05/18 ujclasses.dtx v1.1q enumerate: 縦組時のみに設定するよ うにした	70
1997/06/25 uplfonts.dtx v1.3d \eminnershape: \em, \emph で和文 を強調書体に	5	1999/08/09 ujclasses.dtx v1.1r \topmargin: \if@stysize フラグに 限らず半分にする	38
1997/07/08 ujclasses.dtx v1.1f General: 縦組時にベースラインがお かしくなるのを修正	24	1999/1/6 ujclasses.dtx v1.1p \marginparwidth: \oddsidemargin のポイントへの変換を後ろに . .	40
1997/08/25 ujclasses.dtx v1.1g \ps@bothstyle: 片面印刷のとき、 section レベルが出力されないの を修正	50	2001/09/04 ujclasses.dtx v1.2 \@makechapterhead: \chapter の 出力位置がアスタリスク形式と そうでないときと違うのを修正 (ありがとう、鈴木@津さん) . .	64
\ps@headings: 片面印刷のとき、 section レベルが出力されないの を修正	49		

\@makeschapterhead: \chapter の出力位置がアスタリスク形式とそうでないときと違うのを修正 (ありがとう、鈴木@津さん) ..	65	2016/06/27 v1.0y)	2
2001/10/04 ujclasses.dtx v1.3		2016/08/26 uplvers.dtx v1.0z-u01	
\@dottedtocline: 第5引数の書体を \rmfamily から \normalfont に変更	79	\everyjob: uplatex.cfg の読み込みを uplcore.ltx から uplatex.ltx へ移動 (based on plvers.dtx 2016/08/26 v1.0z) ..	2
2002/04/09 ujclasses.dtx v1.4		2016/09/14 uplvers.dtx v1.1-u01	
General: 縦組スタイルで \flushbottom しないようにした	86	\everyjob: pL ^A T _E X の変更に従。 (based on plvers.dtx 2016/09/14 v1.1)	2
2006/06/27 ujclasses.dtx v1.6		2016/11/12 ujclasses.dtx v1.7	
General: フォントコマンドを修正。ありがとう、ymt さん。	76	\@makefn _{text} : Replaced all \hbox to by \hb _{ext} @ (sync with classes.dtx v1.3a)	84
2011/05/07 ukinsoku.dtx v1.0-u00		\footnoterule: use \@width (sync with classes.dtx v1.3a)	84
General: pL ^A T _E X 用から upL ^A T _E X 用に修正。	10	thebibliography: Moved \mkboth out of heading arg (sync with classes.dtx v1.4c) ..	83
2011/05/07 uplfonts.dtx v1.5-u00		theindex: \columnsep と \columnseprule の変更を後ろに移動 (sync with classes.dtx v1.4f)	84
General: pL ^A T _E X 用から upL ^A T _E X 用に修正。 (based on plfonts.dtx 2006/11/10 v1.5)	3	\listoffigures: Moved \mkboth out of heading arg (sync with classes.dtx v1.4c)	82
2011/05/07 uplvers.dtx v1.0q-u00		\listoftables: Moved \mkboth out of heading arg (sync with classes.dtx v1.4c)	82
General: pL ^A T _E X 用から upL ^A T _E X 用に修正。 (based on plvers.dtx 2006/11/10 v1.0q)	1	\maketitle: ドキュメントに反して \@maketitle が空になっていなかったのを修正	55
2016/02/01 uplfonts.dtx v1.6		2016/11/16 ujclasses.dtx v1.7a	
\em _{innershape} : L ^A T _E X <2015/01/01>での \em の定義変更に対応。 \em _{innershape} を追加。	5	\@dottedtocline: Added \nobreak for latex/2343 (sync with ltsect.dtx v1.0z)	79
2016/04/30 uplfonts.dtx v1.6b-u00		\@makechapterhead: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c) ..	64
General: uptrace.sty の冒頭で tracefnt.sty を \RequirePackageWithOptions するようにした	4	\@makeschapterhead: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c) ..	65
2016/05/12 uplvers.dtx v1.0w-u00		\@part: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	61
\everyjob: 起動時の文字列に入れる Babel のバージョンを元の L ^A T _E X のバナーから取得するコードを uplatex.ini から取り入れた (based on plvers.dtx 2016/05/12 v1.0w)	2	\@spart: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	62
2016/05/21 uplvers.dtx v1.0w-u01		enumerate: Use \expandafter (sync with ltlists.dtx v1.0j) ..	70
\documentstyle: サポート外の L ^A T _E X 2.09 互換モードが使われた場合に明確なエラーを出すようにした。	2		
2016/06/29 uplvers.dtx v1.0y-u01			
\everyjob: uplatex.cfg の読み込みを追加 (based on plvers.dtx			

\paragraph: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	65	\backmatter: \frontmatter と \mainmatter を奇数ページに送るように変更	59
\part: Check @noskipsec switch and possibly force horizontal mode (sync with classes.dtx v1.4a)	61	2017/08/02 ukinsoku.dtx v1.0-u01 General: U+00B7 (MIDDLE DOT; JIS X 0213) の前禁則ペナルティを U+30FB と同じ値に設定、注意点を明文化	11
\section: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	65	2017/08/05 ukinsoku.dtx v1.0b General: %, &, %、&の禁則ペナルティが誤っていたのを修正 (post → pre)	10
\subparagraph: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	65	2017/08/31 ujclasses.dtx v1.7f \Chs: 和文書体の基準を全角空白から「漢」に変更	28
\subsection: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	65	2017/09/19 ujclasses.dtx v1.7g \Chs: 内部処理で使ったボックス 0 を空にした	28
\subsubsection: replace \reset@font with \normalfont (sync with classes.dtx v1.3c)	65	2017/09/24 uplfonts.dtx v1.6i \<: \<が段落頭でも効くようにした	7
itemize: Use \expandafter (sync with ltlists.dtx v1.0j)	70	2017/09/24 uplvers.dtx v1.1d-u01 \everyjob: pL ^A T _E X の変更に従。 (based on plvers.dtx 2017/09/24 v1.1d)	2
2016/11/22 ujclasses.dtx v1.7b \backmatter: 補足ドキュメントを追加	59	2017/11/06 uplfonts.dtx v1.6j General: 縦横のエンコーディングのセット化を plcore から pldefs へ移動	5
2016/12/18 ujclasses.dtx v1.7c \@endpart: Only add empty page after part if twoside and openright (sync with classes.dtx v1.4b)	63	2017/12/04 uplvers.dtx v1.1g-u01 \everyjob: pL ^A T _E X の変更に従。 (based on plvers.dtx 2017/12/04 v1.1g)	2
\@schapter: 奇妙な article ガードとコードを削除してドキュメントを追加	64	2017/12/05 uplfonts.dtx v1.6k-u00 General: デフォルト設定ファイルの読み込みを uplcore.ltx から uplatex.ltx へ移動 (based on plfonts.dtx 2017/12/05 v1.6k)	4
2017/02/15 ujclasses.dtx v1.7d General: openleft オプション追加 \if@openleft: \if@openleft スイッチ追加	21	2017/12/10 uplfonts.dtx v1.6k-u01 General: uptrace パッケージは ptrace パッケージを読み込むだけとした	4
titlepage: book クラスで titlepage を必ず奇数ページに送るように変更	53	2017/12/10 uplfonts.dtx v1.6k-u02 General: pL ^A T _E X との統合のため、upL ^A T _E X 用の最小限の変更だけを定義するようにした	3
titlepage のページ番号を奇数ならば 1 に、偶数ならば 0 にリセットするように変更	53	2017/12/10 uplvers.dtx v1.1g-u02 General: pL ^A T _E X との統合のため、upL ^A T _E X のバージョンと最小限の変更だけを定義するようにした	1
\p@thanks: 縦組クラスの所属表示の番号を直立にした	54		
\pltx@cleartoevenpage: \cleardoublepage の代用となる命令群を追加	45		
2017/03/05 ujclasses.dtx v1.7e General: トンボに表示するジョブ情報の書式を変更	23		

2018/01/27 ukinsoku.dtx v1.0b-u02	2018/03/31 uplvers.dtx v1.1i-u02
General: upT _E X の将来の変更に備	General: pL ^A T _E X 2 _ε 2018/03/09 以
え、Latin-1 Supplement のうち	降必須 1
属性が Latin のもの (Latin-1	2018/04/08 ukinsoku.dtx v1.0b-u03
letters) をコードポイントで指定 11	General: L ^A T _E X 2018-04-01 対策 . 11
2018/02/04 ujclasses.dtx v1.7h	2018/07/03 ujclasses.dtx v1.8
\Cjascale: 和文スケール値	\ 和暦: \today のデフォルトを和暦
\Cjascale を定義 30	から西暦に変更 85
2018/02/04 uplfonts.dtx v1.6l	2018/07/03 uplfonts.dtx v1.6q
General: 和文スケール値を明文化 . 8	General: シリーズ b が bx と等価に
	なるように宣言 8

索引

イタリック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。

Symbols		
\#	c8
\\$	c9
\%	c10
\&	c11
\.	d1791
\<	b97
\@end	a10, a19, b91
\@addtoreset	d1585, d1816
\@afterheading	
	d1196, d1222, d1264, d1283
\@afterindenttrue	d1167, d1248, d1638
\@Alph	d1318,
	d1319, d1327, d1328, d1412, d1418
\@alph	d1410, d1416
\@arabic	d1119, d1121, d1122,
	d1124, d1126, d1128, d1130,
	d1134, d1136, d1137, d1139,
	d1141, d1143, d1145, d1409,
	d1415, d1507, d1510, d1514,
	d1517, d1534, d1537, d1541,
	d1544, d1583, d1587, d1779, d1786
\@author	d946, d996, d1010, d1049, d1068	
\@auxout	d1650
\@bannertoken	d70
\@beginparpenalty	d1080, <u>d1348</u>
\@biblabel	d1779, d1780, <u>d1796</u>
\@centercr	d1490
\@chapapp	. d844, d868, d902, d927,	
	<u>d1147</u> , d1254, d1256, d1274, d1325	
\@chappos	. d844, d868, d902, d927,	
	<u>d1147</u> , d1254, d1256, d1274, d1326	
\@chapter	d1249, <u>d1250</u>
\@cite	<u>d1797</u>
\@clubpenalty	d1789
\@date	d947, d999, d1011, d1050, d1071	
\@dblfloat	d1529, d1556
\@dblfpbot	<u>d735</u>
\@dblfpsep	<u>d735</u>
\@dblfpstop	<u>d735</u>
\@dotsep	<u>d1628</u> , d1644
\@dottedtocline	
	. <u>d1634</u> , d1717, d1718, d1722,	
	d1723, d1724, d1725, d1728,	
	d1729, d1730, d1731, d1736,	
	d1737, d1738, d1739, d1742,	
	d1743, d1744, d1745, d1759, d1760	
\@eha	d1606, d1610
\@enablejfamfalse	d113
\@enablejfamtrue	d16
\@endparpenalty	d1083, <u>d1348</u>
\@endpart	d1215, d1229, <u>d1231</u>
\@enumctr	d1438, d1439, d1449
\@enumdepth	d1436, d1437, d1438, d1445	
\@evenfoot	<u>d803</u> , d808, d816,
	d819, d821, d826, d879, d885, d935	
\@evenhead	
	<u>d803</u> , d807, d812, d814, d823,	
	d827, d829, d878, d884, d936, d938	
\@float	d1526, d1553
\@fontswitch	d1622, d1623
\@fpbot	<u>d720</u>
\@fpsep	<u>d720</u>
\@fptop	<u>d720</u>
\@gobble	d941, d942, d943, d1651
\@gobbletwo	... d803, d810, d817, d940	
\@highpenalty	<u>d287</u> , d1671, d1690, d1698	
\@idxitem	d1806, <u>d1808</u>
\@itemdepth	d1463, d1464, d1465, d1472	
\@itemitem	d1465, d1466
\@itempenalty	<u>d1348</u>
\@ixpt	d176, d218
\@landscapefalse	d3
\@landscapepetrue	d63
\@latex@error	a30, d1605, d1609
\@latex@warning	d1793
\@listdepth	d1441, d1468
\@listI	d163, <u>d1355</u>
\@listi	d163, d180, d190,
	d200, d212, d222, d232, <u>d1355</u>	
\@listii	<u>d1374</u>
\@listiii	<u>d1374</u>

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

<code>\@listiv</code>	d1374	<code>\@pnumwidth</code>	
<code>\@listv</code>	d1374	<code>\@pnumwidth</code>	d1626 , d1646 , d1674 , d1675 , d1679 , d1693 , d1697 , d1708 , d1712
<code>\@listvi</code>	d1374	<code>\@ptsize</code>	d4 , d57 , d59 , d61 , d62 , d133 , d134 , d135 , d136
<code>\@lnumwidth</code> ..	d1632 , d1641 , d1642 , d1677 , d1695 , d1696 , d1710 , d1711	<code>\@restonecolfalse</code>	d954 , d967 , d1660 , d1751 , d1764 , d1799
<code>\@lowpenalty</code>	d287 , d1080 , d1348 , d1349 , d1350	<code>\@restonecoltrue</code>	d953 , d965 , d1659 , d1750 , d1763 , d1799
<code>\@M</code>	d1083 , d1190 , d1209 , d1220 , d1227 , d1639	<code>\@Roman</code>	d1118 , d1133
<code>\@m</code>	d1791	<code>\@roman</code>	d1411 , d1417
<code>\@mainmatterfalse</code>	d1154 , d1161	<code>\@schapter</code>	d1249 , d1282
<code>\@mainmattertrue</code>	d11 , d1157	<code>\@secpenalty</code>	d1670 , d1705
<code>\@makecaption</code>	d1558	<code>\@setfontsize</code>	d141 , d142 , d143 , d144 , d145 , d146 , d176 , d186 , d196 , d208 , d218 , d228 , d239 , d240 , d241 , d242 , d243 , d244 , d245 , d248 , d249 , d250 , d251 , d252 , d253 , d254 , d257 , d258 , d259 , d260 , d261 , d262
<code>\@makechapterhead</code>	d1264 , d1265	<code>\@settopoint</code>	d440 , d538 , d583 , d662 , d663 , d685
<code>\@makefnmark</code>	d1022 , d1026 , d1819 , d1823	<code>\@spart</code>	d1168 , d1177 , d1217
<code>\@makefntext</code>	d1025 , d1029 , d1817	<code>\@startsection</code>	d1294 , d1298 , d1302 , d1306 , d1310
<code>\@makeschapterhead</code>	d1283 , d1285 , d1801	<code>\@starttoc</code>	d1665 , d1756 , d1769
<code>\@maketitle</code>	d1033 , d1034 , d1039 , d1046 , d1057	<code>\@stysizefalse</code>	d15
<code>\@mathrmcfalse</code>	d17	<code>\@stysizetrue</code>	d31 , d34 , d37 , d40 , d44 , d47 , d50 , d53
<code>\@mathrmctrue</code>	d111 , d114	<code>\@tempboxa</code>	d1564 , d1565 , d1567 , d1572
<code>\@medpenalty</code>	d287	<code>\@tempcnta</code>	d13 , d14 , d533 , d534
<code>\@minipagefalse</code>	d1571	<code>\@tempdima</code>	d64 , d66 , d415 , d416 , d417 , d418 , d426 , d429 , d432 , d435 , d528 , d529 , d530 , d531 , d532 , d533 , d647 , d648 , d649 , d651 , d652 , d654 , d666 , d669 , d677 , d678 , d679 , d680 , d681 , d682 , d683 , d1272 , d1275 , d1278 , d1291 , d1292
<code>\@mkboth</code> ..	d803 , d810 , d817 , d831 , d858 , d889 , d917 , d940 , d1664 , d1755 , d1768 , d1777 , d1778 , d1802	<code>\@tempdimb</code>	d419 , d420 , d421 , d422 , d423 , d424 , d426 , d427 , d432 , d433
<code>\@mparswitchfalse</code>	d1877 , d1883	<code>\@tempswafalse</code>	d1175
<code>\@mparswitchtrue</code>	d1881	<code>\@tempswatrue</code>	d1175
<code>\@mpfootins</code>	d1580	<code>\@temptokena</code>	d1652 , d1653 , d1655
<code>\@nil</code>	a12	<code>\@thanks</code>	d979 , d1001 , d1003 , d1009 , d1041 , d1048
<code>\@nobreakfalse</code>	d1683	<code>\@thefnmark</code>	d1022 , d1023 , d1030
<code>\@nobreaktrue</code>	d1682	<code>\@title</code>	d945 , d991 , d1012 , d1051 , d1063
<code>\@noitemerr</code>	d1792	<code>\@titlepagefalse</code>	d7 , d91
<code>\@nomath</code> ..	b38 , b45 , b51 , d1620 , d1621	<code>\@titlepagetrue</code>	d8 , d90
<code>\@normalsize</code>	d139		
<code>\@oddfoot</code>	d803 , d806 , d808 , d816 , d820 , d822 , d826 , d855 , d881 , d887 , d914 , d916 , d935		
<code>\@oddhead</code> ..	d803 , d805 , d813 , d815 , d823 , d828 , d830 , d856 , d857 , d880 , d886 , d913 , d915 , d937 , d939		
<code>\@openbib@code</code> ...	d103 , d1783 , d1795		
<code>\@openleftfalse</code>	d95 , d97		
<code>\@openlefttrue</code>	d96		
<code>\@openrightfalse</code>	d96 , d97		
<code>\@openrighttrue</code>	d93 , d95		
<code>\@parse@version</code>	a12		
<code>\@part</code>	d1168 , d1177 , d1179		

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\@tocmarg` [d1627](#)
`\@tocrmarg` [d1627](#), [d1637](#)
`\@tombowwidth` [d69](#), [d76](#), [d80](#)
`\@toodeep` [d1436](#), [d1463](#)
`\@topnum` [d1038](#), [d1247](#)
`\@twocolumnfalse` [d88](#)
`\@twocolumntrue` [d89](#)
`\@twosidefalse` [d86](#)
`\@twosidetrue` [d87](#)
`\@undefined` [a2](#), [b53](#), [b101](#)
`\@viipt` [d208](#), [d239](#), [d248](#), [d257](#)
`\@vipt` [d239](#), [d249](#), [d258](#)
`\@vpt` [d240](#), [d249](#), [d258](#)
`\@vpt` [d240](#)
`\@width` [d1814](#)
`\@writefile` [d1654](#)
`\@xipt`
[d143](#), [d146](#), [d186](#), [d228](#), [d241](#), [d250](#)
`\@xipt` [d142](#), [d145](#), [d196](#)
`\@xivpt` [d242](#), [d251](#), [d259](#)
`\@xpt` [d141](#), [d144](#), [d186](#), [d228](#)
`\@xvipt` [d243](#), [d252](#), [d260](#)
`\@xxpt` [d244](#), [d253](#), [d261](#)
`\@xxvpt` [d245](#), [d254](#), [d262](#)
`\@` [d1490](#)
`\@` [c12](#)
- A**
- `\abovecaptionskip` [d1558](#), [d1563](#)
`\abovedisplayshortskip`
[d149](#), [d154](#), [d159](#),
[d178](#), [d188](#), [d198](#), [d210](#), [d220](#), [d230](#)
`\abovedisplayskip` [d148](#),
[d153](#), [d158](#), [d162](#), [d177](#), [d187](#),
[d197](#), [d205](#), [d209](#), [d219](#), [d229](#), [d237](#)
`abstract` (environment) [d1075](#)
`abstractname`
[d1082](#), [d1089](#), [d1093](#), [d1863](#)
`\addcontentsline`
[d1183](#), [d1186](#), [d1202](#),
[d1205](#), [d1255](#), [d1257](#), [d1259](#), [d1649](#)
`\addpenalty` [d1670](#), [d1671](#), [d1690](#), [d1705](#)
`\addtocontents` [d1262](#), [d1263](#)
`\addvspace` [d1166](#),
[d1262](#), [d1263](#), [d1672](#), [d1691](#), [d1706](#)
`\adjustbaseline` [d84](#)
`\and` [d1016](#), [d1055](#)
`\appendix` [d1314](#)
`\appendixname` [d1325](#), [d1863](#)
`\arraycolsep` [d1575](#)
- `\arrayrulewidth` [d1577](#)
`\AtBeginDocument` [d83](#), [d1598](#)
`\AtEndOfPackage` [d102](#)
`\author` [d945](#), [d1014](#), [d1053](#)
`\autospacing` [b93](#)
`\autoxspacing` [b95](#)
- B**
- `\backmatter` [d1151](#)
`\baselineskip` . [d171](#), [d509](#), [d532](#), [d534](#)
`\baselinestretch` [d279](#)
`\begin` [d982](#), [d990](#),
[d995](#), [d1060](#), [d1067](#), [d1081](#), [d1092](#)
`\belowcaptionskip` [d1558](#), [d1574](#)
`\belowdisplayshortskip`
[d150](#), [d155](#), [d160](#),
[d179](#), [d189](#), [d199](#), [d211](#), [d221](#), [d231](#)
`\belowdisplayskip` .. [d162](#), [d205](#), [d237](#)
`\bf` [d1618](#)
`\bfseries`
[d1082](#), [d1093](#), [d1192](#), [d1195](#),
[d1211](#), [d1214](#), [d1221](#), [d1228](#),
[d1269](#), [d1289](#), [d1297](#), [d1301](#),
[d1305](#), [d1309](#), [d1313](#), [d1457](#),
[d1488](#), [d1618](#), [d1676](#), [d1694](#), [d1709](#)
`\bibindent` [d104](#), [d105](#), [d1773](#)
`\bibname` [d1778](#), [d1858](#)
`\bigskipamount` [d282](#)
`\bottomfraction` [d757](#)
- C**
- `\c@paper` ... [d1](#), [d295](#), [d325](#), [d341](#),
[d357](#), [d443](#), [d459](#), [d475](#), [d552](#), [d572](#)
`\c@bottomnumber` [d753](#)
`\c@chapter` [d1107](#),
[d1121](#), [d1136](#), [d1327](#), [d1328](#),
[d1510](#), [d1517](#), [d1537](#), [d1544](#), [d1587](#)
`\c@dbltopnumber` [d755](#)
`\c@enumi` [d1409](#), [d1415](#)
`\c@enumii` [d1410](#), [d1416](#)
`\c@enumiii` [d1411](#), [d1417](#)
`\c@enumiv` . [d1412](#), [d1418](#), [d1779](#), [d1786](#)
`\c@equation` [d1583](#), [d1587](#)
`\c@figure` [d1504](#)
`\c@footnote` [d1816](#)
`\c@page` .. [d763](#), [d775](#), [d787](#), [d792](#), [d970](#)
`\c@paragraph` [d1107](#), [d1128](#), [d1143](#)
`\c@part` [d1118](#), [d1133](#)
`\c@secnumdepth`
[d834](#), [d837](#), [d842](#), [d849](#),

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- d861, d866, d892, d895, d900,
d907, d920, d925, d1105, d1181,
d1191, d1200, d1210, d1251, d1271
\c@section d1107, d1119,
d1122, d1134, d1137, d1318, d1319
\c@subparagraph . d1107, d1130, d1145
\c@subsection ... d1107, d1124, d1139
\c@subsubsection d1107, d1126, d1141
\c@table d1531
\c@tocdepth
d1624, d1635, d1669, d1689, d1704
\c@topnumber d751
\c@totalnumber d754
\cal d1622
\Cdp d167, d511
\centering d1001, d1208, d1226
\chapter d1242,
d1243, d1663, d1752, d1765, d1778
\chaptermark d841, d865,
d899, d924, d941, d1099, d1261
\char d167
\Chs d167
\Cht d167, d310, d510
\Cjascale d266
\cleardoublepage d796, d952, d1159,
d1160, d1172, d1173, d1244, d1245
\clearpage d762, d774, d786,
d791, d1160, d1173, d1245, d1807
\clubpenalty d1788, d1789
\col@number d1033
\columnsep d269, d1805
\columnseprule d269, d1805
\columnwidth d1814
\contentsline d1655
\contentsname
..... d1662, d1663, d1664, d1855
\Cvs d167, d445, d446,
d447, d448, d449, d450, d452,
d453, d454, d455, d456, d457,
d461, d462, d463, d464, d465,
d466, d468, d469, d470, d471,
d472, d473, d477, d478, d479,
d480, d481, d482, d484, d485,
d486, d487, d488, d489, d493,
d494, d495, d496, d497, d498,
d500, d501, d502, d503, d504,
d505, d517, d518, d519, d1266,
d1281, d1286, d1292, d1295,
d1296, d1299, d1300, d1303, d1304
\Cwd .. d167, d271, d272, d281, d327,
d328, d329, d330, d331, d332,
d334, d335, d336, d337, d338,
d339, d343, d344, d345, d346,
d347, d348, d350, d351, d352,
d353, d354, d355, d359, d360,
d361, d362, d363, d364, d366,
d367, d368, d369, d370, d371,
d375, d376, d377, d378, d379,
d380, d382, d383, d384, d385,
d386, d387, d392, d400, d401,
d402, d422, d423, d424, d1481
- ## D
- \date d945, d1015, d1054
\day .. d71, d1834, d1838, d1844, d1848
\dblfloatpagefraction d761
\dblfloatsep d708
\dbltextfloatsep d708
\dbltopfraction d760
\DeclareErrorKanjiFont b13
\DeclareFontShape b123,
b124, b125, b131, b132, b133,
b138, b139, b140, b145, b146, b147
\DeclareKanjiEncodingDefaults . b12
\DeclareKanjiFamily
..... b120, b128, b136, b143
\DeclareKanjiSubstitution .. b15, b17
\DeclareMathAlphabet d1595
\DeclareOldFontCommand
. d1613, d1614, d1615, d1616,
d1617, d1618, d1619, d1620, d1621
\DeclareOption
. d18, d21, d24, d27, d31, d34,
d37, d40, d44, d47, d50, d53,
d59, d61, d62, d63, d67, d74,
d78, d82, d86, d87, d88, d89,
d90, d91, d95, d96, d97, d99,
d100, d101, d113, d114, d116, d117
\DeclarePreloadSizes b57, b58, b59,
b60, b63, b64, b65, b66, b69,
b70, b71, b72, b75, b77, b79, b81
\DeclareRelationFont
b121, b122, b129, b130, b137, b144
\DeclareRobustCommand .. b37, b44,
b50, d1604, d1608, d1622, d1623
\DeclareSymbolFont d1591
\DeclareSymbolFontAlphabet ... d1592
\DeclareTateKanjiEncoding b16
\DeclareTextFontCommand ... b32, b33

File Key: a=uplvers.dtx, b=uplfonts.dtx, c=ukinsoku.dtx, d=ujclasses.dtx

- `\if@mainmatter` [d11](#), [d843](#),
 [d867](#), [d901](#), [d926](#), [d1252](#), [d1273](#)
`\if@mathrmc` [d17](#), [d1597](#)
`\if@noskipsec` [d1165](#)
`\if@openleft` [d10](#),
 [d797](#), [d1159](#), [d1172](#), [d1234](#), [d1244](#)
`\if@openright` [d9](#),
 [d799](#), [d1160](#), [d1173](#), [d1236](#), [d1245](#)
`\if@restonecol` [d5](#), [d958](#),
 [d972](#), [d1666](#), [d1757](#), [d1770](#), [d1807](#)
`\if@stysize`
 . [d15](#), [d270](#), [d294](#), [d324](#), [d406](#),
 [d442](#), [d522](#), [d541](#), [d551](#), [d571](#), [d640](#)
`\if@tempswa` [d1240](#)
`\if@titlepage` [d6](#), [d981](#), [d1076](#)
`\if@twocolumn` [d391](#),
 [d407](#), [d425](#), [d584](#), [d634](#), [d641](#),
 [d766](#), [d771](#), [d778](#), [d783](#), [d789](#),
 [d794](#), [d953](#), [d964](#), [d1032](#), [d1088](#),
 [d1096](#), [d1175](#), [d1330](#), [d1338](#),
 [d1659](#), [d1750](#), [d1763](#), [d1799](#), [d1869](#)
`\if@twoside` [d612](#), [d650](#),
 [d665](#), [d762](#), [d774](#), [d786](#), [d791](#),
 [d824](#), [d875](#), [d973](#), [d1233](#), [d1880](#)
`\ifodd` ... [d763](#), [d775](#), [d787](#), [d792](#), [d970](#)
`\iftdir` . [d764](#), [d781](#), [d1440](#), [d1454](#),
 [d1467](#), [d1480](#), [d1564](#), [d1568](#), [d1830](#)
`\ifydir` [d769](#), [d776](#), [d1022](#)
`\if 西曆` [d1825](#)
`\index` [d1651](#)
`\indexname` [d1800](#), [d1801](#), [d1802](#), [d1858](#)
`\indexspace` [d1811](#)
`\inhibitglue` [b99](#), [b102](#), [b104](#), [b109](#), [b110](#)
`\inhibitxspcode`
 . [c315](#), [c316](#), [c317](#), [c318](#), [c319](#),
 [c320](#), [c321](#), [c322](#), [c323](#), [c324](#),
 [c325](#), [c326](#), [c327](#), [c328](#), [c329](#),
 [c330](#), [c331](#), [c332](#), [c333](#), [c334](#),
 [c335](#), [c336](#), [c337](#), [c338](#), [c339](#),
 [c340](#), [c341](#), [c342](#), [c343](#), [c344](#),
 [c345](#), [c346](#), [c347](#), [c348](#), [c349](#),
 [c350](#), [c351](#), [c352](#), [c356](#), [c357](#),
 [c358](#), [c359](#), [c360](#), [c361](#), [c362](#),
 [c363](#), [c364](#), [c365](#), [c366](#), [c367](#),
 [c368](#), [c369](#), [c370](#), [c371](#), [c372](#),
 [c373](#), [c374](#), [c375](#), [c376](#), [c377](#),
 [c378](#), [c379](#), [c383](#), [c384](#), [c385](#),
 [c386](#), [c387](#), [c391](#), [c392](#), [c393](#), [c394](#)
`\input` [b26](#), [b27](#), [b28](#), [b29](#),
 [d99](#), [d100](#), [d133](#), [d134](#), [d135](#), [d136](#)
- `\InputIfFileExists` [b84](#)
`\interlinepenalty`
 [d1190](#), [d1209](#), [d1220](#), [d1227](#), [d1639](#)
`\intextsep` [d693](#)
`\it` [d1619](#)
`\item` [d1494](#), [d1500](#), [d1503](#), [d1806](#)
`\itemindent` [d105](#),
 [d106](#), [d1479](#), [d1491](#), [d1492](#), [d1497](#)
`itemize (environment)` [d1462](#)
`\itemsep` [d183](#),
 [d193](#), [d203](#), [d215](#), [d225](#), [d235](#),
 [d1360](#), [d1365](#), [d1370](#), [d1388](#),
 [d1396](#), [d1443](#), [d1470](#), [d1483](#), [d1491](#)
`\itshape` [b39](#), [b46](#), [b52](#), [d1619](#)
- ### J
- `\jcharwidowpenalty` [b96](#)
`\jfam` [d1594](#)
`\jis` [c37](#), [c38](#), [c39](#), [c40](#), [c41](#), [c42](#), [c43](#),
 [c44](#), [c45](#), [c46](#), [c47](#), [c56](#), [c57](#), [c58](#),
 [c59](#), [c60](#), [c61](#), [c62](#), [c63](#), [c64](#), [c65](#),
 [c66](#), [c67](#), [c86](#), [c96](#), [c97](#), [c98](#), [d167](#)
- ### K
- `\kanjiencoding` [b25](#), [d165](#)
`\kanjiencodingdefault` [b21](#), [d164](#), [d165](#)
`\KanjiEncodingPair` [b18](#)
`\kanjifamilydefault` [b22](#)
`\kanjiseriessdefault` [b23](#)
`\kanjishapedefault` [b24](#)
`\kanjiskip` [b92](#)
`\kansuji` [d1832](#),
 [d1833](#), [d1834](#), [d1836](#), [d1837](#), [d1838](#)
- ### L
- `\l@chapter` [d1687](#)
`\l@figure` [d1759](#), [d1772](#)
`\l@paragraph` [d1720](#)
`\l@part` [d1668](#)
`\l@section` [d1702](#)
`\l@subparagraph` [d1720](#)
`\l@subsection` [d1720](#)
`\l@subsubsection` [d1720](#)
`\l@table` [d1772](#)
`\label` [d1651](#)
`\labelenumi` [d1420](#)
`\labelenumii` [d1420](#)
`\labelenumiii` [d1420](#)
`\labelenumiv` [d1420](#)
`\labelitemi` [d1452](#)

- `\labelitemii` [d1452](#)
`\labelitemiii` [d1452](#)
`\labelitemiv` [d1452](#)
`\labelsep` ... [d1345](#), [d1375](#), [d1390](#),
[d1399](#), [d1402](#), [d1405](#), [d1444](#),
[d1471](#), [d1483](#), [d1488](#), [d1579](#), [d1782](#)
`\labelwidth` [d1345](#),
[d1375](#), [d1390](#), [d1398](#), [d1399](#),
[d1401](#), [d1402](#), [d1404](#), [d1405](#),
[d1444](#), [d1471](#), [d1479](#), [d1780](#), [d1781](#)
`\LARGE` [d238](#), [d991](#), [d1063](#)
`\Large` [d238](#), [d993](#), [d1192](#), [d1297](#)
`\large` [d238](#),
[d999](#), [d1065](#), [d1071](#), [d1301](#), [d1676](#)
`\leaders` [d1644](#)
`\leavevmode` ... [b104](#), [d1165](#), [d1270](#),
[d1290](#), [d1640](#), [d1676](#), [d1694](#), [d1709](#)
`\leftmargin` [d104](#),
[d180](#), [d190](#), [d200](#), [d212](#), [d222](#),
[d232](#), [d1330](#), [d1356](#), [d1374](#),
[d1389](#), [d1397](#), [d1400](#), [d1403](#),
[d1445](#), [d1446](#), [d1447](#), [d1472](#),
[d1473](#), [d1474](#), [d1479](#), [d1481](#),
[d1493](#), [d1498](#), [d1502](#), [d1781](#), [d1782](#)
`\leftmargini` [d180](#), [d190](#), [d200](#), [d212](#),
[d222](#), [d232](#), [d1330](#), [d1346](#), [d1356](#)
`\leftmarginii` ... [d1330](#), [d1374](#), [d1375](#)
`\leftmarginiii` .. [d1330](#), [d1389](#), [d1390](#)
`\leftmarginiv` ... [d1330](#), [d1397](#), [d1398](#)
`\leftmarginv` [d1330](#), [d1400](#), [d1401](#)
`\leftmarginvi` ... [d1330](#), [d1403](#), [d1404](#)
`\leftmark`
[d827](#), [d829](#), [d878](#), [d884](#), [d936](#), [d938](#)
`\leftskip` [d1446](#), [d1473](#),
[d1481](#), [d1637](#), [d1642](#), [d1696](#), [d1711](#)
`\lineskip` [d277](#), [d994](#), [d1066](#)
`\linewidth` [d1272](#), [d1291](#)
`\list` [d1439](#), [d1466](#),
[d1479](#), [d1491](#), [d1496](#), [d1502](#), [d1779](#)
`\listfigurename`
..... [d1752](#), [d1754](#), [d1755](#), [d1855](#)
`\listoffigures` [d1748](#)
`\listoftables` [d1761](#)
`\listparindent`
[d106](#), [d1484](#), [d1492](#), [d1496](#), [d1497](#)
`\listtablename`
..... [d1765](#), [d1767](#), [d1768](#), [d1855](#)
`\llap` [d1450](#), [d1476](#)
- M**
- `\m@th` [d980](#), [d1022](#), [d1023](#), [d1030](#), [d1644](#)
`\mainmatter` [d1151](#)
`\makelabel` [d1450](#), [d1476](#), [d1486](#)
`\maketitle` [d978](#)
`\maketombowbox` [d73](#), [d77](#), [d81](#)
`\marginparpush` [d584](#)
`\marginparsep` [d584](#)
`\marginparwidth` [d596](#)
`\markboth`
[d831](#), [d833](#), [d841](#), [d858](#), [d889](#),
[d891](#), [d899](#), [d917](#), [d1188](#), [d1207](#)
`\markright` [d836](#), [d848](#),
[d860](#), [d865](#), [d894](#), [d906](#), [d919](#), [d924](#)
`\mathbf` [d1600](#), [d1618](#)
`\mathcal` [d1622](#)
`\mathgt`
[d1595](#), [d1600](#), [d1608](#), [d1609](#), [d1614](#)
`\mathit` [d1619](#)
`\mathmc`
[d1592](#), [d1599](#), [d1604](#), [d1605](#), [d1613](#)
`\mathnormal` [d1623](#)
`\mathrm` [d1599](#), [d1615](#)
`\mathsf` [d1616](#)
`\mathtt` [d1617](#)
`\maxdepth` [d318](#)
`\mc` [d1613](#)
`\mcdefault` [b19](#), [b22](#)
`\mcfamily` .. [b32](#), [b40](#), [b46](#), [b52](#), [d1613](#)
`\mddefault` [b23](#)
`\medskipamount` [d282](#)
`\MessageBreak` . [a31](#), [a33](#), [a34](#), [a35](#), [a37](#)
`\minute` [d12](#), [d72](#)
`\mit` [d1622](#)
`\mkern` [d1644](#)
`\month` [d71](#), [d1833](#), [d1837](#), [d1843](#), [d1847](#)
- N**
- `\NeedsTeXFormat` [b2](#)
`\newblock` [d109](#), [d1775](#)
`\newcount` [d1828](#)
`\newcounter` [d2](#), [d1107](#), [d1109](#), [d1110](#),
[d1112](#), [d1113](#), [d1114](#), [d1115](#),
[d1116](#), [d1504](#), [d1505](#), [d1531](#), [d1532](#)
`\newdimen` [d1629](#), [d1632](#), [d1773](#)
`\newenvironment` [d950](#),
[d961](#), [d1077](#), [d1087](#), [d1478](#),
[d1489](#), [d1495](#), [d1501](#), [d1525](#),
[d1528](#), [d1552](#), [d1555](#), [d1776](#), [d1798](#)

- `\newif` d3,
 d5, d6, d9, d10, d11, d15, d16, d17
`\newlength` d1558, d1559
`\newpage` d765,
 d766, d770, d771, d777, d778,
 d782, d783, d788, d789, d793,
 d794, d954, d958, d967, d972,
 d1037, d1058, d1232, d1235, d1237
`\nobreak` d1193, d1196, d1222,
 d1276, d1281, d1642, d1643,
 d1645, d1678, d1680, d1697, d1712
`\noindent`
 d980, d1025, d1029, d1819, d1823
`\normalbaselineskip` ... d1441, d1468
`\normalcolor` d1646
`\normalfont` d1190, d1209,
 d1220, d1227, d1269, d1289,
 d1297, d1301, d1305, d1309,
 d1313, d1457, d1488, d1613,
 d1614, d1615, d1616, d1617,
 d1618, d1619, d1620, d1621, d1646
`\normallineskip` d277
`\normalmarginpar` d1876
`\normalsize` . d139, d1305, d1309, d1313
`\null` d988,
 d1001, d1003, d1058, d1079,
 d1085, d1176, d1235, d1237, d1642
`\number` . d71, d1832, d1833, d1834,
 d1836, d1837, d1838, d1842,
 d1843, d1844, d1846, d1847, d1848
`\numberline` d1256, d1632
- O**
- `\oddsidemargin` d596
`\onecolumn` d953, d965, d1175,
 d1659, d1750, d1763, d1807, d1873
`\overfullrule` d116, d117
- P**
- `\p@enumii` d1432
`\p@enumiii` d1432
`\p@enumiv` d1432, d1785
`\p@thanks`
 . d978, d985, d1008, d1047, d1062
`\pagenumbering` .. d1154, d1157, d1867
`\pagestyle` d1865, d1866
`\paperheight` .. d19, d22, d25, d28,
 d32, d35, d38, d41, d45, d48,
 d51, d54, d64, d65, d409, d412,
 d415, d525, d526, d529, d565, d677
`\paperwidth` ... d20, d23, d26, d29,
 d33, d36, d39, d42, d46, d49,
 d52, d55, d65, d66, d408, d411,
 d416, d523, d524, d528, d647, d657
`\par` d109, d980,
 d991, d997, d999, d1000, d1019,
 d1063, d1069, d1073, d1085,
 d1166, d1193, d1195, d1212,
 d1214, d1221, d1228, d1315,
 d1322, d1568, d1569, d1647,
 d1679, d1697, d1712, d1808, d1811
`\paragraph` d1306
`\paragraphmark` d1099
`\parfillskip` d1637, d1675, d1693, d1708
`\parindent` d280,
 d1025, d1029, d1189, d1219,
 d1267, d1287, d1638, d1674,
 d1693, d1708, d1803, d1818, d1822
`\parsep` d107, d182, d183, d192, d193,
 d202, d203, d214, d215, d224,
 d225, d234, d235, d1358, d1363,
 d1368, d1378, d1382, d1386,
 d1388, d1394, d1443, d1470, d1499
`\parskip`
 d280, d1443, d1470, d1484, d1804
`\part` d1163
`\partopsep` d1352, d1395, d1484
`\penalty` d1698
`\pfmtname` a23
`\pfmtversion` a2, a12, a23
`\plEndIncludeInRelease`
 b42, b48, b54, b107, b111
`\plIncludeInRelease`
 b35, b43, b49, b98, b108
`\pltx@cleartoevenpage` d762
`\pltx@cleartoleftpage` ... d762, d798
`\pltx@cleartooddpage`
 d762, d963, d1153, d1156
`\pltx@cleartorightpage` .. d762, d800
`\postbreakpenalty` c8,
 c9, c12, c15, c26, c40, c44, c46,
 c49, c51, c53, c54, c56, c58, c60,
 c62, c64, c66, c73, c74, c111,
 c113, c115, c117, c119, c121,
 c127, c128, c136, c159, c160, c172
`\postchaptername` d1149, d1851
`\postpartname`
 d1184, d1192, d1203, d1211, d1851
`\ppatch@level` a23

- `\prebreakpenalty` . c6, c7, c10, c11,
 c13, c14, c16, c17, c18, c19, c20,
 c21, c22, c23, c24, c25, c28, c29,
 c30, c31, c32, c33, c34, c35, c36,
 c37, c38, c39, c41, c42, c43, c45,
 c47, c48, c50, c52, c55, c57, c59,
 c61, c63, c65, c67, c68, c69, c70,
 c71, c72, c75, c76, c77, c78, c79,
 c80, c81, c82, c83, c84, c85, c86,
 c87, c88, c89, c90, c91, c92, c93,
 c94, c95, c96, c97, c98, c100,
 c101, c102, c103, c107, c108,
 c109, c110, c112, c114, c116,
 c118, c120, c122, c123, c124,
 c125, c126, c129, c130, c131,
 c132, c133, c134, c135, c137,
 c138, c139, c140, c141, c142,
 c143, c144, c145, c146, c147,
 c148, c149, c150, c151, c152,
 c153, c154, c155, c161, c162,
 c163, c167, c168, c169, c170, c171
`\prechaptername` d1148, d1851
`\prepartname`
 d1184, d1192, d1203, d1211, d1851
`\ProcessOptions` d132
`\protect`
 d980, d1256, d1262, d1263, d1655
`\protected` b101, b104
`\protected@write` d1650
`\protected@xdef` d979
`\ProvidesFile` b8, b114, b115, b116, b117
`\ProvidesPackage` b3
`\ps@bothstyle` d875
`\ps@footnombre` d817, d876, d912
`\ps@headings` d824
`\ps@headnombre` d810, d825, d854
`\ps@jpl@in` d804, d809, d811,
 d818, d825, d854, d876, d912, d934
`\ps@myheadings` d934
`\ps@plain` d803, d809, d934
- Q**
- `\quotation` d1095
`quotation (environment)` d1495
`quote (environment)` d1501
- R**
- `\raggedbottom` d1868
`\raggedright` d1189, d1219, d1268, d1288
`\reDeclareMathAlphabet` d1599, d1600
`\refname` d1777, d1858
`\refstepcounter` d1182, d1201, d1253
`\renewenvironment` d1435, d1462
`\rensuji` d1118, d1119,
 d1121, d1122, d1124, d1126,
 d1128, d1130, d1318, d1327,
 d1409, d1410, d1411, d1412,
 d1507, d1510, d1534, d1537, d1652
`\RequirePackage` d137
`\RequirePackageWithOptions` b5
`\reset@font` d806
`\rightmargin` d1482, d1493, d1498, d1502
`\rightmark` d828, d830, d856, d857,
 d880, d886, d913, d915, d937, d939
`\rightskip`
 d1482, d1637, d1674, d1693, d1708
`\rm` d1613
`\rmfamily` d1615
`\romannumeral` d1438, d1465
- S**
- `\sbox` d1564, d1565
`\sc` d1619
`\scriptsize` d238
`\scshape` d1621
`\secdef` d1168, d1177, d1249
`\section` d1089, d1294,
 d1662, d1754, d1767, d1777, d1800
`\sectionmark` d833, d848, d860,
 d891, d906, d919, d942, d1099
`\selectfont` b30, b31
`\setcounter` d18, d21, d24,
 d27, d31, d34, d37, d40, d44,
 d47, d50, d53, d752, d753, d754,
 d755, d956, d970, d974, d1005,
 d1043, d1105, d1106, d1316,
 d1317, d1323, d1324, d1624, d1625
`\SetSymbolFont` d1593
`\settowidth` d1780
`\sf` d1613
`\sfcode` d1791
`\sffamily` d1616
`\skip` d690, d691, d692, d1580
`\sl` d1619
`\sloppy` d1787, d1871
`\slshape` d1620
`\small` d174, d983, d1091
`\smallskipamount` d282
`\subitem` d1808
`\subparagraph` d1310

- `\subparagraphmark` [d1099](#)
`\subsection` [d1298](#)
`\subsectionmark` d836, d894, d943, [d1099](#)
`\subsubitem` [d1808](#)
`\subsubsection` [d1302](#)
`\subsubsectionmark` [d1099](#)
`\symmincho` d1594
- T**
- `\tabbingsep` [d1579](#)
`\tabcolsep` [d1576](#)
`table` (environment) [d1552](#)
`table*` (environment) [d1552](#)
`tablename` d1550, d1551, [d1861](#)
`\tableofcontents` [d1657](#)
`\tate` d83, d987
`\textasteriskcentered` d1460
`\textbullet` d1452
`\textcircled` d1455
`\textendash` d1457
`\textfloatsep` [d693](#)
`\textfraction` [d758](#)
`\textgt` [b32](#)
`\textheight` [d441](#), d569, d648, d659, d987
`\textmc` [b32](#)
`\textperiodcentered` d1461
`\textwidth`
 [d323](#), d568, d649, d660, d678, d987
`\thanks` d985, d986, d1006, d1044, d1061
`thebibliography` (environment) . [d1776](#)
`\thechapter` d844,
 d868, d902, d927, [d1117](#), d1254,
 d1256, d1274, d1327, d1328,
 d1510, d1517, d1537, d1544, d1587
`\theenumi`
 [d1407](#), d1421, d1427, d1432, d1433
`\theenumii` [d1407](#), d1422, d1428, d1433
`\theenumiii` [d1407](#), d1423, d1429, d1434
`\theenumiv` [d1407](#), d1424, d1430, d1786
`\theequation` [d1583](#)
`\thefigure` [d1504](#), d1523, d1524
`\thefootnote` d980, d1021
`theindex` (environment) [d1798](#)
`\thepage` d806, d812,
 d813, d814, d815, d819, d820,
 d821, d822, d827, d828, d829,
 d830, d856, d857, d879, d881,
 d885, d887, d914, d916, d936,
 d937, d938, d939, d1652, d1653
`\theparagraph` [d1117](#)
- `\thepart`
 [d1117](#), d1184, d1192, d1203, d1211
`\thesection` d834, d849, d861, d892,
 d907, d920, [d1117](#), d1318, d1319
`\thesubparagraph` [d1117](#)
`\thesubsection` d837, d895, [d1117](#)
`\thesubsubsection` [d1117](#)
`\thetable` [d1531](#), d1550, d1551
`\thispagestyle`
 d765, d770, d777, d782,
 d788, d793, d955, d969, d1041,
 d1174, d1235, d1237, d1246, d1803
`\thr@@` d1436, d1463
`\time` d12, d14
`\tiny` [d238](#)
`\title` [d945](#), d1013, d1052
`\titlepage` d1078
`titlepage` (environment) [d949](#)
`\toclineskip` [d1629](#), d1636
`\today` d948, [d1829](#)
`\tombowdatefalse` d75, d79
`\tombowdatetrue` d68
`\tombowtrue` d68, d75, d79
`\topfraction` [d756](#)
`\topmargin` [d539](#), d679
`\topsep` d181, d191,
 d201, d213, d223, d233, d1359,
 d1364, d1369, d1377, d1381,
 d1385, d1391, d1392, d1393,
 d1396, d1441, d1442, d1468, d1469
`\topskip` [d291](#), d321, d508, d537, d1484
`\tt` [d1613](#)
`\ttfamily` d1617
`\two@digits` d71, d72
`\twocolumn` d958,
 d972, d1034, d1240, d1666,
 d1757, d1770, d1800, d1801, d1870
`\typeout` d1254
- U**
- `\updefault` b24
`\uppatch@level` a25, a26
`\upshape` b40, b46, b47, b52
`\usecounter` d1449, d1784
- V**
- `verse` (environment) [d1489](#)
`\vfil` d988, d1001,
 d1003, d1079, d1085, d1176, d1232
`\voidb@x` d173

<code>\vspace</code>	d1093	c252, c253, c254, c255, c256, c257, c258, c259, c260, c261, c262, c263, c264, c265, c266, c267, c268, c269, c270, c271, c272, c273, c274, c275, c276, c277, c278, c279, c280, c281, c282, c283, c284, c285, c286, c287, c288, c289, c290, c291, c292, c293, c294, c295, c296, c297, c298, c299, c300, c301, c302, c303, c304, c305, c306, c307, c308, c309, c310, c311, c312
W		
<code>\widowpenalty</code>	d1790	
X		
<code>\xkanjiskip</code>	b94	
<code>\xspcode</code>	c175,	
c176, c177, c178, c179, c180,		
c181, c182, c183, c185, c186,		
c187, c188, c189, c190, c191,		
c192, c193, c194, c195, c196,		
c197, c198, c199, c200, c201,		
c202, c203, c204, c205, c206,		
c207, c208, c209, c210, c211,		
c212, c213, c214, c215, c216,		
c217, c218, c219, c220, c221,		
c222, c223, c224, c225, c226,		
c227, c228, c229, c230, c231,		
c232, c233, c234, c235, c236,		
c237, c238, c239, c240, c241,		
c242, c243, c244, c245, c246,		
c247, c248, c249, c250, c251,		
Y		
<code>\year</code>	d71, d1828, d1832, d1842	
<code>\yoko</code>	d980, d1023	
セ		
<code>\西暦</code>	<u>d1825</u>	
ワ		
<code>\和暦</code>	d1825	